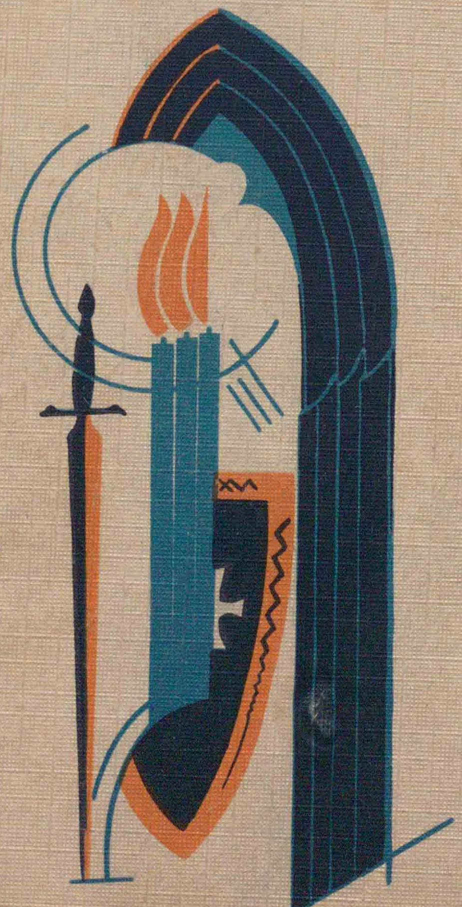
文部省檢定濟

山﨑忠雄著

新編 西洋歷史

改版



帝國書院

375.9
Ya·13
資料室

43032
教科書文庫
4
230
42-1933
20000
64446

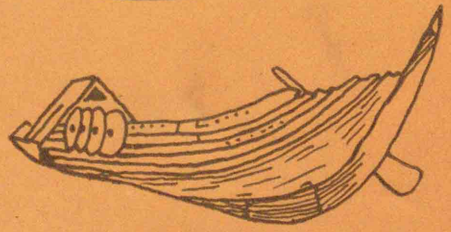
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak

昭和八年二月二日
文部省檢定濟
高等女學校歷史科

山崎忠雄著

新編 西洋歴史

改版



ノルマンの船

帝國書院

教科書文庫
4
230
42-1933
2000064446

広島大学
教
64446
図書

広島大学図書
2000064446

資料室
375.9
Yd 13

改訂の辭

一、前版の緒言の劈頭に

『從來の西洋歷史教科書は、該歷史の主要なる地位の一を占むる宗教的教材の記述に於て、的確ならざるもの多々あり、之れ恐らく羅馬(ロマン)公教(カトリック)(舊教)に對する智識の缺如に因るものである。著者は正確なる典據(邦書に參考すべきもの少く多く英佛獨の原書を涉獵)により此の缺を補ひ、以て公正なる判斷の下に歷史本來の使命を果すことに努めた』。

と敍べ、新史實を記載したるに、之れ及び其他に對し、多數教官の質問を受けしにより、本書は右に就き出來得るだけ平易・懇切に之が說明をなすことに力めた。

二、教科書は簡明を尚ぶこと勿論なれど、簡約に失しては却つて學習者の了解を妨ぐるものであるから、本書に於ては挿畫を縮小

し且つ鮮明なる彫刻に代へ、以て字數を增加し前版よりも詳細に記述することに力めた。

三、尚ほ本書に於ては學習者の便を計る爲め、(1)稍〻難解の嫌ある語句に就ては振假名或は解釋を附し、(2)卷末には詳細なる索引を添附した。

四、我國西洋文化の影響を受くること最も著しき當今、西洋歷史は常識收得の鎖鑰たるの觀を益〻深からしむるものがあるので、本書に於ては更に斬新なる教材を增加した。

昭和七年八月修正第二版の發行に當りて

著者識

例言

(一)處々に小活字を以て記載せる常識的教材及び興味ある逸話は學習者の自習に俟つを本體とし以て教授時間を有効に利用せられんことを期待す。

(二)史實の通觀概括は各編又は要所の前に置き從來後に載せられて稍〻もすればこれが利用を等閑にせられてゐた缺を補ふに力めたもの。之は該教材取扱ひの前及び後に反復通讀せしめらるゝを便とす。

(三)外國個有名詞の表し方は主として史學會調査の外國地名人名稱呼覽に據り、傍に洋語を併記した。

(四)洋語は主として英語を用ひ、特殊のものは他の外國語を採用した。

(五)年代は基督紀元を用ゐ紀元前にはB.C. Before Christ の略號を附した。

(六)知名の人物・戰役・條約等は時代を明確にする爲め、それ〴〵適當な年代を併記した。

(七)本文中挿入の地圖の記載は讀解に便する爲特に左書とした。

(八)卷末に年表及び索引を附して學習に便せんことを圖つた。

昭和七年九月

著者識

新編 西洋歴史 改版目次

第一編 上古史（太古よりゲルマニヤ民族の大移動頃―紀元三七五まで）

第一章 東方諸國の興亡……一
第二章 希臘の興亡……八
第三章 希臘の文明……一八
第四章 羅馬の盛衰……二三
第五章 羅馬の文明……三二

第二編 中古史（ゲルマニヤ民族の大移動の頃三七五より地理上の發見頃一五〇〇まで）

第六章 ゲルマニヤ民族の建國 東西兩羅馬帝國……三七
第七章 サラセン帝國……四二
第八章 羅馬公教會 フランク王國 ノルマンの活動……四六
第九章 羅馬法皇と神聖羅馬帝國 十字軍……五二
第十章 中世の文明……五八

第十一章　西歐羅巴諸國の興起……六四
第十二章　土耳其の興起　東羅馬帝國の滅亡……七一
第十三章　文藝復興　地理上の發見……七三

第三編　近古史（宗教改革の頃（一五一七）より亞米利加合衆國獨立の頃（一七八三）まで）

第十四章　宗教改革……八一
第十五章　西班牙の强大　和蘭の獨立　英蘭の興起……八八
第十六章　佛蘭西の宗教的內亂　三十年戰役……九三
第十七章　和蘭の隆盛　英蘭の革命……九七
第十八章　佛蘭西の强盛……一〇三
第十九章　露西亞の勃興……一〇六
第二十章　普魯西の勃興……一一一
第二十一章　英佛兩國植民地の衝突　北米合衆國の獨立……一一五
第二十二章　第十八世紀歐洲諸國の情勢及び風潮　近古の文明……一一九

第四編　近世史（佛蘭西大革命の頃（一七八九）より第十九世紀末頃（一九〇〇）まで）

第二十三章　佛蘭西の大革命……一二四
第二十四章　ナポレオン一世の偉業……一三二
第二十五章　ナポレオン一世の沒落　ウィーン會議……一三七
第二十六章　神聖同盟　亞米利加諸國及び希臘の獨立……一四〇
第二十七章　佛蘭西の政變　ナポレオン三世……一四三
第二十八章　伊太利の統一……一四八
第二十九章　南北戰役　墨西哥の內亂……一五〇
第三十章　獨逸の統一……一五三
第三十一章　露土戰役　伯林會議……一五七
第三十二章　歐羅巴諸國の均勢……一五九
第三十三章　阿弗利加及び太平洋方面に於ける列强の經營……一六一
第三十四章　近世の文明……一六五

第五編　現代史（一九〇〇頃より現在まで）

第三十五章　世界大戰勃發の歐羅巴……一六九
第三十六章　世界大戰役……一七三

目次

第三十七章　世界大戰後の世界……一九

西洋文明の由來

希臘地方固有の文明　エーゲ海を中心とするミノス・ミケネの兩文明があつたといふ。

新編 西洋歷史 改版

第一編　上古史（太古よりゲルマニヤ民族の大移動頃(三七五頃)まで）

第一章　東方諸國の興亡

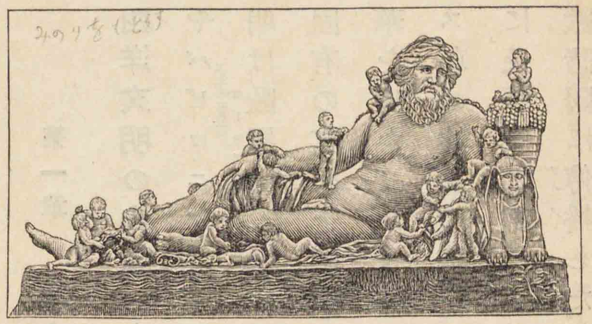
西洋文明の由來　今から凡そ五千年前、埃及(エヂプト Egypt)やバビロニヤ(Babylonia)等に源を發した東方諸國の文明は、歐羅巴(ヨーロッパ)の東なる希臘(ギリシャ Greece)に傳はり、此の地方固有の文化を刺戟して、こゝに大いに文明の華を咲かせた。一時、その中心は、プトレメウス(Ptolemaeus)朝の埃及に移つたが、羅馬(ローマ Rome (Roma))といふ國が興るに及び、その都が中心となつて、希臘文化を西歐諸國に傳播(デンパ)した。その滅亡後は、東歐なる

古代東方諸文化中心移動圖

ナイル河神の像
希臘末期の彫刻で、ナイル河を神化して埃及の國土の豐饒を表現したもの。羅馬ヴァチカン博物館所藏。

フキレ島の現景
イシス神の神殿此の島は減水時は丘となる。
氾濫期　七・八・九・十月
耕作期　十一・十二・一・二月
收穫期　三・四・五・六月

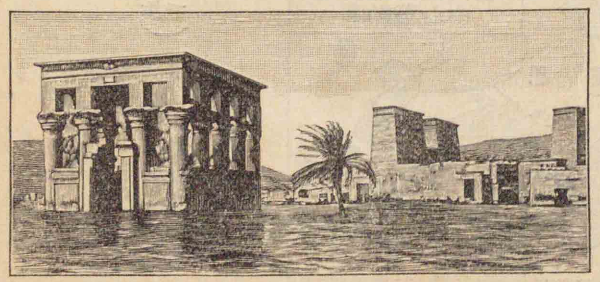
東羅馬帝國で文化が維持され、所謂ビザンチン(Byzantine)文化をなした。かくて中世紀の間、教會の手で維持された獨特の文藝と、近古期に至り、文藝復興(Renaissance)の新運動により西歐に復活した希臘・羅馬の文化とが、漸次發達して現在の西洋文化を形成したのである。



ナイル河神の像

㊀ 埃及

「埃及(Egypt)はナイル(Nile)河の賜である。」(希臘の史家ヘロドツス(Herodotus))といはれたやうに、阿弗利加(アフリカ)の北部なる埃及は、ナイル河の定期氾濫によつて下流沿岸の地は沃土を得、氾濫・耕作・收穫の三期の畫然とし、氣候の溫

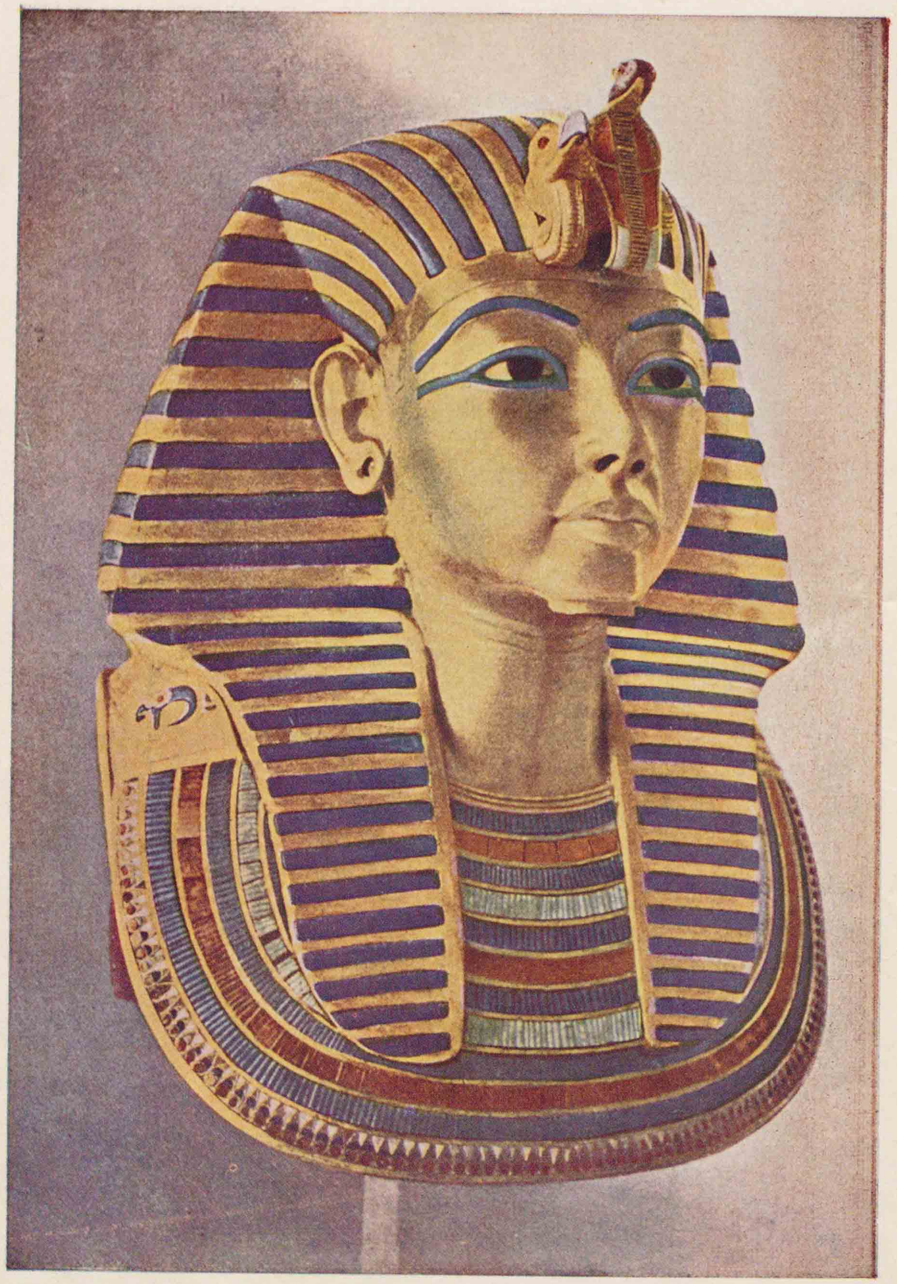


ナイル河氾濫時のフキレ島神殿

ツタンカーメン(Thutankamen)王の黄金の假面(カメン)

「光は東より」！　實に西洋文明も東方諸國に源を發したものである。殊にその埃及の遺跡を探索(タンサク)する者は等しく、その燦爛(サンラン)たる文化に驚歎するのである。ツタンカーメン王(B.C.一三九〇—一三八〇在位)は、古代埃及の隆盛を極めた第十八王朝の第十二代の王である。この王の貴重な遺物が英國の埃及研究家カーナーボン卿(Lord Carnerbon)・ハワード＝カーター(Howard Carter)等によつて「諸王の谷」(Biban el moluk)と稱する王の墳墓(フンボ)から發掘された(一九二二)。その王のミイラの顔面を掩つた黄金の假面が即ち此の圖である。幼王の面目躍如(ヤクジョ)たるものが伺はれる。

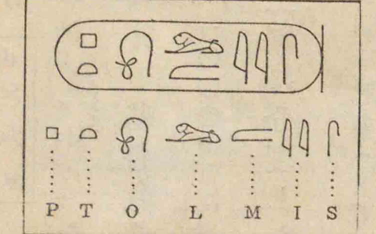
此の外、黄金の棺・銘木(メイボク)奇玉を鏤(チリバ)めた小函(コバコ)・金銀珠玉で飾つた椅子等は共にカイロの博物館に藏されてゐる。此所に之等テル＝エル＝アマルナ(Tell-el-Amarna)(當時の都)美術の粹を目撃する者は當時の開明のほどを偲ぶと同時に、その文化三千數百年後の今日のそれと遜色なきに驚き、且つその精藝に對しては近代藝術も顔色なきを感ずるであらう。



埃及の文明
宗教
建築
學術

暖と相俟つて農業發達し、約五千年前、既に文明國を形成した。その王ラメス二世(Ramses)の時代(B.C.一三五〇)は最も盛であつた。

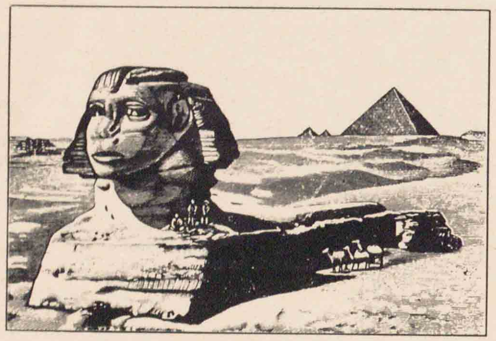
埃及の文明　高僧は高尚な信仰を有し、唯一の神を説いたが、多數人民は之を解せず、天體や禽獸(キンジウ)を神として崇拜し國王を太陽の子として尊敬し、靈魂の不滅を信じて屍體を木乃伊(ミイラ)(Mummy)として保存した。埃及人は、ピラミッド(Pyramid)・スフィンクス(Sphinx)・オベリスク(Obelisk)等の雄大なものを造り天文學數學醫學等の學術を究め、太陽暦や表音繪文字(Hieroglyph)等を發明した。



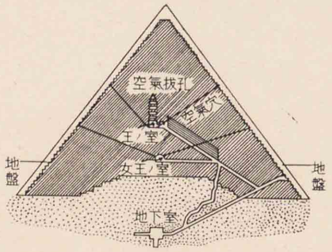
Ptolmis (Ptolemy) 音標文字

㈡バビロニヤ　チグリス(Tigris)・エウフラテス(Euphrates)兩河の流域も、また土地が肥沃で、氣候も溫暖であつたから、夙に開け、バビロニヤ人は、埃及と同じ頃(約五千年前)に王國を建てた。そのハムラビ(Hammurabi)王の時代(B.C.二二五〇頃)は最も盛であつた。ハムラビ王は法典を制定し、メソポタミヤ(Mesopotamia)及びシリヤ(Syria)を領有した。

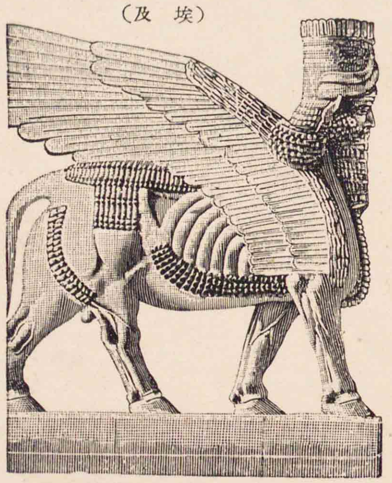
古代東方諸國文化の遺物



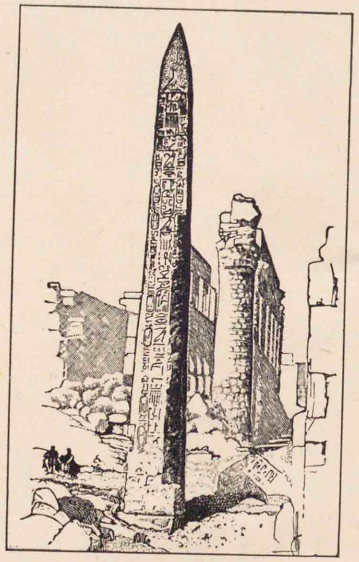
スフィンクスとピラミッド（埃及）



ピラミッドの斷面圖

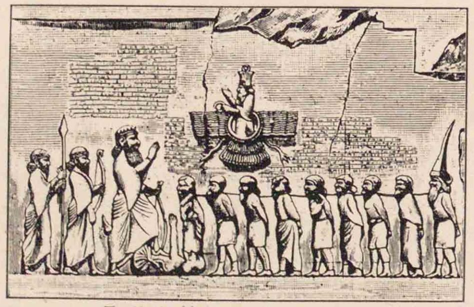


サルゴン宮殿王の有翼牝牛像（アッシリヤ）



オベリスク（埃及）

ハムラビ王の法典を刻せる石碑（バビロニヤ）



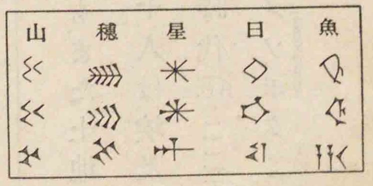
ダリウス大王の捕虜引見（波斯ベヒスタン岩面彫刻）

バビロニヤの文明　學術工藝

楔形文字　楔形文字が象形文字から發達變化したさまを示す。

ヘブライの文明

バビロニヤの文明　この國人も、天文學・數學等を究め、太陰曆・六十進法を發明し、建築・彫刻・刺繡に長じ、楔形文字(Cuneiform)を用ひて、多くの記錄を粘土板に書いた。第二十世紀の初め佛蘭西の學者モルガンは、スサで世界最古の法典と認められるハムラビ法典を發掘した。之によつても、その文化發達の程がうかがはれる。



楔形文字

㊂ヘブライ　埃及の盛であつた頃、カナーン(Canaan)（死海・ヨルダン河の周圍、今のパレスチナ地方(Palestine)）の地に國を建てたヘブライ人(Hebrews)は、唯一の神イェホヴァ(Jehovah)を信ずる一神教（ユダヤ教）を起した。その聖典、舊約聖書(The Old Testament)は後の基督教の根據となつた。王ダヴィッド(David)及びソロモン(Solomon)の時代（B.C.一〇〇〇頃）は最も盛であつたが、その死後イスラエル(Israel)・ユダヤ(Judaea)の二王國に分裂した。

ヘブライの文明　ヘブライ人の特長は宗教心に秀でた點であつた。怖るべき饑饉の爲埃及に移民してゐたヘブライ人は、埃及人の虐待に耐えかね、モーゼ(Moses)に率ひられてこの地を逃れた（B.C.一三〇〇頃）。そのシナイ(Sinai)半島に達した時、神より授かつたとい

イェルサレム聖堂の外壁　昔を偲ばれる巨大な聖堂の廢墟の下にユダヤ人が熱烈な祈禱を捧げてゐる。

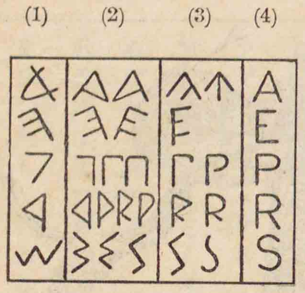
アルファベットの發達　(1)フェニキヤ文字　(2)希臘文字　(3)羅馬古文字　(4)羅馬新文字

フェニキヤ人の貢獻

ふ「十誡」は現今基督教國の道德の根本となつてゐる。その十誡を刻んだ二枚の石板は「契約の櫃（ヒツ）」といふに納められ後には、ソロモン王の造つた美しい聖堂に安置せられたといふ。

イェルサレム聖堂の外壁

㊃フェニキヤ　地中海の東岸シリヤの地に、フェニキヤ（Phoenicia）といふ多數都市の聯合から成る小國があつた。この國人は、冒險・進取の氣象に富み、航海術に長じ、夙に通商貿易を營み、植民地を開き、知識の傳播・經濟發展の爲に貢献した。又その發明にかかる簡易な表音文字は、今日の西洋文字（アルファベット Alphabet）の基となつた。



アルファベットの發達

㊄アッシリヤ　バビロニヤ王國の植民地（チグ

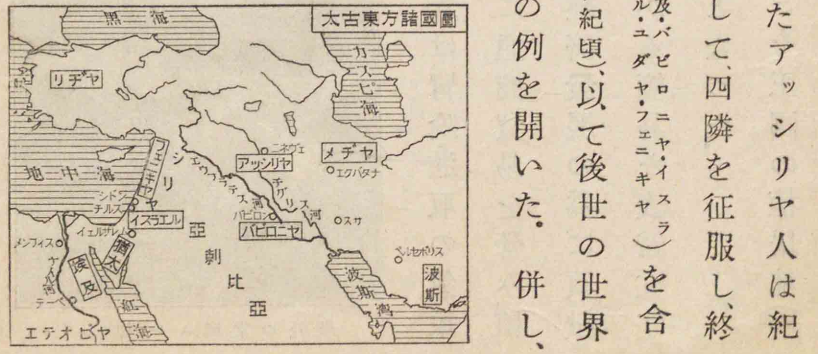
アッシリヤ人の諸國征服

リス・エウフラテス兩河の上流地方)に起つたアッシリヤ人は紀元前十五世紀頃獨立して、四隣を征服し、終に太古の文明諸國(埃及・バビロニヤ・イスラエル・ユダヤ・フェニキヤ)を含む大國を建設し(B.C.七世紀頃)、以て後世の世界的大帝國建設の第一の例を開いた。併し、國民の性質が殘忍で、征服民を虐待した爲、内亂絶間なく、且つ外寇に惱まされて、國勢衰へ、遂にメヂヤ人(Media)・バビロニヤ人の聯合軍に滅ぼされた(B.C.六〇六頃)。

アッシリヤ王の獅子狩

四國對立波斯の統一

六 波斯 アッシリヤ滅亡の後は、四王國(新バビロニヤ・メヂヤ・リヂヤ・埃及)が對立してゐたが、やがて波斯(ペルシヤ Persia)が起つて悉く之を平定し、空前の大統一を遂げた。



ダリウス大王

ペルセポリスにある彫刻像。從者の一人は傘をさしかけ、一人は拂子を以て蠅を拂つてゐる。

ダリウス大王(621—485B.C.)

ダリウス(Darius)王の時(B.C.五〇〇頃)は、その領土東は印度、西は希臘と境を接するに至つた。波斯人は武勇・寛仁にして、忠誠を重んじ、統一を愛するの性質を有し、その奉ずる宗教の感化を受け、優秀な大國民となつた。たま〱西方希臘の興るに及び、東西の大衝突(波斯戰役 第二章參照)を見るに至つた。

ゾロアストル教

ゾロアストル教 波斯の宗教ゾロアストル(Zoroaster)教(支那の祆(ケン)教)は二元教で、善惡の二神があつて善神をアフラ=マツダ(Ahura-Mazda)と呼び、光明界を支配して總て善の起原であり、惡神はアングロ=マイニウス(Angro-Mainyus)といつて暗黑界を司り、總て惡の根元であるといふ。此の兩神は常に爭鬪すれども、最後の勝利は善神にありとなし、人はその善神に從ひ、正道を履まねばならぬとする。波斯人はその感化を受け卒直忠誠であつた。我が國で用ひられてゐる電球「マツダ、ランプ」は此の光明の象徴(シンボル)たる善神マツダの名を採つたものであるといふ。

第二章 希臘(ギリシヤ)の興亡

希臘史 東方の波斯に對立して西方に希臘が興つた。各〻その特殊の文化を發揮してゐたが、その衝突するに及び、兩國の歴史は密接な關係を結ぶに至つた。希臘は、アテネを中心として、上古期中、最も優れた文明國となつたが、その諸邦間に、激しい爭覇の内亂が起つて大に紊れた。然るに、北方マケドニヤ國に、アレクサンドル大王が出るに及び、希臘諸邦を屈服し、且つ之等を率ゐて波斯を遠征し、大統一の實を擧げ、こゝに世界史上特筆すべき東西文化の融合が出來た。

希臘の土地と住民

オリンピヤの大祭

㈠ 希臘の土地・住民 希臘(ギリシヤ)(Greece)とは、バルカン(Balkan)半島の南部、ピンドス(Pindus)山脈の谷が分つ聚落(シユウラク)(むらざと)に發達した小都市國家(City State)の總稱である。その住民は、紀元前十二世紀頃、北より移住したもので、ヘレネス(Hellenes)族と呼び、愛國心強く、文藝を好み、外敵に對してはよく一致團結することもあつた。これを釀成(ヂヤウセイ)(つくりなす)した主な力の一は、オリンピヤ(Olympia)の大祭であつた。大祭には、本國は勿論、植民市の人民までも集り、文武の技を競つたので、文化發達の助ともなつた。

オリンピヤの大祭 西暦紀元前七七六年(第一回大祭の年、希臘の紀元)頃より、オリンピヤで、希臘の主神ゼウス(Zeus)の祭禮が催された。大祭は、四年毎に行はれて五日間續く。その間、希臘諸國の人民は戰をやめて參拜し、集つた選手等は、競走・飛越・槍投・角力・平圓盤抛(ナゲ)などの競技を行ふ。優勝者は、橄欖樹の冠を授けられるのみなれど、その名譽は非常なもので、歸郷の時は、恰も凱旋將軍の如く歡迎された。

オリンピック競技會の起原

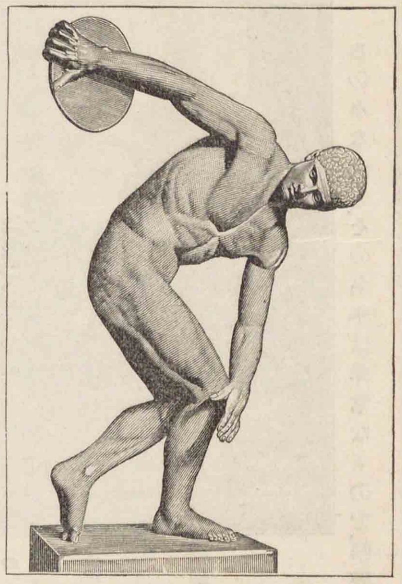
國際オリンピック競技會

第一回—一八九六年 希臘アテネ
第二回—一九〇〇年 巴里
第三回—一九〇四年 米國セントルイス
第四回—一九〇八年 倫敦
第五回—一九一二年 瑞典ストックホルム
第六回—一九一六年 伯林—中止
第七回—一九二〇年 白耳義アントワープ
第八回—一九二四年 巴里
第九回—一九二八年 和蘭アムステルダム
第十回—一九三二年 米國ロサンジエルス

オリンピヤの競走

圓盤を投げる人

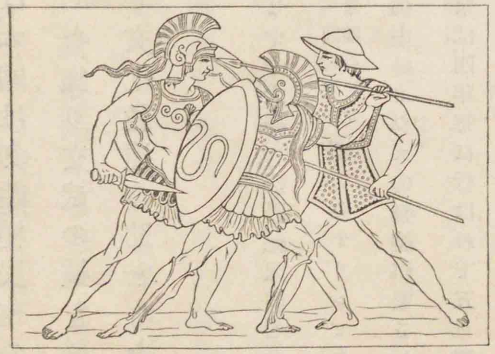
紀元前四五〇年頃の希臘の彫刻家ミロンの傑作の模造。羅馬ヴァチカン博物館所藏。



圓盤を投げる人

現今の國際オリンピック(Olympic Game)競技會は、この競技の風を第十九世紀末に復興したものである。

㈡スパルタの興起　希臘の諸都市中で、最も盛んで代表的のものは、スパルタ(Sparta)とアテネ(Athens (Athenae))とである。スパルタは、希臘の南部、ペロポネスス(Peloponnesus)半島(今のモレア(Morea)半島)東南部にあつて、ドリヤ族(Dorians)の建てたものである。その貴族政治を行ふ必要よりリクルグス(Lycurgus)の立法により、最も嚴格な武士教育を施した。かくて紀元前六世紀の頃、希臘の覇(ハ)權(ケン)を握るに至つた。



希臘の戰士

スパルタ教育

ソロンの改革

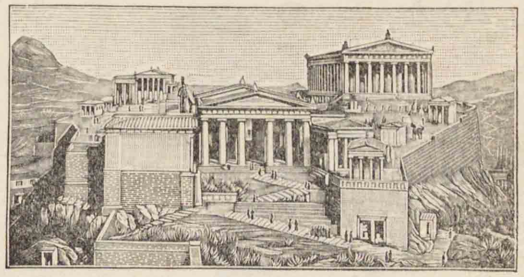
スパルタ教育　小數の武士階級が、實權を有してゐたので、自衛上極端な硬教育を行つた。生れた小兒は體格檢査を受け、虛弱なものは山に棄られる。七歳になると國立の教育所に入れられ、嚴寒酷暑の別なく、一枚の衣服を着し、毎朝河中に冷水浴をなさしめ時にまた少量の飲食物を與へて飢餓になれしめ、或は跣足(ハダシ)で、歩行せしめて、苦痛を凌ぐ習慣を養成するなど只管(ヒタスラ)嚴格な武士教育を施した。女子もまた、男子と同一の運動競技をしたから、心身とも軍國の婦人として恥かしからぬものとなつた。わが子が出陣に際し、その劍の短いのを訴へたのに對し、その母は「お前が之に一歩を加へればよいではないか」と。又楯を投げて「この楯を持つて歸れ、然らずば乘せられて歸れ」と誡めた婦人もあつた。

㈢アテネの興起　アテネは、希臘の中部アッチカ(Attica)地方にあつて、イオニヤ族(Ionians)の創めたもので、初、君主專制政治であつたが、後、貴族政治となり、貴族が權を恣(ホシイママ)にしたので、階級の爭が絶えなかつたが、ソロン(Solon)が憲法を制定し、クリステネス(Clisthenes)が政治組織を改革し、民權を擴張(クワクチヤウ)し

オストラコン

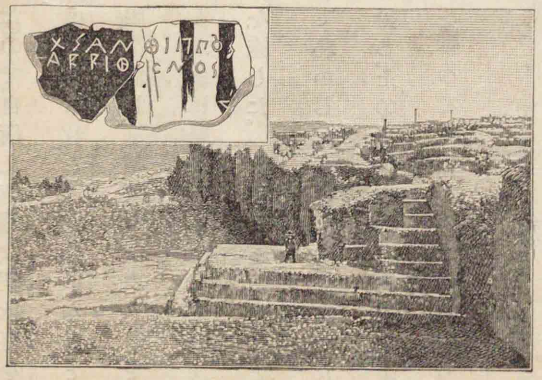
クリステネスの始めた貝殼彈劾法（一種の放逐投票法）に用ひられたもの。

波斯戰役（B.C.四九二—四四九）
第一回 B.C.四九二
第二回 B.C.四九〇
第三回 B.C.四八〇



アテネ市アクロポリス丘上のパルテノン殿堂

たので、B.C.六世紀民主政治が發達し、中部希臘に雄飛するに至つた。　アテネ人はスパルタ人の質實剛健なるに反し、優美を尚び、文學・美術を愛し、貨殖を重じた。　かくて、國風相違の二國が對立してゐたが東方より外敵波斯の侵寇（シンクワウ）するに及び、共同一致して敢然之れに當るに至つた。



アテネ市議政壇上の跡とオストラコン

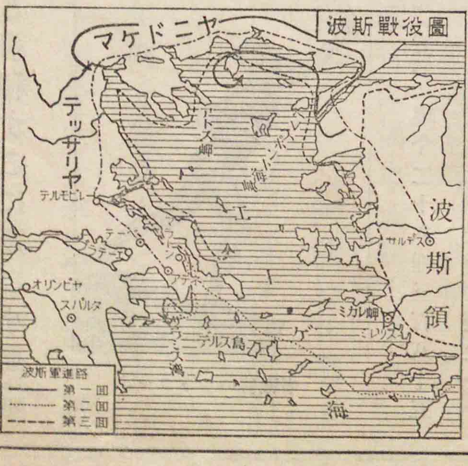
㊃ 波斯戰役　當時、小亞細亞（Asia Minor）半島の海岸には多くの希臘植民地があつたが、波斯の勃興するに及び征服された。　然るに紀元前五〇〇年頃、自由を愛するイオニヤ

原因

人の植民地ミレッス（Miletus）は、アテネの後援をたのみ、波斯王ダリウス（Darius(521—485 B.C.)）に反抗した。　かくて、東西二强國の大衝突となつた。　ダリウスは小亞細亞の叛亂を平げた後、二回までも遠征軍を出して希臘の併呑（ヘイドン）を企てたが、何れも失敗に終つた。

サラミスの海戰

其後、波斯王クセルクセス（Xerxes (485—465 B.C.)）は、父王ダリウスの遺志をつぎ、紀元前四八〇年、親ら海陸の大軍を率ゐ希臘に侵入した。　波斯軍は、スパルタ王レオニダス（Leonidas）の率ゐる陸兵を破つて、テルモピレー（Thermopylae）の嶮を陷れ、南下してアテネ市を焚いた。　然るに、アテネの將テミストクレス（Themistocles）は、希臘の海軍を以て波斯の艦隊を、サラミス（Salamis）灣に擊破したので、波斯王は陸兵の大部を止めて退却した。　其後、兩國の戰は久

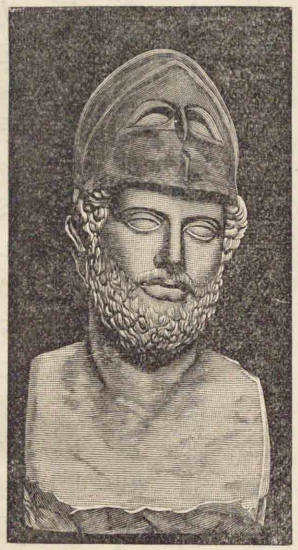


しく續いたが、波斯の國勢漸く衰へ、希臘と講和するに及び、小亞細亞の希臘植民地は獨立した。

マラソン競走の由來

第二回波斯戰役の時、波斯の大軍はアテネ市の東北二十數哩の地、マラトン(marathon)の野に上陸した。アテネ軍は、勇將ミルチヤデス(Miltiades)統率のもとに波斯軍を粉碎した。この時一人の健脚家が、疾走して勝敗を氣遣へるアテネ市民に「我が軍が勝つた」と此の大捷(タイシヨウ)を報じて疲勞の餘り斃れた。現今二十六哩三百八十五碼(四二、七五〇米)の長距離競走をマラソン＝レース(marathon race)といふのは此の故事から起つたのである。

マラソンの勝報者



ペリクレス (499頃-429B.C.)

㊄アテネの隆盛　波斯戰役に、大功のあつたアテネは、戰後その勢威スパルタ以下の

ペリクレス時代

ペロポネスス戰役(B.C.四三一—四〇四)

スパルタの强勢

テーベの强勢

希臘諸市を凌いだ。この頃、大政治家ペリクレス(Pericles (49?—429 B.C.))が出て、大いに制度を整へ民權を伸張(シンチヤウ)し、文藝を奬勵(シヤウレイ)したからアテネは、富强を極め、希臘文化の中心となつた。世に之をペリクレス時代(Periclian Age(444—429 B.C.))(希臘文化の黄金時代)といふ。

㊅希臘の內亂　アテネの隆盛は、スパルタの嫉妬を招き、遂に、兩國は開戰し、希臘の諸市は、兩分して其の一方に與(クミ)し、二十七年に亘る大戰役が起つた。其間アテネは、惡疫(アクエキ)の流行に惱まされ、ペリクレス以下多くの名士が斃(タフ)れ、スパルタも亦疲れて、一時兩國は休戰したがその後アテネの屈する所となつた。之をペロポネスス戰役(Peloponnesian War (431—404 B.C.))といふ。

戰後スパルタが、アテネに代つて三十餘年間希臘全土を威壓したが、中部希臘のテーベ(Thebes (Thebae))市に、エパミノンダス(Epaminondas)等の名士が出て、他の諸市を糾合(キウガフ)(よせあつめる)し、スパルタの大軍をレウクトラ(Leuctra)に破り(B.C.三七一)、テーベが

アレクサンドル大王の東方遠征

一時勢を張つたが、エパミノンダスの戰死によつて、國勢が衰へた。かくの如く、希臘諸市は、激しく覇を爭つた結果、互に疲弊し、遂に北方に起つたマケドニヤ(Macedonia)に、乘ぜらるるところとなつた。

㊆アレクサンドル大王　マケドニヤは英主フィリップ(Philip)の卽位するに及び、希臘の文化を輸入し、ひそかに其の富强を圖つてゐたが、遂に希臘の衰微に乘じて侵入し、アテネ・テーベの聯合軍を、ケーロネヤ(Chaeronea)に破つて、(B.C.三三八)希臘全土を威服した。その子が稀世の英雄

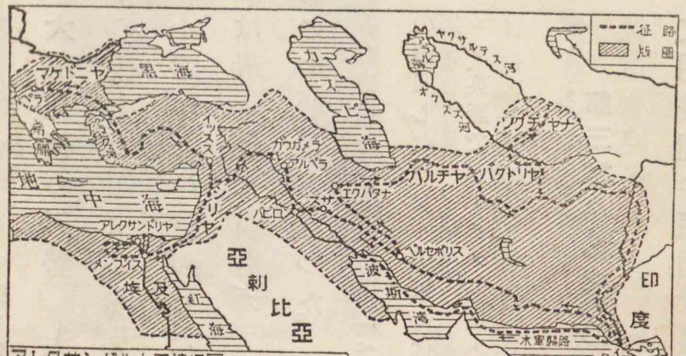
アレクサンドル大王 (336-323 B.C.)

アレクサンドル(Alexander the Great (336-323 B.C.))大王である。大王は、父の志を繼ぎ内亂を鎭定した後、親ら波斯遠征の途に上つた(B.C.三三四)。小亞細亞に入り波斯軍を諸處に破り、南に轉じて埃及を略し、再び東に進んで、アルベラ(Arbela)に、波斯王ダリウス(Darius)三世の大軍を粉碎(フンサイ)して遂に征服の目的

アレクサンドル大王の事業

アレクサンドリヤの由來

を達した(B.C.三三〇)。大王は、尙ほ進んで、遠く印度に攻め入つたが、懷郷(クワイキヤウ)の情に惱む將卒に促(ウナガ)されて軍を旋(カヘ)し、遂にバビロン(Babylon)に凱旋した(B.C.三二四)。



アレクサンドル大王遠征圖 (334-324 B.C.)

大王は、希臘文化を東方に移植して、世界的大帝國を建設せんとし、結婚・交通・宗教・移民等の諸政策を企てたが、業半で病歿した(B.C.三二三)。併し、その東西文化の融合に貢獻(コウケン)(ちからをつくす)したことは偉大で、大王の死後、所謂希臘風世界(Hellenistic World)（大王によりその文化の及べる地方の總稱）を現出するに至つた。

アレクサンドル大王は、希臘の文物を東方に輸入して、亞細亞人の生活を改めんとし、諸處に己が名に負ふアレクサンドリヤ(Alexandria)市を創設

ペルガメント（羊皮紙）の語源
文明發達の原因

し強ひて希臘人を移住させた。當時は其數大小七十餘あつたといふ、今尚ほ存する埃及のアレクサンドリヤは其の名殘である。

(八) 大王死後の形勢　大王の死後、部下の諸將が相爭ふこと二十餘年の後、その領土は、埃及・シリヤ(Syria)・マケドニヤの三大王國と、小亞細亞の小諸國とに分裂した。　その中、プトレメーウス(Ptolemy (Ptolemaeus))家の君臨せる埃及は最も榮え、首府のアレクサンドリヤは、希臘風(Hellenism)文化及び東西貿易の中心地となつた。

小亞細亞の小諸國の中に、ペルガモンといふ王國があつた。文藝が最も開け、埃及人の發明したパピルス紙に代用する獸皮紙を發明した。この紙を獨逸語でペルガメント(Pergament)、英語でパーチメント(Parchment)といふのは、ペルガモンの轉訛したものである。

第三章　希臘の文明

(一) 文明發達の原因　希臘人は、美に對する感受性強く、獨創力に富み、且つ交通上好位置にあつたから、夙く東方文明を吸收して、獨特の文化を形成した。　尚ほまた、その勞働は擧げて奴隷に委ね、專ら思索方面に精進したこと、各都市が互にその優秀を競ふたことは、風土の美と相俟つて、文化の發展する原因となつた。

宗教
文學
歷史
イソップ物語

ソクラテス (469-399B.C.)

(二) 宗教・學術　希臘人は、自然のまゝの生活を享樂する現實的・樂天的民族であつたから、宗教・文學も其の影響を受けて發達した。　即ち、自然現象を人格化した神を崇拜し、最高の神をゼウス(Zeus)（羅典名はジュピター(Jupiter)）とする男女十二神を特に尊信した。　詩聖ホーマー(Homer (Homeros))のイリヤッド(Iliad)及びオデッセー(Odyssey)（二篇共に敘事詩）は、最も名高く、歷史の父と呼ばるゝヘロドッス(Herodotus)は、歷史を散文で書いた。　その頃「イソップ物語」(A Esop's Fables)も、此地に傳はり、ペリクレス時代は、悲劇や喜劇の大作家も輩出し

哲學

ペリクレス時代と享樂主義

美術

建築

彫刻

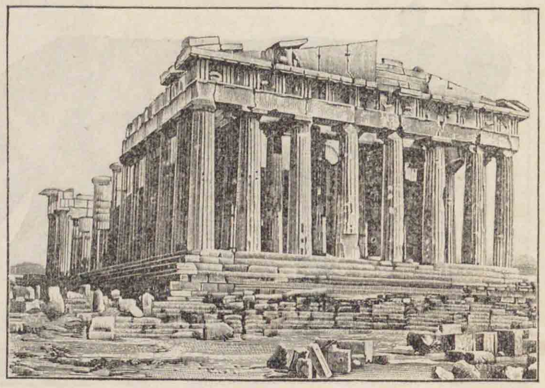
て享樂文化の極に達した。然るに其後反動的に節制主義・禁欲主義の思想が現はれ、大哲學者ソクラテス(Socrates)(節制主義の元祖)・その弟子プラトー(Plato (Platon))(此の學派には禁欲主義者が多い)は、共に哲學の宗師と仰がれ、その弟子アリストートル(Aristotle (Aristoteles))は科學の父と稱せられる。

希臘文化の黄金時代の大立物たるペリクレスでさへ、今の道德では非難さるべき人であつた。二子まである本妻を離別して、身分の賤しいアスパシヤ(Aspasia)といふ婦人を入れて、家庭を紊したほどで、希臘極盛時代は享樂主義の時代で大なる缺陷も在つたのである。

毒を仰ぐソクラテス

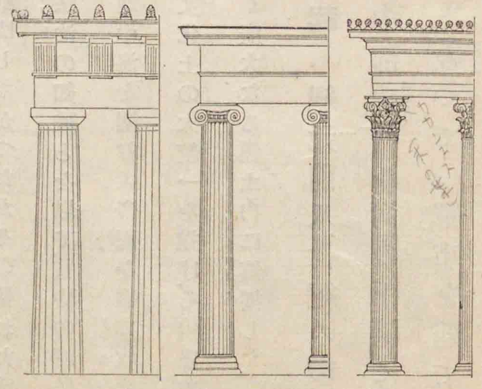
㊂美術　希臘人の優れた思想は美術の上にも現はれ、その產する良質の大理石によつて、益々妙技を發揮した。建築の大家イクチヌス(Ictinus)は、パルテノン(Parthenon)神殿(アテネのアクロポリス丘上にある)を設計し、彫刻の大家フィヂヤスは、アテナ(Athena)女神像を作つた。

建築の樣式



パルテノンの神殿

希臘の建築には、壯重なドーリヤ式(Doric Order)、溫雅なイオニヤ式(Ionic Order)、華麗なコリント式(Corinthian Order)の三の樣式があつた。アテネのパルテノン神殿はドーリヤ式の好標本である。現今に於ける西洋建築の要部には、之等の式が多く採用されてゐる。

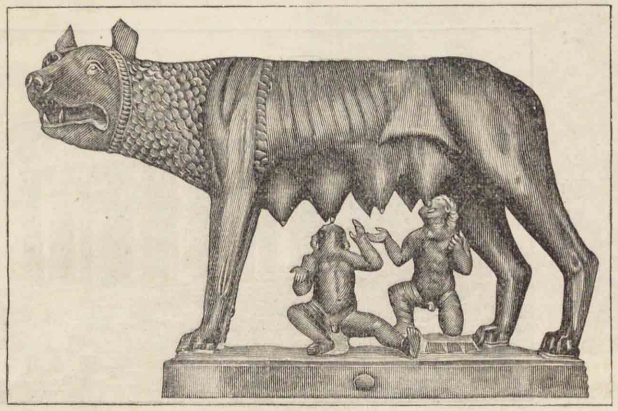


ドーリヤ式　イオニヤ式　コリント式

羅馬史の區分
一、王政時代
二、共和政時代
階級競爭時期
伊太利統一時期
外國征服時期
內亂の時期
三、帝政時代
二元政治期
武斷政治期
獨裁政治期

建國の狼
羅馬建國の祖たるロムルスとレムスの二兒がチベル河に投ぜられしを狼が哺育したといふ傳說

第四章　羅馬の盛衰



羅馬建國傳說の狼

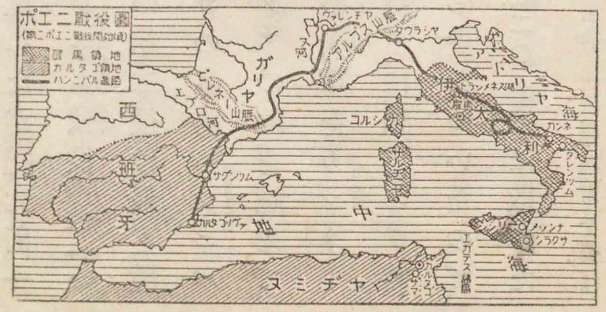
羅馬史　歷史家ランケ(Ranke)が、羅馬史を湖水に譬へた如く、古代東方諸國や希臘の歷史は、一旦羅馬史に流れ入り、更に羅馬史より、現今の西洋各國の歷史を派出したのである。　羅馬人は、文化の獨創はしなかつたが、その優れた武力と、發達した法治の知識とを以て、當時の諸民族を征服して、地中海を圍む大帝國を建て、政治・法律・宗教及び文化上の大統一を遂げ、その吸收した文化を普く廣大なる領土內に傳播した。

㊀羅馬の興起　紀元前八世紀の頃、伊太利半島の中部チベル(Tiber)河の下流に、ラテン人(Latins)が主となつて一都市を建てた(B.C.七五三と傳ふ羅馬の起原)。之が羅馬(Rome(Roma))の起りである。　かくて漸次發達して大羅馬帝國となつた。　初め王政であつたが、後共和政となり、帝政となつた。　羅馬には、古くから貴族(Patricians)・平民(Plebeians)の二階級があつたが、平民には參政權がなかつた。　これが不平で、平民は久しく貴族と相爭つたが、紀元前四世紀の中頃には同權となつた(B.C.三六七)。　かくて國民一致して、半島內の他民族を征服して、伊太利の統一を遂げ、共和政は次第に盛になり、遂に勢を外に伸すに至つた。

貴族・平民の爭

伊太利半島統一

ハンニバル(247–183B.C.)



㊁羅馬の外國征服　當時、阿弗利加の

ポエニ戰役
第一役（B.C.二六四—二四一）
第二役（B.C.二一八—二〇一）
第三役（B.C.一四九—一四六）

ハンニバルとアルキメデスの奇計

北岸にカルタゴ（Carthago (Karthago)）（フエニキヤの植民市）といふ國があつた。早くから航海・貿易が發達して富强を極め、優勢な海軍を有し、西部地中海に雄飛してゐたから、新興の羅馬は遂に之と衝突するに至つた。兩國は、紀元前二六四年から凡そ百二十年間に、三回の戰役を重ねたが、紀元前一四六年、羅馬は遂にカルタゴを滅した。これをポエニ戰役（Punic (Poeni) War）（ポエニとは羅馬人がフエニキヤ人を呼んだ語）といふ。その第二役は、最も激烈を極めた。カルタゴの名將ハンニバル（Hannibal）は、西班牙からアルプス（Alps）の險を越えて、伊太利に侵入し、羅馬の大軍をカンネー（Cannae）に粉碎した（B.C.二一六）。然るに、羅馬の勇將スキピオ（Scipio）が、カルタゴの虚をついたので、ハンニバルは、急ぎ歸國してザマ（Zama）で決戰したが（B.C.二〇二）遂に敗れた。

スキピオ

ハンニバルとアルキメデスの奇計　カンネーの戰の前、ハンニバルは、羅馬市を襲は

カルタゴ・マケドニヤ・希臘の滅亡

んとして地中海岸に行つたが、羅馬の將ファビウス（Fabius）に、その退路を絶たれて進退谷まつた。其時二千の牛の角に炬火を結びつけて、深夜山頂に追ひ上げて、羅馬軍を誘ひ、その虚に乘じて血路を開いて退軍し、後カンネーに大勝した。また第二役に於て、カルタゴの同盟市シラクサ（Syracuse）（シシリー（Sicily）島）が羅馬の海軍と戰つた時（B.C.二一二）大理學者アルキメデス（Archimedes）は珍らしい防禦機械を發明した。即ち特殊の反射鏡を以て敵艦の上に日光を集中して火災を起させ、又或種の起重機を以て敵艦を空中高くつかみ上げ、更に之を落して粉碎するなど當時の科學の粋を盡した戰鬪をした。

カルタゴの落城

羅馬は、又第二ポエニ戰後、東方侵略を企てシリヤ王國を攻めて、小亞細亞を割かしめ（B.C.一九〇）、カルタゴ滅亡の年には、遂にマケドニヤ及び希臘を滅した（B.C.一四六）。かくて、羅

富豪の跋扈

馬の版圖は東はシリヤより西は西班牙に及び、地中海岸諸國の大半も羅馬の領土となるに至つた。

㈢羅馬の内亂　羅馬は外國征服の結果、四方の富が國都に集り、國は甚だ繁榮と隆盛とに趨いたが、昔の勤儉・質朴の風が廢れて、上流は奢侈に、下流は遊惰にふけつて、道德は大に頽廢した。富者は、多くの土地を所有し、奴隷の使役と穀物の輸入とにより益〻富み榮え、貧者は益〻困窮に陷り（農民の多數は失業）、貧富の懸隔は日に甚しくなり、古の貴族・平民の爭は、貧富兩階級の軋轢と化した。この時に當りグラックス（Gracchus）兄弟は、貧民に味方して社會の改革を企てたが反

グラックス兄弟

グラックス兄弟とその母

第一回三頭政治

對黨（富豪黨）に惡まれて殺された。

グラックス兄弟とその母　グラックス兄弟の母コルネリヤ（Cornelia）は、ザマの勇將スキピオの女である。其夫の死後、子女敎育に丹精した甲斐あつて、兄弟揃つて大政治家となつた。或る貴婦人に答へて「この二兒は、私の爲には最上の寶玉である」といつたことや常に兄弟を勵まして「人をして私を勇將スキピオの娘と呼ばしむるよりも、グラックス兄弟の母と呼ばしむる樣にせよ」といつた話は有名である。

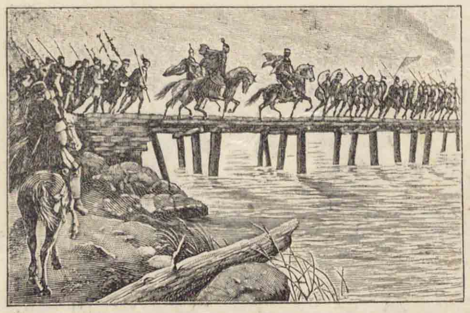
其後マリウス（Marius (156—86 B.C.)）が貧民黨を率ゐ、スラ（Sulla (138—78 B.C.)）が富豪の首領となるに及び、貧富兩階級の反目は、益〻激しくなり、その黨爭は七十年間も續いた。

㈣ケーザルの大業　その時、貧民黨から羅馬第一の英雄ユリウス（Julius）＝ケーザル（Caesar）（ジュリヤス＝シーザー）が出て、ポンペイウス（Pompeius）・クラッスス（Crassus）と結び、第一回三

ケーザル (100-44B.C.)

頭政治(Triumvirate)を組織して(B.C.六〇)後、政治の實權を掌握した。やがてケーザルは、ガリヤ(Gallia (Gaul))(今の北伊太利地方)の知事となり、進んで蠻民を征服して羅典文化を此地方に弘め、今の獨逸・英吉利(當時のブリタニヤ)地方にも威を張つた。其後クラッススは、東方パルチヤ(Parthia)(安息)遠征中戰死し、ポンペイウスは、ケーザルの成功を嫉み、之が排斥を企てたのでケーザルは機先を制して羅馬に歸り、反對黨を悉く壓服した。

かくてケーザルは、文武の大權を握り、インペラトル(Imperator)(軍隊指揮者の義で今のエンペロル(Emperor)(皇帝)の語源)の稱號を得て、大に政治を改革し、産業・植民を奬勵し、曆法を改定し(所謂ケーザル曆)、大いに功績を擧げた。然るに程なく反對派に忌まれて、元老院で刺殺された(B.C.四四)。



ケーザルのライン渡河

㊄羅馬の帝政　其後、ケーザルの養子オクタ

第二回三頭政治

クレオパトラ

巴里ルーヴル博物館所藏、埃及の浮彫。

アクチウムの海戰

希臘西岸、アルタ灣の入口に近き地

羅馬帝政の始

ヴィヤヌス(Octavianus)(ケーザルの妹の孫)はアントニウス(Antonius)・レピヅス(Lepidus)と第二回三頭政治を組織して(B.C.四三)、天下を三分し、オクタヴィヤヌスは伊太利以西、アントニウスは希臘以東、レピヅスは阿弗利加を領した。然るに程なくオクタヴィヤヌスは、レピヅスの權を奪ひ、又埃及の女王クレオパトラ(Cleopatra)に迷へるアントニウスをアクチウム(Actium)の海戰(B.C.三一)に破り、更に進んで埃及をも征服して遂に天下を一統した(B.C.三〇)。其後オクタヴィヤヌスは、元老院からアウグスツス(Augustus)(尊大の敬稱)の尊號を受け(B.C.二七)、羅

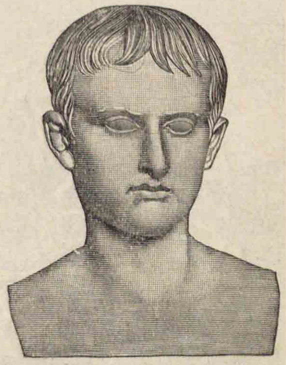
アントニウスの弔演説(44B.C.)

クレオパトラ(51-30B.C.)

二元政治

ジュライ(七月)とオーガスト(八月)

馬人の信頼を、一身に集め萬機(バンキ)(まつりごと)を獨裁(ドクサイ)(ひとりでさばく)し、帝王たるの實權を握つたが、形式は共和政の一官吏たるに甘んじた(所謂二元政治)。史家は、此の後を羅馬の帝政時代と呼ぶ。帝は在位四十余年、外は領土を擴張し、内は政治を革め、土木を興し、文藝を奬勵したので、學者・文人輩出(ハイシュツ)し、所謂羅典(ラテン)(Latin Literature)文學の黄金時代(Golden Age)を現出した。かくて人民は、太平を謳歌(オウカ)(ほめたゝへる)し羅馬市は壯麗な一大都市となつた。

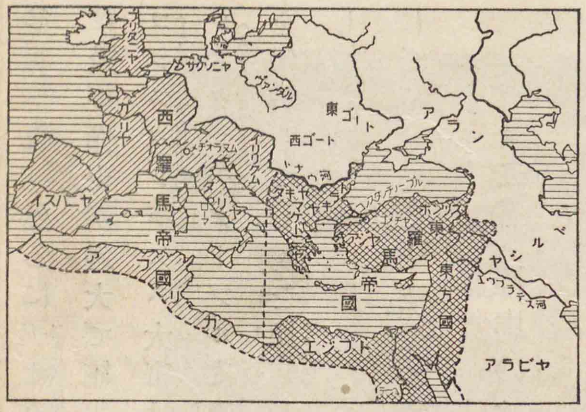


若きオクタヴィヤヌス

ジュライとオーガスト　羅馬人は、ケーザルの功績を頌す爲め、その誕生月なる七月をジュリヤス＝シーザー(Jurius Caesar)に因んでジュライ(July)と改稱した。其後アウグスツスの政を執るに及び、其の誕生月なる八月をオーガスト(August)と呼ぶに至つた。これが現今の英語の七月・八月の名稱の起りである。尚ほ七月・八月と大の續くは、ケーザル暦では偶數月は小(三十日)であつたから、アウグスツスもケーザルの七月の大(三十一日)に倣(ナラ)ふ爲め、二月より一日をとつて八月に加へ、其後の月は奇數を小とし偶數月を大と改めた。

武斷政治

㈥**帝國の盛衰**　アウグスツスの死後(A.D.一四)、ネロ(Nero (54—68))・チツス(Titus (79—81))等の後、五人の明君(所謂五善帝)(Five Good Emperors)が出て善政を行つたから、第二世紀の末まで帝國は益〻榮えた。然るに最後の善帝マルクス＝アウレリウス(Marcus Aurelius (161—180))(支那史の秦王安敦)の死後は、軍隊が跋扈(バッコ)(わがまゝする)して武斷政治の代となり、皇帝の廢立・暗殺相つぎ、國勢は漸く衰へた。



羅馬帝國の分立

㈦**帝國の分裂**　其後、羅馬は東方では中期ペルシヤと戰を交へ、北方にはゲルマニヤ(Germania)蠻族の侵寇(シンコウ)(おかしあだする)が屢〻あつたので、國勢は

獨裁政治
コンスタンチヌス大帝
政治・法律

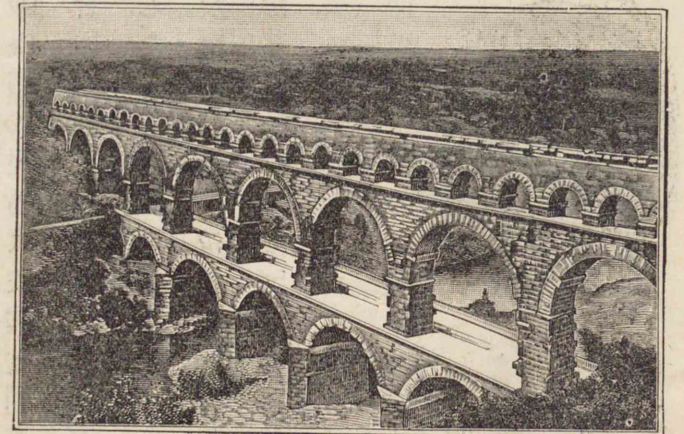
益〻衰へた。然るにヂオクレチヤヌス Diocletianus (284—305) 立ち（二八四）、獨裁政治を行ふに及び、領土が過大で統一の困難を感じ、全國を四分したが、やがてコンスタンチヌス Constantinus (323—337) 大帝は、内亂を鎭め全國を一統し（三二三）、都をコンスタンチノープル Constantinople に遷した。大帝は、行政組織を改革し、基督教を保護して、國勢を挽回したが、後テオドシウス Theodosius (392—395) 一世は、帝國を兩分して其の二子に與へた（三九五）。これから羅馬は、永く東西の兩帝國に分立することとなつた。

第五章　羅馬の文明

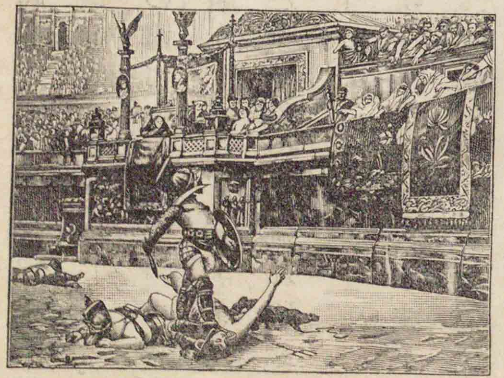
㈠文明の由來　羅馬人は、希臘人の如く理想を追はず、專ら實利を重んじたから、政治・法律の方面は、獨特の發達をなし、第六世紀には、有名な羅馬法典の編纂さへ出來た。

㈡宗教・文學　羅馬人は、希臘の神を羅馬の神と同一に考へ、彼の最高の神ゼウス Zeus をジュピター Jupiter と呼び、其他の神々にも羅典名をつけた。文學はアウグスツス時代（羅典文學の黄金時代）が極盛で、詩人ヴァーヂル Virgil・ホラチウス Horace (Horatius)・オヴィヂウス Ovid (Ovidius)、哲學者セネカ Seneca・エピクテツス Epictetus、史家タキツス Tacitus 等が有名である。

㈢美術・建築　羅馬の美術は、希臘の模倣に止つたが、建築は範を希臘にとり、之に獨特のアーチ形を



ガール橋（19B.C.建造）



コロセウムに於ける闘士の決闘

ガール橋
佛蘭西の東南部ニーム附近ガール河に架せられて現存する水道の廢趾。羅馬人の造つたものゝ中で最も壯大なもの。高さ五〇米、長さ二七〇米、最上層が水道。

美術
建築
土木

利用した實用的で、雄大・堅牢な羅馬式を起した。大浴場・凱旋門・競技場・軍用道路・水道等は今も尙その跡を遺して昔を偲ばしめる。

㈣**風俗**　羅馬は我國と同じく家族制度の國で、家長は絕對の權力を有し、婦人は貞淑でよく家を治め、且つ祖先を崇拜し、家名を重んじた。その質實剛健で、武を尙ぶ氣風はとかく殺伐に流れ、殘忍の娛樂を好み、末は遊惰奢侈の弊に陷るに至つた。

キリスト

㈤**基督教**　羅馬ではその後(帝政時代の初頃)皇帝崇拜を以て宗教とするに至つたが、恰もアウグスッス大帝の頃(統一的君主政の始)統一的性質を帶びた世界的宗教の開祖イエス=キリスト(Jesus Christ)(耶蘇基督)が出現した。基督は紀元前四年頃イェルサレム(Jerusalem)附近に生れ、舊約聖書(Old Testament)に基いて一神教を開いた。歲三十の頃より公然宣教(をしへをひろめる)を始め、三年の間ひたすら博愛の道を說き多くの人を歸依せしめたが自

基督の降誕を訪れた東方の三博士

ディエゴ=デ=シルヴァ=ヴェラスケス(Diego-de-Silva Velazquey)(1599—1660)の筆

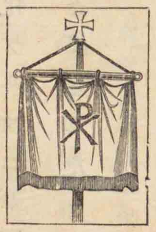
ヴェラスケスは西班牙第一の畫家、其の畫風は純粹な寫實で、色彩形式の眞に迫る點に於て他の追從を許さない。此の畫の如きも普通の聖畫と異り、彼獨得の筆致が伺はれる。

奇しの星に導かれて、ユダヤのベトレヘム(Bethlehem)なる厩に誕生せし基督を訪れた東方の三博士(Magos)。基督を抱けるは聖母マリヤ(Maria)で三博士はその持ち來つた寶盒を開き、それぞれ禮物たる黃金(貢物として國王に奉るもの)・乳香(神に捧げるもの)・沒藥(死人を葬るに用ゐるもの)を獻じてゐる有樣。蓋、この三箇の捧げ物は基督が人類の王であり、神であると同時に、人(死すべきもの)たるの象徵であるといふ。

十二使徒
ペートル Peter
アンデレ Andrew
ヤコブ Jacob
ヨハネ John
フィリップ Philip
バーソロミュー Bartholomew
トマス Thomas
マテオ Matteo
ヤコブ Jacob
タッデイ Thaddaeus
シモン Simon
ユダ Judas

基督教の弘通

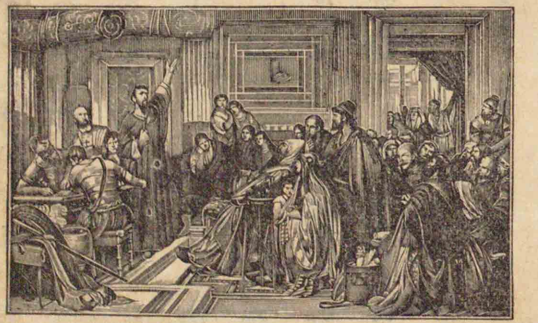
ら神の子といつたので舊法に頑固なるユダヤ人に悪まれ、基督が己れを王(精神的)たる基督なりと認めたるは、羅馬皇帝に叛くものであると訴へ、時の羅馬總督に迫つて、罪なきに死刑を宣告させ遂に十字架上に殺させた。



コンスタンチヌス大帝の旗

その教は、基督の死後ペートル(Petros)以下十一人の使徒(Apostles)及びポーロ(Paul (Paulo))等の布教により忽ち傳播し、又マテオ(Matteo)等の錄した基督の言行は、新約聖書(New Testament)として傳はり、その羅馬に入るに及んで、遂に世界的大宗教となつた。

然るに基督教徒は、皇帝を神として崇拜することを拒んだので、非常な迫害にあつたが、その殘酷な責苦は益〻教徒の信仰を强めさせ、そ



聖ポーロの羅馬宣教

コンスタンチヌス大帝

の殉教者の勇敢な最後を目撃するものは却つて、それに教化さるるに至つた。その後コンスタンチヌス大帝(Constantinus (323—337))がミラノ(Milano)に於て信仰自由の勅令を發し(三一三)、自ら基督教の保護者となるに及び益、弘まるやうになつた。爾來基督教は歐羅巴のあらゆる事物に大なる關係をもつやうになり、希臘・羅馬の文化、ゲルマニヤ民族の文化と共に今日の西洋文明の基礎の一となるに至つた。

第二編　中古史

（ゲルマニヤ民族の大移動の頃(三七五頃)より地理上の發見の頃(一五〇〇頃)まで）

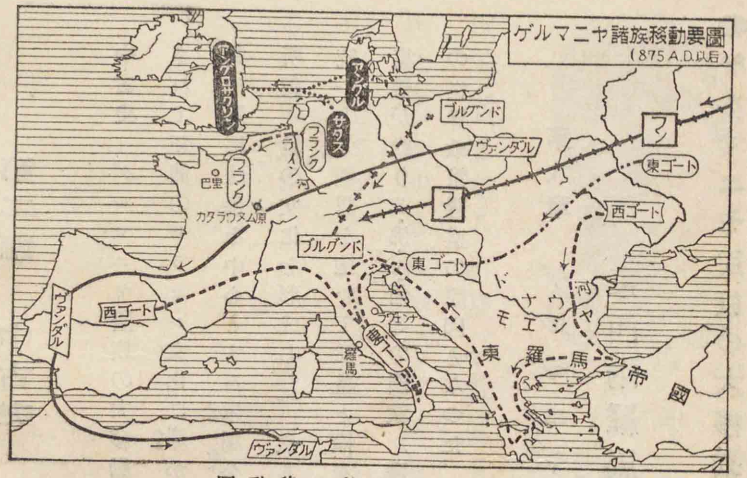
中古史　ゲルマニヤ蠻族の大移動によつて西羅馬帝國は亡び、羅典文化は一時蹂躪(ジウリン／ふみにじる)されて新興のサラセン文化に遙(はる)かに後れたが、チャールス大帝(フランク)の西羅馬帝國再興後、羅馬法皇を中心とする羅馬公教(ロマンカトリク)の隆盛と、此間に發達した封建制度とによつて所謂中世の文化を形成した。然るにオットー大帝(獨逸)に始まる神聖羅馬皇帝は、宇內(ウダイ／せかい)統一の大理想を抱いて法皇と權を爭つたが、十字軍の後、封建制度破れて諸國に中央集權が成り、英・佛・西・葡等の國家が發達した。又此の期の終りの地理上の發見は、近古の世界政策隆盛の原因となつた。

第六章　ゲルマニヤ民族の建國

東西兩羅馬帝國

㈠ゲルマニヤ民族の大移動　羅馬帝國の北方には、早くからゲル

マニヤ(Germania)諸民族が分れ住んでゐた。その性質は勇猛で戦を好み、帝政時代の初頃から屢々羅馬の邊境を騒がし、又傭兵としても羅馬に入つてゐた。第四世紀の中頃(三七五頃)黒海の北に居たフン(匈奴)(Huns)といふ亞細亞人が西方に移つて東ゴート人(ゲルマニヤ族の一派)(Ostrogoths)を降し西ゴート(ゲルマニヤ族の一派)(Visigoths)に迫つたので西ゴート人は逃れてドナウ河(Donau (Danube))の南(羅馬領)に移住した(三七五)。これからゲルマニヤ民族は、大移動を起し西羅馬帝國に侵入して、その守備の



ゲルマニヤ民族の移動圖

薄きに乘じ、所在に王國を建てた。

ゲルマニヤ諸王國

ゲルマニヤ諸王國 (1)西ゴート族はガリヤの南と西班牙に、(2)ヴァンダル(Vandals)族は西班牙に入り後、西ゴートに迫はれて阿弗利加の北に、(3)フランク(Franks)族はガリヤ(Gallia)(今の佛蘭西)に、(4)アングロ＝サクソン(Angro-Saxons)族はブリタニヤ(Britannia)(今の英吉利)に(5)東ゴート族は伊太利(西羅馬帝國・オドアケル王國滅亡後)に各々王國を建てた。

この頃フンの王アッチラ(Attila)はガリヤ(Gallia)に入寇し、西歐羅巴人を脅かしたが、西羅馬とゲルマニヤ族との聯合軍は、之をカタラウヌム(Catalaunum)の原頭に破つた(四五一)。

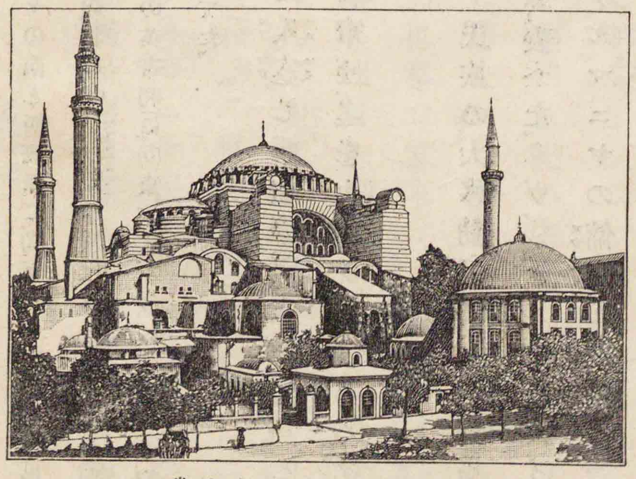
㈡西羅馬帝國の滅亡 ゲルマニヤ民族の大移動後二十年、羅馬帝國は東西に分裂してから國勢が愈々衰へた。ヴァンダル國王ガイゼリック(Gaiseric)の羅馬市を掠めた(四五五)頃、ゲルマニヤの傭兵が羅馬の實權を握り、遂にその隊長オドアケル(Odoacer)は、皇帝を廢して自立し遂に西羅馬帝國を滅した。

西羅馬帝國衰滅の遠因

西羅馬帝國衰滅の遠因 老木の朽ち倒れる如く羅馬は滅びたが、その遠因は(一)領土

擴張して分國制度をとるに至り羅馬市が國都たるの性質を失つたこと。(二)人民は享樂主義の極産兒制限などするに至り國民の元氣が銷沈したこと。(三)富の激增により黃金萬能の世となり傭兵制度行はれ、兵農一致の羅馬强兵の實を失つたこと等である。

㊂東羅馬帝國の盛衰　西羅馬帝國滅亡の後も、東羅馬帝國は獨立を維持してゐたが國勢は振はなかつた。然るにユスチニヤヌス(Justinianus (527—565))大帝が即位する(五二七)に及び形勢は一變した。帝は內治外交に意を用ひ外はヴァンダル王國を滅し、東ゴート王國を平げて伊太利を奪ひ西羅馬帝國の舊領の大半



セント=ソフィヤ大聖堂

ユスチニヤヌス大帝と皇后テオドラ

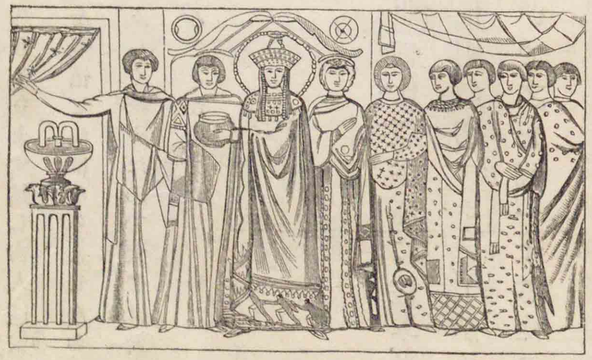
皇后テオドラと侍女

伊太利ラヴェンナの聖ヴィターレの聖堂のモザイクによる。

を恢復し、內は宗教上の紛擾を鎭め、羅馬法典を編纂し養蠶の法を支那より學ばしめ又セント=ソフィヤ(St. Sophia)大聖堂を建立した。されど大帝の歿後國運再び衰へ、且その東隣なる波斯(中期波斯)と絕えず戰つたので兩國共に疲弊するに至つた。

ユスチニヤヌス大帝

ユスチニヤヌス大帝と皇后テオドラ　大帝の頃君府(コンスタンチノープル)の市民は戰車の競走に熱狂し、青綠の二黨に分れて互に爭つたが果は政治宗教とも關連して所謂「ニカ」(Nika)の大叛亂となつた。大帝が青黨を優遇したことから大暴動が起り(五三二)大帝の身邊も危くなつた。大帝は小亞細亞に逃れる用意をした。時に皇后テオドラ(Theodra)は從容として『陛下よお落ち遊ばさんと



皇后テオドラと侍女

なればいと易きこと、彼所には海もあり海には船の用意もあります、然し古人は「袞龍(帝衣)こそは光榮ある經帷子(死人の衣)」と申しまして、王者は何時も死を覺悟せねばなりません、おめおめ落ちのびて恥を後世に殘してはなりません』と雄々しく諫めたので、大帝は元氣を回復し、遂に勇將ベリサリウス(Belisarius)の力で暴徒を一掃することが出來た。

第七章　サラセン帝國

マホメットの開教

㈠サラセンの興起　サラセン(Saracens)(大食)はもと亞刺比亞(Arabia)半島に住み、遊牧・隊商を業とし偶像を禮拜してゐたが、七世紀の初、マホメット(Mahomet (571—632))が出てイスラム(Islam)教(マホメット教又は回教)といふ一神教を開いて之を統一するに及び、俄に興隆するに至つた。

㈡マホメット　マホメットはメッカ(Mecca)に生れ幼い時兩親を失ひ、伯父の家に養はれた。後、隊商に加はつて西部亞細亞地方を行商する間に、猶太教・基督教の教義を會得し、之に基いて新宗教を開いたが、その偶像排斥からメッカ市民の迫害を受け、六二二年メヂナ(Medina)に逃げた。之をヘヂラ(Hegira)(逃走の意)といひ回教徒はこの年を紀元元年とする。それより兵力を用ゐて教を弘め、遂に亞刺比亞半島を一統し、間もなく死んだ(六三二)。その在世中受けたといふ天啓を後に集録したものをコーラン(Koran)(回教の聖典)といふ。

ヘジラ(回教紀元)

馬上のマホメット

馬上のマホメット

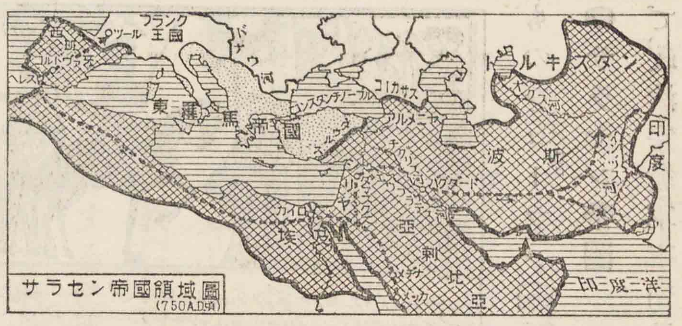
第十四世紀初期の亞刺比亞手書によるマホメット入城式の圖

イスラム教徒の禮拜

㈢サラセン帝國　マホメットの後繼者で、政治・宗教・軍事・司法上の大權を掌握

サラセンの分裂

ジブラルタル地名の起原



サラセン帝國の領土

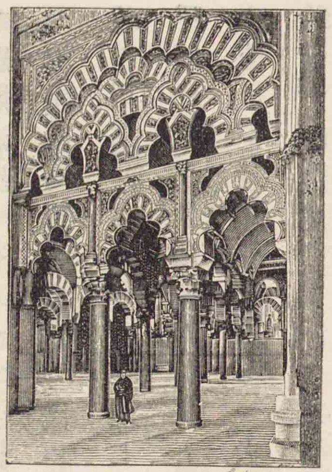
する者をカリフ(Caliph)といふ。歴代のカリフは教祖の志をついで四方を侵略し、東は波斯を滅して(六四二)支那(唐)と境を接し、西は東羅馬帝國を脅かし(六六八)、阿弗利加北岸及び西班牙を略取した(七一一)。尚も北進してフランク王國に攻入つたが、却てツール(Tours)附近に破られた(七三二)。かくて三大洲に跨る大帝國となつたが、其後内亂があつて東西の兩サラセン帝國に分れた(七五五)。東はバグダード(Bagdad)(チグリス河畔)に都し、西はコルドヴァ(Cordova)(西班牙)に都して、互に富强を競ひ殖産興業に力め學藝を奬勵したから、その文化は當時の基督教諸國を凌いだ。

ジブラルタル　八世紀の初、西班牙の西ゴート王國に内亂があつて、王黨は援をサラセンの阿弗利加の長官ムサ(Musa)に求めた。時に長官は將軍タリク(Tarik)を遣して援けしめた。その將軍の上陸した地をジベル・アル・タリク(Gibel al Tarik)(タリクの山)といつたのが、後訛つてジブラルタル(Gibraltar)となつた。

現今用ゐられるサラセン語

㊃ サラセンの文化

サラセンは、希臘・印度の文化を輸入して更に獨特の文化を形成した。その回教式建築を始とし、哲學・文學・數學・化學・天文學・地理學等今日に傳はつてゐるものも少くない。



コルドヴァに於ける回教禮拜堂の内部

今尚愛讀されるアラビヤン=ナイト(Ara'ian Nights)は此時代の作で現今行はれるアラビヤ數字もサラセンが發明したと世にいはれてゐる。又今の代數學(Algebra)・茶(Tea)酒精(Alcohol)アルカリ(Alkali)ソファ(Sofa)などはサラセンの言語から出たものである。

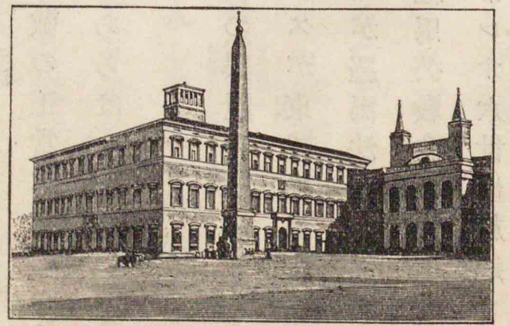
羅馬公教會では僧侶に當る者を司祭、僧正に當る者を司教といふ

第八章　羅馬公教會（ローマンカトリック）　フランク王國　ノルマンの活動

(一)羅馬法皇　ゲルマニヤ民族の大移動によつて蹂躪（ジウリン）（ふみにじる）された結果の、所謂西歐羅巴暗黑時代（Dark Age）の間、文明の命脈を維持したものは基督教の司祭（僧侶）（Priest）であつた。然して、その羅馬に於ける司教（僧正）（Bishop）は法皇（Pope）と呼ばれ、羅馬公教會（ローマンカトリック）（Roman Catholic）の首長として亂世の間にあつて、よく人心を慰め、蠻民を教化したので一大勢力を有するに至つた。元來羅馬公教會では、羅馬の司教を、基督の高弟（十二使徒の首位）で基督から教會の首長と指定された聖ペートルの後繼者として認めてゐたが、(1)羅馬市が歴史上・地理上歐羅巴の中心であつたこと。(2)東羅馬皇帝の支配を好まぬ西歐羅巴人が、當時最高審判（シンパン）者の觀のあつた法皇に信頼したこと。(3)第五世紀以來法皇に英傑が輩出し、殊に蠻族撃退に功績のあつたことなどによつて、益々勢力を増すに至つた。

法皇の由來と名稱

法皇（ポープ）（Pope）の宗教的由來と名稱　希臘語のパッパス（Pappas）（父の意）から出て我國では羅馬法皇或は法王又は羅馬教皇（支那でも）といふ。聖書によれば基督は弟子等の頭にペートルを置いて「汝は磐石（ペートル）なり、われこの磐石の上に教會を建てん」といひ又「天國の鍵（カギ）（教會の主權）を汝に與へん、總て汝が地上にて繋がん所は、天にても繋（ツナ）がるべし」といつて彼を教會の首長と定めたといふ。



ラテラン宮殿

ラテラン宮殿　歴代羅馬法皇原來の宮殿でコンスタンチヌス大帝が法皇に獻じたと稱するものである。

(二)形像崇敬禁止問題　基督教は、元來偶像崇拜を排斥するものであるが、基督及び聖徒の形像・聖畫に對し敬意を拂ふ事は許してゐた。然るにサラセンを破つて武勳をあげた東羅馬皇帝レオ（Leo）三世（717—741）は、政教の元首たるの實を得ようとの野心から勅令を發して形像の使用を禁止した（七二六）。この時羅馬法皇

フォシウスの說
基督教の「三位一體」に關する異端說

（グレゴリー二世 Gregory）は「信仰個條は教會の頭(カシラ)の解說すべきもので、皇帝の爲すべきものでない」と書き送つて抗議したので、皇帝は伊太利を攻めようとしたが果さなかつた。これより形像破壞派と形像崇敬派との間に、半世紀に亙る紛擾を起したが遂に皇后イレネ(Irene)の召集した第二回ニケーヤ(Nicaea)の宗教會議（七八七）で形像崇敬の正當が認められて落着した。かくて法皇は、當時嶄(ザン)然頭角をあらはしたフランク王と接近するに至つた。

㊂希臘正教會の分離 第九世紀の半、基督教の異說を唱ふるフォシウス(Photius)といふ者出で、君府(コンスタンチノープル)の總主教(Patriarch)イグナシウス(Ignatius)が東羅馬皇帝に追はれたのを奇貨(キクワ)とし、自ら之に代らんとしたが、羅馬法皇は之を承認しなかつたので、フォシウスは希臘教會(Greek Church)を羅馬公教會から一時分離せしめた。然しフォシウスが事を以て皇帝レオ六世(Leo 886–911)に放逐(ハウチク)され、遂に謫所(タクショ)（ながされたところ）に死んだ（八九一）ので、この分離は完成しなかつた。然るに、二世紀の後總主教ミカエル=セルラリウス(Michael Caerularius 1043–58)といふ者、フォシウスの說に更に新說を加へて離教を成就した。そこで羅馬法皇（レオ九世）は彼に破門の命令を送り（一〇五四）、茲(ココ)に東羅馬皇帝保護の下にたつ希臘正教會(Greek Orthodox)（又は希臘教會）は、羅馬公教會(Roman Catholic)と永く分離するに至つた。

チャールス大帝と羅馬法皇レオ三世

羅馬ラテラン宮殿のモザイクによる中央は天國の鍵を膝にせる聖ペートル其の右は法皇レオ三世、左に旗を授かるはチャールス大帝

チャールス大帝の卽位

チャールス大帝と法皇レオ三世

㊃フランク王國 フランク族(Franks)の酋長クロヴィス(Clovis)の創建(サウケン)（はじめてたてる）した（四八六）フランク王國では宮宰(キユウサイ)チャールス=マルテル(Majordomus Charles Martel)がサラセン人の侵入を擊退して（七三二）大功をたて、其子ピピン(Pipin 751–768)は法皇の承認を得て王位を奪つた（七五一）。ピピンの子は有名なチャールス大帝(Charles the Great (Charlemagne))で、ゲルマニヤの諸部落を征服して八〇〇年に羅馬法皇レオ三世(Leo 795–816)から帝冠を授かつて、古の西羅馬帝國を再興した。大帝は心を內治に用ひ、封建制度をしき、產業を保護し學藝を奬勵したので、ゲルマニ

西羅馬帝國の再興

ヤ民族の大移動以來暗黑であつた西歐羅巴に文化の曙光(シヨクワウ)(しののめのあかり)が再びさし初めた。然るに大帝の死後、その子孫が遺領を爭つて紛擾が絶えなかつたが、ヴェルダン(Verdun)(八四三)・メルセン(Mersen)(八七〇)の兩條約によつて、帝國は東フランク・西フランク・伊太利に三分することとなつた。

獨・佛・伊三國の起原

これが現今の獨逸・佛蘭西・伊太利の基である。

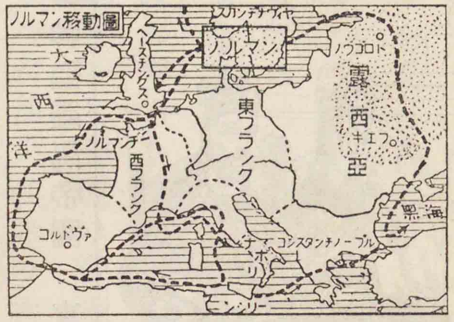
羅馬法皇領の起原

㊄羅馬法皇領の起原　コンスタンチヌス大帝が信教自由の法令を發布した(三一三)後、多くの財産を寄進したのが羅馬法皇領の濫(ラン)觴(シヤウ)(はじまり)で(所謂大帝の寄進勅書は僞文書なれど Donatio Constantini)あるが、八世紀の半ロンバルヂヤ(Lombardy)王アイスツルフ(Aistulf)が伊太利に侵入した時、法皇ステファン(Stephen)三世は、援をフランク王ピピンに求めた。王は兵を伊太利に出してロンバルヂヤ軍を撃破し、その征服地を「ペートルの遺産(Patrimonium Petri)」と稱して法皇に獻じた。茲(ココ)に羅馬法皇領(P. pal States)が完成した(七五六)。チャールス大帝も父ピピンの捧げた土地の領有を確認し、更に新なる土地を寄進して法皇領を擴

めた。

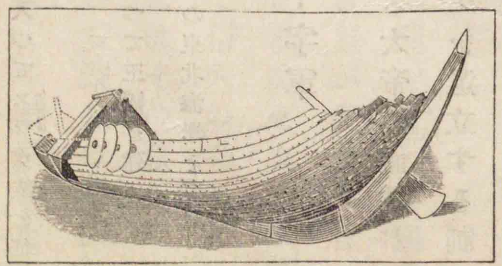
ノルマンの大侵略

㊅ノルマンの活動　チャールス大帝の頃からゲルマニヤ民族の一派でノルマン(Normans)(北人の義)といふ勇敢で航海に長じた民族が、スカンヂナヴィヤ(Scandinavia)半島及び丁抹(Denmark)地方から四方に出て海賊となり大侵略を始め、沿海諸國を惱まし、更に遠く北亞米利加の東海岸地方をも探檢した。



(1) 西フランク王國を侵したノルマンの酋長ロロ(Rollo)は、ノルマンヂー地方を得て公國を建て(九一一)、

(2) 丁抹のノルマンは英吉利に入り遂に英蘭王位を奪ひ(一〇一六)、



ノルマンの船

ノルマンの船　諾威オスロー市所藏同國南部にて發掘された遺物、長さ二十二米許ある。

(3)ルス(Rus)(瑞典のノルマン)の酋長ルーリック(Rurick)は、今の露西亞地方に入つてスラヴ(Slavs)族を征服して露西亞の基を開き(八六二)、

(4)地中海に入つたノルマンは、南伊太利及びシシリー(Sicily)島を取つて王國を建て、

(5)一部は遠く大西洋を航しイスランド(Iceland)・グリーンランド(Greenland)・北米の東北海岸を發見した。

第九章　羅馬法王と神聖羅馬皇帝　十字軍

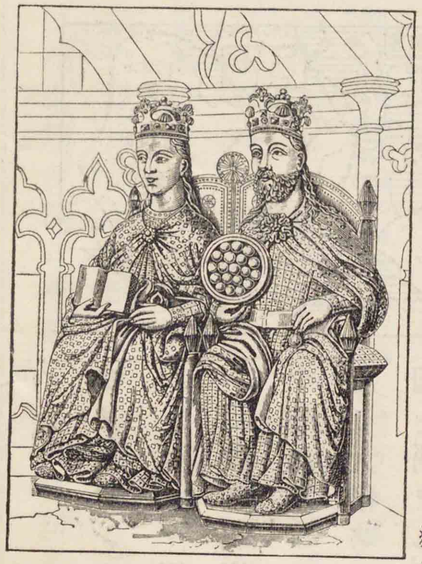
オットー大帝と皇后

獨逸マグデブルグ市大聖堂の石像による。

洪牙利(ホンガリヤ)王國の初

フンと同種族なるマジャール人の國洪牙利は大帝との敗戰の後聖王ステファン初めて即位し(一〇〇〇)基督教を布いて國を治めた。

㈠神聖羅馬帝國



オットー大帝と皇后

東フランク(即ち獨逸)では、チャールス大帝の血統が絶え、諸侯が王を選立する制となつたが、第十世紀の中頃オットー(Otto)一世(世にオットー大帝といふ)が選ばれて王位に登つた。王は内は諸侯を抑へて王權を伸張し、外はボヘミヤ(Bohemia)・波蘭(ポーランド)(Poland)を征服し、次で丁抹(デンマルク)(Denmark)及びマジャール(Magyars)族を破つて(九五五)外征に成功し、又法皇を助けて北伊太利を併せ、羅馬法皇ジョン(John)十二世(955—963)から帝冠を授かつて神聖羅馬皇帝(Holy Roman Emperor)と稱した(九六二)。蓋、舊羅馬皇帝の繼承者で、宗教と政治との結合によつて成立した皇帝との意である(世に之を獨逸皇帝といふ)。

神聖羅馬國の帝成立

獨逸皇帝は羅馬帝國の傳統(デントウ)(うけつたへた)的宇内(ウダイ)(せかい)統一の理想を抱き、基督教を保護して力を伊太利の經營(ケイエイ)に盡した。

衝突の原因

㈡法皇と皇帝の衝突

第十世紀の半より百餘年間(九六三—一〇七三)は、獨逸皇帝が法皇任命の大權を私してゐたので、聖職賣買が行はれ、教會の綱紀(カウキ)が大いに紊(ミダ)れた。然るにグレゴリ(Gregory)七世(1073—85)が法皇となるに及び(一〇七三)、教會の弊風を刷新(サッシン)し、教權の獨立を企て、俗人の司教任命(Investiture)權を禁止した(一〇七五)。時の獨逸王ヘンリー(Henry)四世(1056—1106)は、その禁令に服しないのみならず、ウォルムス(Worms)に僞宗教會議を開いて法皇の廢位を決議したが、却て法皇に破門され、爲に獨逸國民は王に離反した。

法皇權の極盛

ハプスブルグ家の起原

カノッサの屈辱

ヘンリ四世は大いに窮して、獨逸の諸侯會議に臨場の法皇を途中カノッサ(Canossa)城に要し、罪を謝し纔(ワヅ)かに破門を解かれた(一〇七七)。かくて第十三世紀に至り法皇權の强大は其の極に達し、法皇インノセント(Innocent (1198—1216))三世の如きは諸國の帝王を威壓し、その命に服せしめた。

㈢神聖羅馬帝國の衰微　皇帝の權力は、法皇との爭の後漸く衰へ、且つ宇內統一の理想から、大いに力を伊太利に注いだので、獨逸では內亂絕えず、諸侯は割據するに至り、第十三世紀の後半には二十三年間も皇帝のない時代(大空位時代 1256—73)を現出した。その後ハプスブルグ(Hapsburg)伯ルドルフ(Rudolph (1273—91))が即位したが(一二七三)墺地利地方を得て、ひたすら家

十字軍の原因

第一回十字軍(一〇九六—一〇九九)
第二回十字軍(一一四七—一一四九)
第三回十字軍(一一八九—一一九二)
第四回十字軍(一二〇二—一二〇四)
小兒十字軍(一二一二)
第五回十字軍(一二二八—一二二九)
第六回十字軍(一二四八—一二五四)
第七回十字軍(一二七〇)

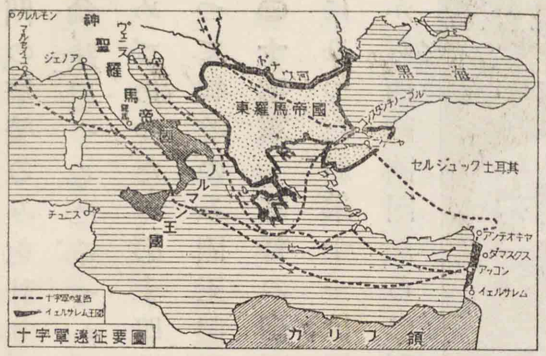
門の繁榮のみを計り、獨逸全國に意を用ひなかつたので、大諸侯は益、跋扈(バツコ)するに至つた。從來、獨逸國王は全國諸侯の選擧による定めであつたが、第十四世紀の半、最も勢力ある七大諸侯が皇帝に迫つて彼等のみ國王選擧の權を有するものとした(金印勅書發布 一三五六)。

十字軍の武士

㈣十字軍　基督の聖墓の地イェルサレムは久しくサラセン人の手にあつたが、第十一世紀の末セルジュック=トルコ(Seldjuk-Turks)(回教徒)が之を略取してから、西歐諸國から參拜する基督教徒を虐待したので、法皇ウルバン(Urban (1088—99))二世は、信徒大會を開いて(一〇九五)聖地回復の遠征軍を起さんことを勸めたところ、信仰と尙武の氣風の盛な封建武士たる西歐の君民は擧(コゾ)つて之に應じ、各、十字章をつけて勇躍(ユウヤク)して征途についた。之を十字軍(Crusade)

十字軍の結果

といふ。かくて第一回十字軍は聖地に向ひ、苦戰の後イェルサレムを回復し、こゝにイェルサレム王國(Kingdom of Jerusalem (1099-1187))を建て聖地の保護に當つてゐたが、暫くして土耳其人に滅された。その後第七回まで十字軍を起したが、遂に殆んどその目的を達することが出來なかつた。



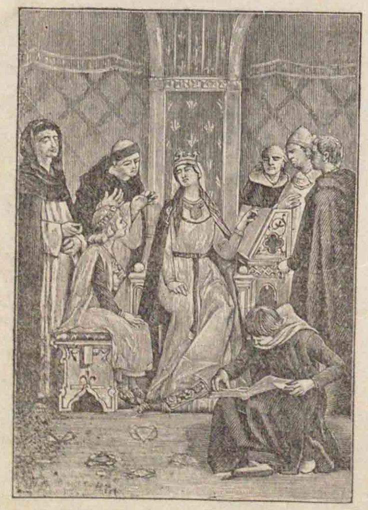
五　十字軍の結果　十字軍は多數の人命と資財とを犧牲(ギセイ)にし、豫期したほどの結果を得なかつたが、從軍の王侯・武士は信仰の爲、祖國の光榮の爲に死したので、精神的には滿足であつた。尙ほ又遠征軍を出した佛・獨・伊等の西歐諸國には、政治上・經濟上・社會上に極めて重大な影響を齎(モタラ)した。(1)東西の交通・運輸・貿易は大に開け、西地中海方面の諸都市(マルセーユ・ジェノア・ピサ・フロレンス・ヴェニス等)が繁榮し、(2)當時西歐よりも進んでゐた東方諸國の文化と奢侈とが輸入され(3)遠征の諸侯は出發前財產を處分し、或は死歿したから權威衰へ、市民と農民は優勢となり、漸く封建制度破綻(ハタン)の端を開き(4)異境に極端な危險と艱難とを共にしたことは、人道的・仁惠的・平等的感情を基督教徒間に普及し農奴(Serf)を喜ばす等、社會的改善行はれ(5)地理上の知識の發達は大いに航海冒險の風を盛にした。

緞子・モスリンの由來

緞子及びモスリンの由來　十字軍の結果東方諸國の奢侈品が西歐に輸入せられた。緞子(ドンス)は其の產地ダマスク(Damask Damas)より、或はモスリンは產地モスル(Mosul)により名づけられたものである。

聖ルイとその母

聖ルイ(St. Louis)とその母　佛王ルイ八世が歿して幼弱なルイ九世(十一歲)が王位を繼いでその母カスチラ(Castilla)のブランシュ(Blanche)が攝政となつた。國內諸侯は女子の政治を侮り、



聖ルイとその母

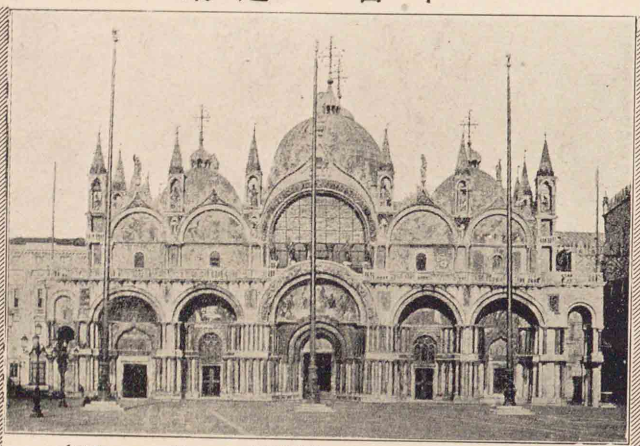
英蘭王の援をたのんで、互に同盟して亂をなしたが、ブランシュは鋭意之が鎭壓に努め、諸侯を分離せしめて王權を確立した。ルイ九世はかゝる賢明な母に養育され、時に鞭を以て折檻されることさへあつた。『只一つの恕し難い大罪ある汝を見るよりも、寧ろ妾が足下に死する汝を見る方がよい』とは母后の常に王を誡める言であつた。かくてルイは、敬虔・仁惠の德に剛毅の氣象を兼ね備へた名君主となり、後世聖ルイとして國民に敬慕さるゝに至つた。

學術文藝

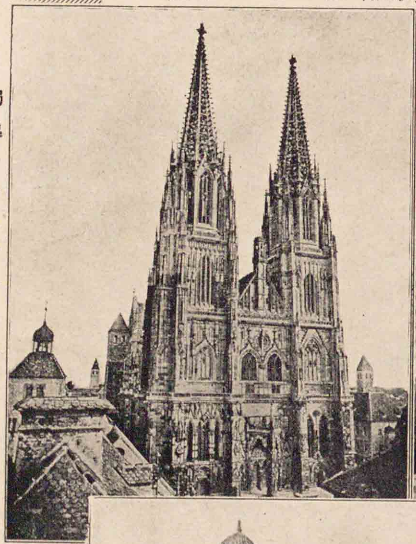
第十章　中世の文明

一學術文藝　西歐羅巴ではゲルマニヤ蠻族の侵入により、希臘・羅馬の文化は蹂躪されて、一時光を失ひ暗黑時代 (Dark Age)（此の名稱第十一世紀以後は適當せず）と稱せらるゝに至つたが、その間獨り羅馬公教會の司祭（僧侶）のみは教育・學問に精進し、纔かに文藝を維持してゐた。然るにチャールス大帝出で學問を奬勵してより、文藝は漸次發達し第十一世紀以後、中世獨

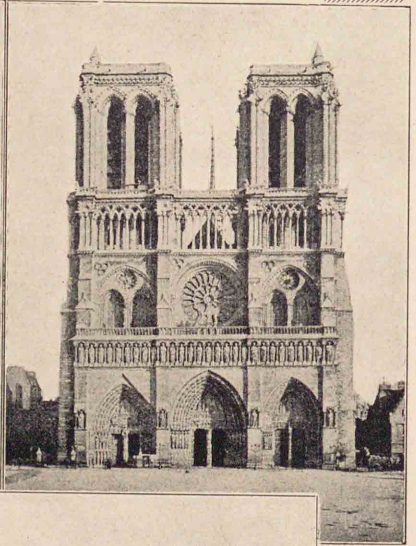
中古の建築



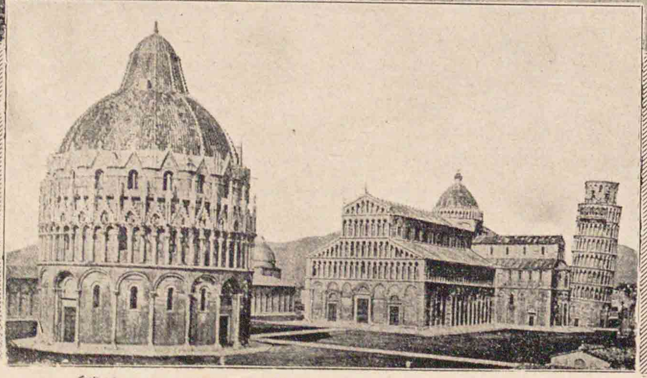
ビザンチン式（伊太利ヴェニス聖マルコ聖堂）



獨逸ラチスボンの聖堂



巴里ノートルダム聖堂



ローマネスク建築（伊太利ピサの聖堂）

美術
建築

中古の大學

特の文化を形成するに至り、到る所（巴里・オクスフォード・ボロニヤ・サラマンカ等）に大學が創設され、アルバート Albert（獨逸の修道士大アルバートといふ）・ボナヴェンツラ Bonaventura（伊太利の修道士）・ヅンス＝スコタス Duns Scotus（英人）等多くの學者を出し殊に神學者トマス＝アクィナス Thomas Aquinas (1226–74)（伊太利の修道士）はスコラ哲學 Scholasticism を大成し、トマス＝ア＝ケンピス Thomas à Kempis (1380–1471)（獨逸の修道士）の著した「キリストの模倣（モハウ）」De Imitatione Christi は最も美しい宗教心の記錄として名高い。又封建制度の發達につれ武士道文學現はれ、南佛蘭西には田園詩（トルバドウル Troubadour）、獨逸には戀愛詩（ミンネジンゲル Minnesinger）等の一種の抒情詩（ジヨジヤウシ）が發達した。ロージャー＝ベーコン Roger Bacon（英人）は實驗科學者として知られ、ヴィンセント＝ド＝ボーヴェー Vincent de Beauvais（佛國の修道士）は浩瀚（カウカン・ひろくおほい）な百科全書を編纂した。

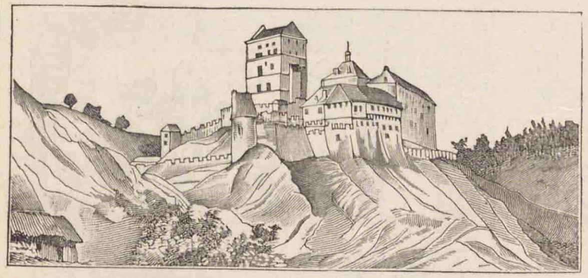
㈡美術　宗教の勢力の盛なることは美術の上にも現はれ建築様

彫刻

式も初期基督教建築(Early Christian)(第八世紀頃まで)は漸次變化し、ロマネスク建築(Romanesque)(第十二世紀頃まで)を經て第十三世紀頃から第十五世紀頃までの間には宏大壯嚴で天をも摩する趣のあるゴシック(Gothic)式の大聖堂が諸所(ミラノ・レンス・シャルトル・巴里・ヨーク等)に建築され、無數の像や細密な彫刻、精巧な嵌込色板ガラス(ハメコミイロイタ)(ステインドグラス)(Stained glass)の窓を以て裝飾された。

封建制度の成因

封建時代の城
ボヘミヤのカールスタイン城

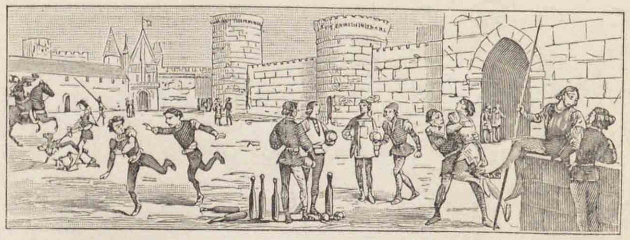


封建時代の城

㊂**封建制度**　フランク王國の起つた頃、サラセン等の外敵の侵入を拒ぐ爲、王は自己の領土を部下の軍士に贈與し、以て騎馬を飼養(シヤウ)する資を給し、且つ忠勤を勵ましたのが封建制度(Feudal System)の始りである。かくて君主の權が、漸次部下の貴族若くは豪族の手に移り、割據の風をなす政體を形成するに至つた。

武士道の發達

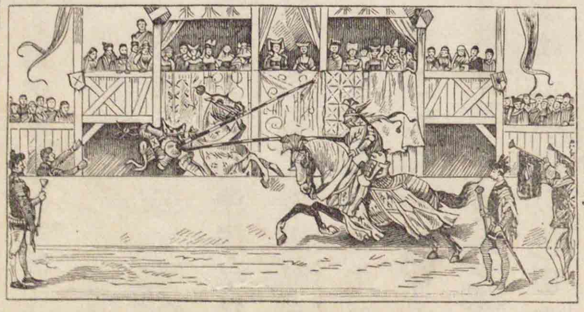
㊃**武士道**　封建時代の花と謳(ウタ)はれた武士(Knight)(又は騎士(Chevalier))は幼時より一定の修養格式侍童(Page)―從士(Squire)を經ねばならぬ。その間敬虔(ケイケン)にして任俠(ニンケフ)(をとこだて)、忠誠にして勇敢、名譽を重じ廉恥を尙び、婦人を愛敬するの精神を練る。この精神が卽ち武士道(Chivalry)である。　蓋、ゲルマヤ民族の忠勇で婦女を愛敬する特性が、基督教の感化を受け封建制度に養はれて發達したものである。



中世城中の生活

試合(トーナメント)の由來

試合の由來　武士は平時に於て一定の修練をするが、その中に試合(トーナメント)(Tournament)といふものがある。これは君主の卽位誕生・結婚等に際し行ふもので、對手の武者を馬から槍で突き墜して勝敗を決する。



武士の試合

農民の悲境

商工組合

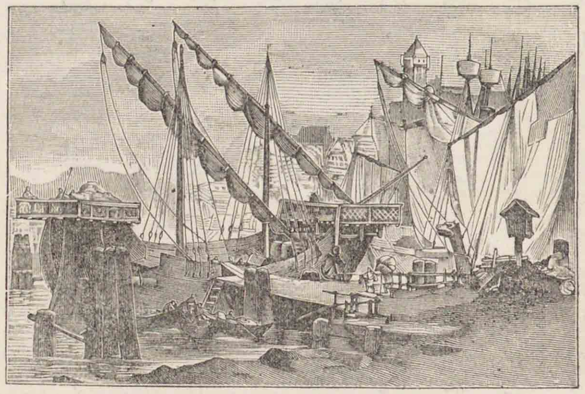
ハンザ同盟

現今庭球の試合をトーナメントと呼ぶが、その名稱はこれから起つたのである。

中世農民の圖

㊄農民と平民及び都市の發達　領主は堅牢な城砦(Château)に據つて豪奢な生活をなし、農民・平民は城砦を繞つて群居し領主の軍隊の庇護の下に安全な生活を續けてゐた。　農民の中には農奴(Serf)とて土地と共に賣買され自由を有せざる階級があつた。　彼等は過重な課稅(人頭稅・夫役等)に耐へつゝ、貧弱な生活を營んでゐたが、商工民は十字軍以後都市の勃興につれ、自治權を得、漸次優勢となり、先づ伊太利の自由都市(ヴェニス・ジェノア・フロレンス等)が榮えた。　この外西歐の都市は同盟を結んで、商工業の安全保持、都市間の爭論の判決等を目的とする組合を組織するに至つた。　就中獨逸のハンザ同盟(Hanseatic League)(ハンブルグ・ブレーメン・リュベック(伯林・ケルン・ダンチヒ等九十餘市)の如きは最も盛大で恰も獨立共和國の觀を呈してゐた。

修道院の發達



ハンザ同盟の戰船

㊅修道院の發達　ゲルマニヤ蠻族の侵入後文化の維持と普及とを助けたのは西歐羅巴の修道院(Monastery)であつた。　この基督教的修道生活は聖書中に根據を有するもので、基督教初期以來行はれてゐたが、基督教の隆盛に伴ひ、世俗の腐敗迫害を避けて、貧困・貞操・從順を誓ふ制欲主義を奉ずる教團が建てられ、勞働と學問の尊嚴とを教へた。　第六世紀既に伊太利に聖ベネヂクト(St. Benedict)(五二九年)會が建てられた。　此の修道院は嚴しい戒律を課して後世に範を示し、社會的にも多くの事業をした。　この外聖バーナード(St. Bernard)

會(第十二世紀、聖ベルナルド會 St. Bernard)、聖ドミンゴ會 St. Domingo (Dominic)(第十三世紀西班牙)及び伊太利アッシシ Assisi のフランシス Francis (1182-1226) の開いた聖フランシスコ會 St. Francisco (第十三世紀)等は最も有名である。

第十一章　西歐羅巴諸國の興起

英蘭王國の建設

ノルマンの英蘭征服(ヘースチングスの戰)
佛國バユー市圖書館保管の刺繡による。

㊀英蘭(イングランド)の發達　英蘭はもとブリタニヤ Britania といつたが、ゲルマニヤ民族大移動の時、アングロ＝サクソン Anglo-Saxons 人はこゝに侵入して、七王國を建てた。後、エグバート Egbert 王が之を統一して英蘭 England 王國を建設した(八二七)が、第十一世紀の初、丁抹(デンマルク)のノルマン Normans の侵冦をうけて、一旦彼の國に併合された(一〇一六)。然るに程なく、佛蘭西王國のノルマンヂー Normandy 公ウィリヤム William (ノルマン系)は大擧(タイキヨ)侵入して英蘭を征服し(一〇六六)、その子孫は代々

ヘースチングスの戰

アッシシ Assisi の聖フランシス Francis

フランシスコ會(修道會)の創立者で、伊太利アッシシなる富裕な織物商の家に生れた。然るに當時の社會及び父の行蹟について大に感ずる所があつて、美服を脱いで乞食となつた。然し之は世の乞食の懶惰の生活を讃美する爲ではなく、『聖貧との結婚』を希つたもので、聖書に所謂『福なるかな心の貧しき人』の眞の境涯に入る爲であつたから、世の乞食の强迫的・呪詛的なるとは類を異にし、『他人の手より落つる屑で養はれん』の穩健な考であつた。その主目的は無要求の勞働奉仕の事業で、殊に貧者、病者の爲、わけて癩病患者の爲に盡し、時に患者の汚れた手に接吻さへする熱烈な愛を持つてゐた。又その慈悲深い愛情は、自然界に迄も及び禽獸もその說教を傾聽したといふ。

英蘭プランタジネット朝の祖 ヘンリ二世の父ジョフレイが冑に Plante（プラント） de genêt（ド ジュネ）（えにしだ）の枝をさしてゐたから此の名稱が起つた。

大憲章の發布 英吉利憲法の起原

英蘭王となり、尙ほ佛蘭西の大諸侯を兼ねてゐた。このノルマン (Normandy (1066—1154)) 王統は、第十二世紀の中頃絶えて、その親族なる佛蘭西のアンジュー (Anjou) 伯が王位に卽き、ヘンリ二世 (Henry (1154—89)) と稱した。これがプランタジネット (Plantagenet (1154—1399)) 朝の祖である。

㊁ **英蘭憲政の確立** 英蘭王ジョン (John (1199—1216))（ヘンリ二世の子）は暗君で、外は法皇及び佛蘭西と爭つて國威を損し、內は暴政を行つたので、遂に貴族・聖職者等は、王に迫つて大憲章 (Magna Charta (Great Charter)) を發布せしめて（一二一五）、國民の生命財産の安固を保證せしめた。之が英吉利憲法の起りである。然るに、その子ヘンリ三世 (Henry (1216—72)) は、大憲章を守らなかつたので、貴族・聖職者及び都市の代表者は、議會を開いて國王の專權を抑へた（一二六五）。之が英吉利議會の衆議 (House of)

大憲章に署名するジョン

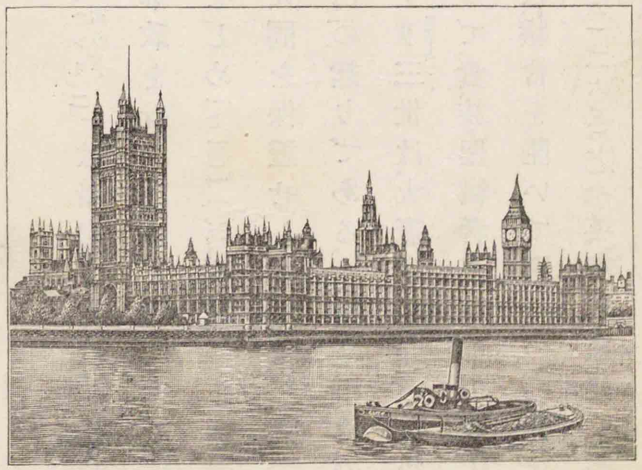
英吉利下院の起原

佛蘭西王權の伸張

院(Commons)の起りである。かくて立憲政治は漸く確立した。

㈢佛蘭西王權の伸張　西フランクでは、第十世紀の末頃、その王統が絶え、佛蘭西侯のユーグ=カペー(Hugh Capet)が代つて王朝を開いた。これより後、佛蘭西(France)なる國號が起つた。

かくて第十三世紀には、フィリップ二世(Philip (1180—1223))・ルイ九世(Louis (1226—1270))(第六・七十字軍を起した人ルイ聖王(St. Louis)と稱せらる)などの明君が出て諸侯を抑へ、王權を擴張した。フィリップ四世(Philip (1285—1314))は、祖父ルイ聖王の如き敬虔(ケイケン)・仁慈の君ではなかつたが、政治的手腕を有し、羅馬法皇ボニファキウス八世(Boniface (Bonifacius)(1294—1303))と、司教任命・課税問題等により、爭ふに至つた。王はこの抗爭の内に



英國國會議事堂

佛蘭西國會(三部會)(States General)の始

佛蘭西建國當時の王權の薄弱

百年戰役

近因

遠因

初期(一三三七—一三六〇)

中期(一四一五—一四二〇)

後期(一四二一—一四五三)

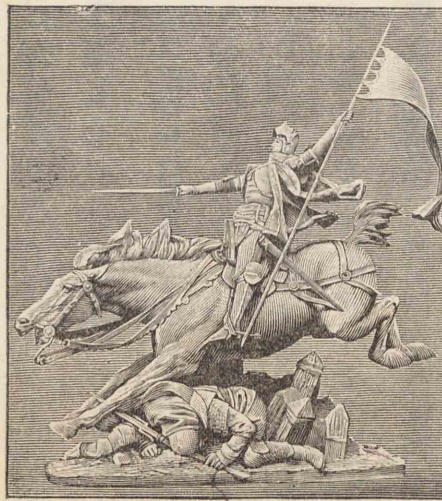
己が位置を固くする爲、貴族・聖職者・平民の代表者を集めて三部會(エタツゼネロー Etats Généraux)を起しその助力を求めた(一三〇二)。之が佛蘭西國會の起原である。

佛蘭西建國當時の王權の薄弱　ユーグ=カペーが佛蘭西王國を創めた頃、ペリゴール(Périgord)(ボルドーの東北)のアデルベール(Adelbert)といふ者ツールーズ(Toulouse)の地を略して、自らツールーズ伯と稱したので、ユーグは使を遣(ヤ)つて「誰がお前を伯に任じたか」と責(セ)めたところが、彼は敖然(ガウゼン)として「誰がお前を王としたか」と詰(ナジ)つた程、當時の王權は微々たるものであつた。

㈣百年戰役　其の後、佛蘭西王チャールス(Charles (1322—1328))四世(フィリップ四世の子)が死し、その從弟なるフィリップ(Philip (1328—50))六世がヴァロア(Valois)家から入つて王位を繼承した。然るに英蘭王エドワード(Edward (1327—77))三世(母は佛王チャールス四世の姉)は、カペー王朝の姻戚として、王位の相續權を主張し、大軍を率ゐて佛蘭西に侵入した(一三三七)。之が百年戰役(Hundred Years' War (1337—1453))の近因であるが、蓋英蘭王は尙ほ佛蘭西の大諸侯として領土を有し、國王と相下らず、屢〻紛爭を起したので、兩國が不和であつたことはその遠因である。　この戰役は三期百年餘に亘つ

ジャンヌ=ダルクの略傳

たが、何時も英蘭の勝利に歸し、佛蘭西の諸城は殆ど陷つて國運は風前の燈の如くであつたが、後期の末、少女ジャンヌ=ダルク(Jeanne d'Arc)が出て神託により佛蘭西の危急を救ふと稱し、陣頭に立つて士氣を鼓舞し、オルレアン(Orléans)城の圍を解いてから、英軍は漸次國外に擊退され遂に國運を恢復するを得た。



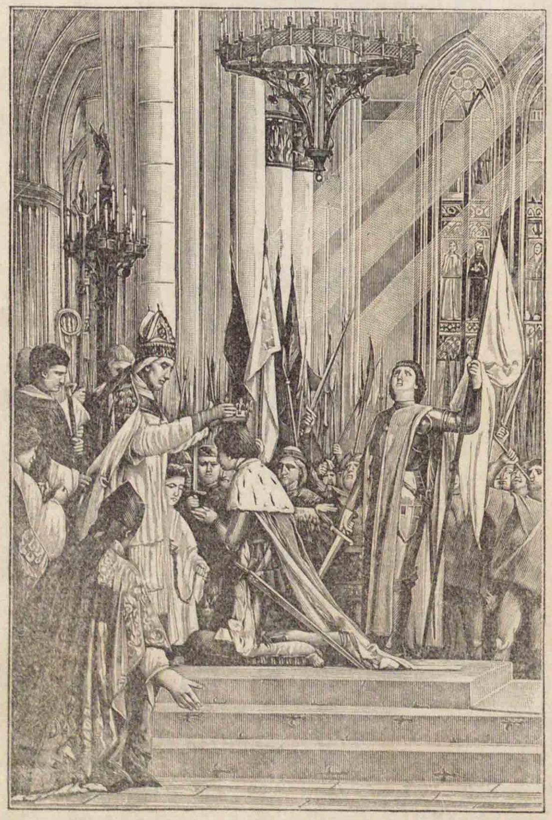
ジャンヌ=ダルク(シノンの銅像)

ジャンヌ=ダルクは佛蘭西の東北なるドムレミー(Domremy)といふ小邑の農家に生れた。教育としては、母親指導の宗教々育のみであつたが長ずるに從ひ、純潔敬虔な性質に、燃えるやうな熱情が加はり堅實な常識さへ備はつて、遂に憂國の少女となつた。十三歲の頃から屢〻神の聲を聞いた。その「オルレアンの急を救へ」「國王をレンス(Reims)の聖堂に導いて戴冠式を擧げしめよ」との神託あるに及び奮起して、郷閭を出て、ボアチエー(Poitiers)市なる學者の審問を受

英・佛兩國王權の擴張

けて、その狂女でないことを證せられた。かくて十七歲の少女ジャンヌ=ダルクは、チャールス國王に謁して兵權を委ねられ、その白甲をよろひ、鼠色の馬に跨つて陣頭に立つところ敵なく、週日を出でずして、孤城落日のオルレアン城を救ひ、終にレンスのノートル=ダム(Notre Dame)の大聖堂に於てチャールス七世戴冠式擧行の使命を果した。

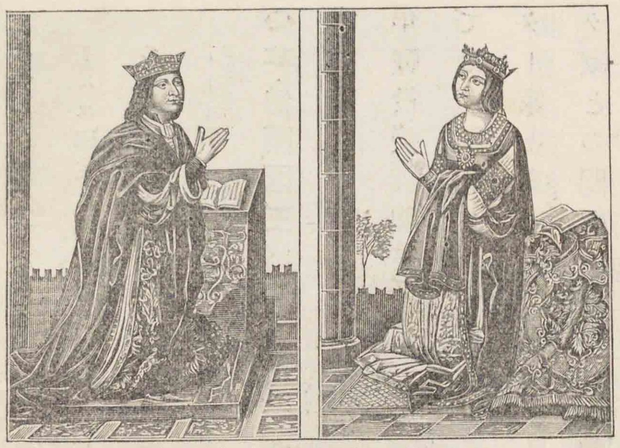
㊄ 英・佛兩國王權の確立　百年戰役後、英蘭ではランカスター(Lancaster)家とヨーク(York)家との間に王位繼承の爭が起り(一四五五、國內の貴族は



チャールス七世の戴冠式

薔薇戰役

兩派に分れ、薔薇戰役(ショウビ War of Roses (1455—85))といふ大內亂が起つたが、後ヘンリ七世(ランカスター家の支族チュードル家)(Henry (1485—1509))が卽位し、エリザベス(ヨーク家の王女)(Elizabeth)と結婚し兩家が合一して局を結んだ(一四八五)。この兩戰役によつて、貴族が多く滅びたから、王はこれより貴族を抑へて王權を伸張し、王室の富盛を計つた。佛蘭西では百年戰役の結果領土を回收して、國民的思想は大いに發達し、王權の隆盛に伴ひて封建制度は廢れ、中央集權の實揚り第十五世紀末には王室は殆ど全國を領するに至つた。



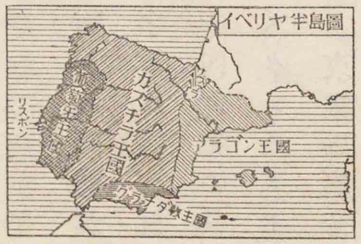
フェルヂナンドとイサベラ

西班牙の興起

六 西班牙の興起　第八世紀、西班牙はサラセン人(Saracens)に征服されたが(第七章參照)、西サラセン帝國の衰微するに至り基督教の諸小王國が起つて、サラセン人を南方に驅逐(クチク)した。かくて第十五世紀の半、アラゴン(Aragon)王子フェルヂナンド(Ferdinand (1476—1516))がカスチラ(Castilla)の王女イサベラ(Isabela)と結婚し、後兩國は合併して西班牙(イスパニヤ Spain (Hispania))王國の基が出來た(一四七九)。

葡萄牙の興起

七 葡萄牙の興起　葡萄牙(ポルトガル Portugal)は、もとカスチラ王國の屬國であつた。第十一世紀の末、その將軍ヘンリ(Henry)は、自立して葡萄牙伯と稱してゐたが、遂に獨立して王國を建設した(一一三九)。第十五世紀に至り、國王ジョン二世(John (1481—1495))は大諸侯の領土を奪つて、王權を伸張した。



第十二章　土耳其の興起　東羅馬帝國の滅亡

蒙古人の南露西亞侵略

一 蒙古人の侵入　第十三世紀の初(西歐羅巴人が十字軍を起し東征した頃)蒙古の太祖成吉思汗(ジンギスカン Gingiskhan)の部下の一隊は、南露西亞を侵略したが、其の孫拔都(バツ Batu)は再び

抜都の西征

土耳其の建國

東羅馬帝國の滅亡

露西亞に侵入し、中部歐羅巴までも蹂躙して、南露に欽察汗國(Kiptchak Khan)を建てた（一二四三）。その後旭烈兀(Hulagu)（太祖の孫）は東サラセン帝國を仆して伊兒汗國(Il Khan)を建てた（一二五八）。

㊁**土耳其の勃興**　この頃オスマン＝トルコ人(Osmanli-Turks)（土耳其人の一派）は蒙古人に逐はれて、中央亞細亞から小亞細亞に移り、その酋長オスマン(Osman (1259—1326))はその一部を征服して、一帝國を建てた（一二九九）。

マホメット二世

㊂**東羅馬帝國の滅亡**　東羅馬帝國は第九世紀の末頃より國勢が大いに衰へ、一時第四回十字軍に滅された（程なく再興）こともあつたが、第十四世紀の終、新興の土耳其の爲に、コンスタンチノープルを包圍された（一三九六）。東羅馬皇帝は、中部亞細亞に大帝國を建て雄名を轟かせてゐた帖木兒(Timur (Tamerlane))の來援を得て、一時危機を脱するを得たが、程なく帖木兒が死んで、其の帝國が瓦解したので、土耳其は再び勢を得、その皇帝マホメット二世(Mahomet (1451—81))は、終にコンスタンチノープルを陷れて、東羅馬帝國を滅し（一四五三）、こゝに都を遷した。かくてセント＝ソフィヤ(St. Sophia)大聖堂に輝いてゐた金色の十字架は撤せられて、新月旗が飜るに至つた。

第十三章　文藝復興　地理上の發見

㊀**文藝復興**　羅馬の文化がゲルマニヤ蠻族に蹂躙されて、一時暗黑世界となつた歐羅巴は、其後基督教の感化によつて、漸く中世の文化を見るに至つたが、第十三・四世紀の頃から、宗教を離れて古の希臘・羅馬の文藝を自由に研究する文藝復興(Renaissance)といふ文化的運動が起つた。第十四世紀に入つて（一）古學は伊太利に復興した。ダンテ(Dante (1265—1321))（「神曲」の作者）・ペトラルカ(Petrarcha (1304—74))・ボッカチオ(Boccaccio (1313—75))（「デカメロン」の作者）等の人道學者(Humanist)は、古學復興の

古學の復興

先驅者（センクシャ）であつたが、會（タマタマ）東羅馬帝國の滅亡により、其の地の學者が古典の知識を抱いて、伊太利に逃れて來たので、一層盛んになり、その學風は漸次歐羅巴諸國に普及して、近世文明の端緒を開いた。

ダンテ（1265-1321）

美術の復興

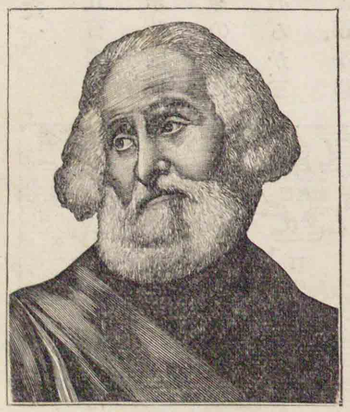
(二)美術も亦、伊太利に復興し、希臘・羅馬に倣つて眞美の發揮（ハツキ）に努めた。建築には、所謂復興式（Renaissance Style）を起し、ブルネレスコ（Brunellesco (1379—1446)）・ブラマンテ（Bramante (1444—1514)）はその巨匠（キヨシヨウ）であつた、又繪畫にはラファエル（Raphael (1483—1520)）（「聖母」の像に多くの傑作を遺す）・レオナルド=ダ=ヴィンチ（Leonard da Vinci (1452—1529)）（傑作「最後の晩餐」）、彫刻及び繪畫には、ミケランジェロ（Michelangelo (1475—1564)）等の大家が前後して現はれた。

諸發明

㊁器械の發明 文藝復興の頃科學も發達し、コペルニクス（Copernicus (1473—1543)）（獨逸人）は地動說を唱へ、ガリレオ（Galileo (1564—1642)）（伊太利人）は物理・數學に長じて、望遠鏡を發明し、第十五世紀の半、グーテンベルヒ（獨逸人）の發明した活版印刷は大いに文運の復興を助けた。尚ほこの時代には、時計の發明、磁石の改良等があつて、遠洋航海の發達を促した。

グーテンベルヒ（1397-1468）

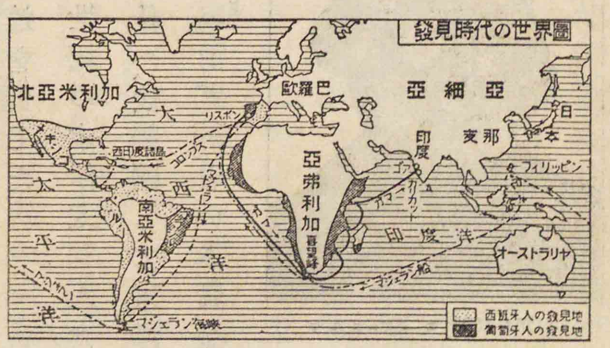
㊂歐羅巴人の航海・探檢思想の勃興 第十三世紀の末、伊太利人マルコ=ポーロ（Marco Polo (1254—1323)）（ヴェニス人）は支那に赴き元の忽必烈（クビライ）（Khubilai）に仕へ、後歸國して東洋見聞錄を著し、亞細亞諸國の狀況を紹介し、ジパング（Zipang）（日本）といふ黃金の豐富な國のあることを傳へて、大いに西歐羅人の探檢思想を煽（アフ）つた。然るに土耳其（トルコ）人が興り歐・亞の通商を妨げたので、歐羅巴人は東洋の特產（香料植物等の生活必要品）を得るの不便に堪へず、當時航海に用ゐられ始めた磁石を以て、海路


マルコ=ポーロ（1254-1323）

直ちに印度に赴かうと企てるに至つた。

マルコ=ポーロの東洋見聞錄の一節（日本）

ジパング（日本國）は東海の一島で、大陸を隔る千五百哩の洋上にある。住民は色白く、富裕で禮儀が正しい。宗敎は偶像崇拜である。全く外國の壓迫を蒙らず、彼等自身の王によつて統治されてゐる。そこには無盡藏の金があるが、王はその輸出を許さない。……王宮の屋根を全面金板を以て葺くこと、恰も吾々が住宅や敎會堂に鉛を用ゐるに等しい。天井にも亦金を用ゐてある。部屋々々には、可成厚い純金製の小テーブルが置かれ、窓にも金の裝飾が施されてある。又この島には、眞紅色の大形の丸い眞珠が多く產出されるが、其の價値は、われらの白色眞珠と同等又はそれ以上である。又死者は、土葬又は火葬にする。後者の場合には、眞珠を口中に入れて葬る習慣がある。

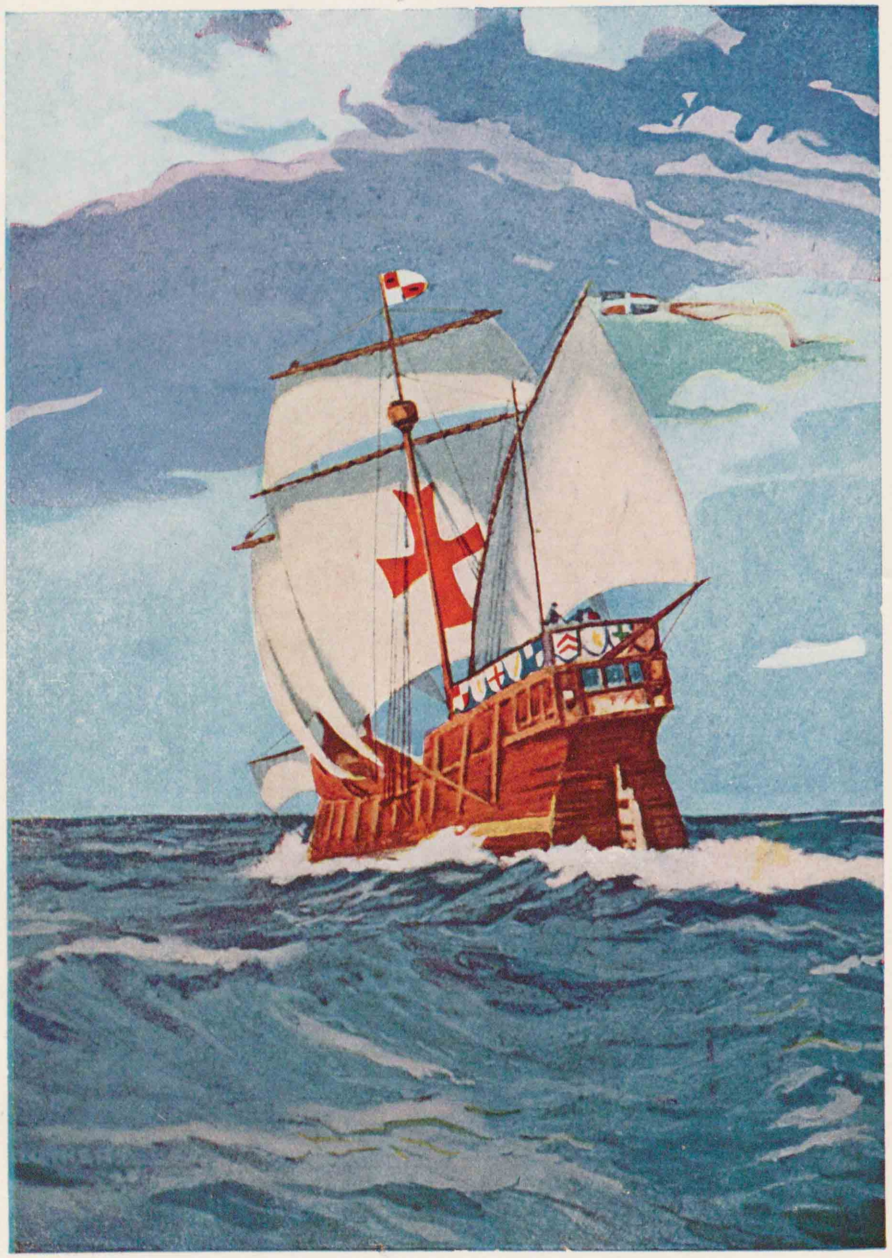


㈣ 阿弗利加周航と印度新航路の發見

第十五世紀の初頃から葡

サンタ=マリヤ號のコロンブス
Santa Maria

コロンブスは、西班牙の王后イサベラの援助により多年の志成り、サンタ=マリヤ號以下三艘の船に百二十人の乘組を載せて、一四九二年八月三日西班牙の東南パロス港を出帆した。途中幾多の困難に遭遇したが、殊に十月十日、不安と恐怖とにかられし水夫等は、コロンブスを海中に投ぜんと謀つたことさへあつた。時にコロンブスは水夫等を說き且つ慰めて「印度に達したら、富貴は汝等の心の儘である」といひ、又「たとひ汝等が如何にいふとも我は神の加護により印度に達する迄は、斷じてこの進行は止めない」とその決心を示し、遂に十二日午前二時新陸地を發見した。



コロンブスの西印度諸島發見

葡萄牙王室（ジョン一世の王子ヘンリ及びジョン二世の如き）では、熱心に航海を奬勵して、毎年阿弗利加の西海岸を探檢せしめたが、バーソロミュー＝ヂヤズ（Bartholomew Diaz）は喜望峰（Cape of Good Hope）（阿弗利加の南端）に達し（一四八六）ヴァスコ＝ダ＝ガマ（Vasco da Gama）は此處を周つて、遂に印度の西岸なるカリカット（Calicut）に着いた（一四九八）ので多年の宿望（シユクボウ・かねてよりのねがひ）であつた印度航路は發見せられた。それより葡萄牙人は盛に印度方面に航行し、通商を營むに至つた。

五　亞米利加の發見　伊太利人コロンブス（Columbus）（ジェノア人）は、早くより世界の球形であることを信じ、西航して印度に達すべき事を唱へ、西班牙の王后イサベラの援助を得て、遂に大西洋を西航して偶然（グウゼン・はからずも）今の西

西班牙王室に復命するコロンブス

亞米利加の名稱の起原

マジェラン一行の世界一週

印度諸島(West Indies)に達した(一四九二)。こゝに於て亞米利加大陸發見の端緒(タンショ)は開かれた。

亞米利加の名稱　西班牙政府よりの命を受けて、亞米利加を遠征した伊太利人アメリゴ=ヴェスプッチ(Amerigo Vespucci)は、更に葡萄牙政府の命によりブラジル(Brazil)をも探檢し、極めて精細に新發見地の事情を報導したので、獨逸人ワルドゼーミウレル(Waldsemüller)が出版した地圖に、新大陸を「アメリカ」(America)と名づけたから、この名が今の如く廣く用ゐられるやうになつた。

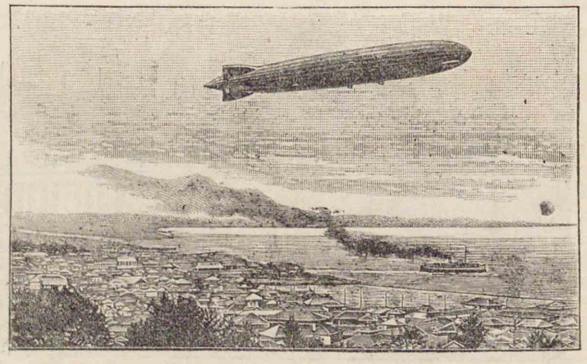
マジェラン (1470頃—1524)

六　世界一週の始　其の後マジェラン(Magellan)(葡萄牙人)は、西班牙王の命を受けて(一五一九)南米の東岸地方を探檢し、その南端(所謂マジェラン海峽)を周つて太平洋に出で、比律賓(フィリッピン)(Philippine)諸島を發見したが、不幸土人に殺された。其の部下は尚ほ航海をつゞけ、印度洋を横ぎり喜望岬を迂回(ウクワイ)して遂に歸國した(一五二二)。これが世界周

世界周航の記錄

航の始で、世界の球體なる事が實證された。

世界周航の記錄　交通機關の發達と共に、現今に於ては驚くべき短時間で世界を一週することが出來るに至つた。獨逸の飛行船ツェッペリン(Zeppelin)伯號は二十一日七時三十分で世界を周航し(一九二九年八月二十九日)、米國のポスト(Post)機は僅か七日十八時四十九分の短時間を以て世界一周を完成した(一九三三年七月二十二日)。ツェッペリン伯號はこの航空に當り、獨逸を發して露西亞・シベリヤの大空を征服して僅々五日間で我が帝都をも訪れ霞ヶ浦飛行場に着陸し、更に洋々たる太平洋を横斷して米國に向つた。マジェラン一行が前後三年間を要したのに比すれば隔世の感がある。



我帝都を訪問せるツェッペリン伯號

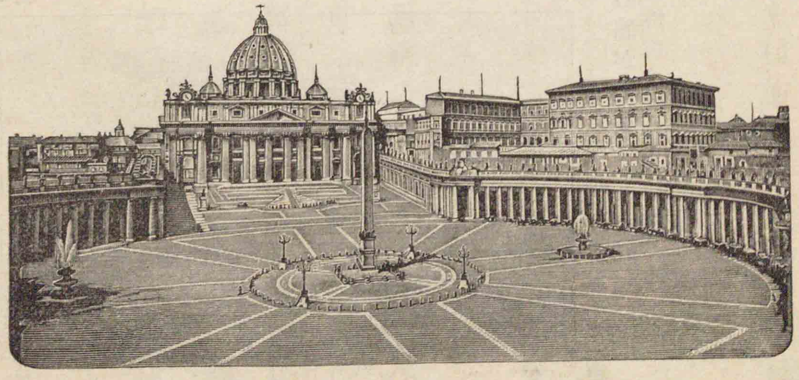
セントゥペートル大聖堂

法皇の命によりブラマンテが設計・起工しラファエル・ミケランジェロ等が相次で監督して成つたもので復興式建築の模範と稱せらる。

第三編　近古史

（宗教改革の時（一五一七）より亞米利加合衆國獨立の時（一七八三）に至る）

近古史　宗教改革が、西歐羅巴に唱へられてから新舊兩派の爭は、延いて歐洲諸國の紛亂となり、就中佛蘭西のユグノー戰役、獨逸を中心とした三十年戰役は著しいものであつたが、ウェストファリヤの和議で局を結んだ。これから獨逸は疲弊して、神聖羅馬帝國は名のみとなつた時、西班牙についで佛蘭西が歐洲政局の主動者となり、やゝ後れて新興の露西亞・普魯西が政局に加はり、英蘭は二度の革命によつて憲政が發達した。この期の終に自由・平等論が沸騰して、遂に亞米利加は獨立し、佛蘭



セントゥペートル大聖堂（1506—1626）

宗教改革の原因

贖宥―教會の定むる所により、赦された罪に對する罰を贖ふ爲に施すもので、之を受ける者に祈禱・善業（時に淨財の喜捨を）などを命ずる。罪を赦すものではない。

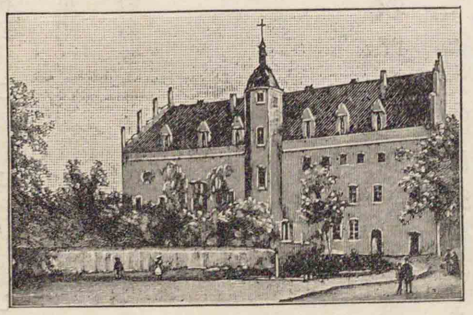
西は未曾有の大革命を起すに至つた。又世界政策（通商・植民）はこの期に愈々發達し、㈠第十六世紀は西・葡二國が優勢であつたが、㈡第十七世紀は初、和蘭が隆盛を極め、英蘭（後の英吉利）は競爭して之に代り、㈢第十八世紀は終始英・佛兩國の激しい競爭の時代であつた。

第十四章　宗教改革

㈠ 宗教改革の原因　第十四世紀以來、羅馬公教會内の綱紀紊れ、司祭（僧侶）間に軋轢を生じ早晩その改革に迫られてゐた。既に教會でも宗教會議（羅馬なるラテラン宮殿にて）の方法により、改革が企てられてゐたが、第十六世紀の初、羅馬法皇レオ十世（Leo 1513—22）がセントゥペートル（St. Peter）大聖堂改築の爲、舊例により諸國の信徒に贖宥（Indulgence）を施すの令を發し、信徒に淨財を喜捨することを勸めた。この時獨逸の羅馬公教會の司祭で、ウィッテンベルヒ（Wittenberg）大學の神學教授であつたマルチン＝ルーテル（Martin Luther）は九

ルーテル (1483—1546)

十五個條の檄文を公表して、贖宥を攻撃し、遂に宗教的革命を唱ふるに至つた(一五一七)。蓋、當時獨逸では(一)諸侯は、獨逸皇帝の權威の許から免れんとしてゐたから宗教上權利の主體たる法皇を攻撃したルーテルに同情したこと。(二)掠奪を事とせる武士に苦しめる農民富に誇れる大商人を詛へる細民は、自由を渇仰してルーテルに味方したこと。(三)文藝復興(Renaissance)の科學的・文學的新運動は、享樂的・自由的の古代希臘・羅馬の文化を理想視するものなれば、羅馬公教會の文藝の神聖を重視する思想と相容れ



ウィッテンベルヒ大學

ルーテルの略歴

ライプチヒの公開討論會

ルーテルがインゴルスタット大學教授エックと論爭する光景

ライプチヒに於ける公開討論會

なかつたこと、などが副因となつて全歐羅巴に波及する大運動となつた。

ルーテル　はサクソニャ(Saxony)(獨逸)の貧乏な鑛夫の子である。學資を得る爲に戸毎に歌ひながら苦學力行したが、後或る慈善家の援助でエルフルト(Erfurt)の大學に入り哲學・法律などを學んだ。その後間もなく、ウィッテンベルヒの修道院に入り、奮勵して司祭に叙せられた。その豐富な才能と雄辯とは、遂にウィッテンベルヒ大學の神學教授に任命せらるゝに至つた。この時宗教改革を唱へたのである。かくて彼は修道生活を捨てゝ、修道女カザリン(Catharine)と結婚した。宗教革命といふ大業をなしたルーテルを、新教徒は宗教界の大偉人と崇め、舊教徒は傳來の教義に反對する異端者と誹り、その評はとり〴〵である。

㈡チャールス五世とルーテル

この頃チャールス五世(Charles (1519—56))(西班牙王チャールス一世であつた)は

伊太利戰役
(獨・佛對抗戰役)
當時獨帝に屬してゐた伊太利は小諸國爭覇し絕えず外國の干渉を受けてゐた。

ウォルムス國會

プロテスタント(新教)の名稱の起原

獨逸皇帝となり、西班牙王位を兼ね、ハプスブルグ家及び西班牙王家の大領土(墺地利・西班牙・ネーデルランド・ナポリ・シシリー・西班牙の海外植民地等)を繼承し、その富强は全歐を壓した。時に佛蘭西王フランシス一世(Francis 1515—47)は之を妬み、帝と北部伊太利で前後四回抗爭した(所謂伊太利戰役。Italian Wars 1521—44)。そこでチャールス五世は獨逸國內諸侯に對する政策をも考慮して、羅馬法王と結託するの必要を認め、ウォルムス(Worms)に國會を開き(一五二一)、ルーテルを招き其の說を取消さしめようとしたが、ルーテルは之に應じなかつた。

プロテスタント　とは現今一般の新教派に對する名稱であるが、ウォルムスの國會後ルーテルは、益〻新教の弘布に力めたので、チャールス五世はスパイエル(Speyer)に國會を開いたが(一五二九)、この時は舊教派が優勢であつたから、新教派の諸侯等はその不利な決議に對して抗議書(Protestation)を提出した。之から新教のことを抗議派(プロテスタント Protestant)といふ。之に對して羅馬公教會を舊教と呼ぶことがある。

スパイエル抗議の紀念像

アウグスブルグ宗教和議

㈢アウグスブルグの宗教和議　獨逸諸侯の中には、ルーテルの新教に歸依して法皇に背き、教會の財産を沒收し、人民が法皇に納める獻納金を差押へたものも少くなかつた。又皇帝の强大を嫉んで反抗したので、チャールス五世は兵力を以て新教派を抑へようとしたが、土耳其がフランシス一世と結んで入寇し、また獨逸諸侯も連りに內部から掣肘したから、遂に讓步し、アウグスブルグ(Augsburg)宗教和議(一五五五)によつて信教の自由を公許した。

チャールス五世 (1519—56)

㈣新教三派の弘通　これからルーテルの新教は、獨逸及び北歐羅

新教三派

巴(丁抹・スカンヂナヴィヤ等)に弘まつた。この頃ツウィングリ(Zwingli (1484—1531))(瑞西人)も宗教改革を唱へたが、この派は瑞西に行はれ、カルヴィン(Calvin (1509—64))(佛人)も亦瑞西に於て別派の新教説を唱へたが、この派は次第に西歐羅巴(佛・英・蘭等)の諸國に弘まつた。

㊄宗教改革の反動　かく新教が諸國に弘まるに及び、舊教派はトリエント(Trient)宗教會議(一五四五—六四)を開き、或は宗教裁判(Inquisition)を行つて以て教會内部の刷新に着手し、又新教派に對抗して、教義を弘める爲め、數所に新修道會を創設した。その中西班牙の貴族イグナチウス=ロヨラ(Ignatius Loyola (1491—1556))が同志のフランシス=ザヴィエル(Francis Xavier (1506—52))等と創立した(一五四〇)ジェスイット會(Jesuit)(耶蘇會)(Society of Jesus)は最も有名である。彼等志操堅固なる會員は軍隊的組織によつて綱紀を正し、熱心に布教したから、舊教は再び振ひ始め、

イグナチウス=ロヨラ

その教育事業及び説法は、大いに社會の各階級に感動を與へ、その傳播の速かなる、遠く東亞・南米にまでも及んだ。我國の所謂天主教(切支丹宗)は、彼等の傳へたものである。

フランシス=ザヴィエル

聖女テレサ（テレジヤ）

聖女テレサ　ロヨラと同時代に舊教の恢復運動に盡力した女性がある。「刷新カルメル(Carmel)會」といふ修道會を建てた聖女テレサ(Theresa)その人である。テレサは西班牙の貴族の家に生れ、十八歳の頃修道院に入り、あらゆる行者の難修業に堪へ、遂に偉大なる神秘的學者となつた。その身は病害と迫害の中にあつて、常に微笑と快活とを保ち以て舊教擁護に力を盡した。彼女の修道院内の祈禱の力は、當時萬里の波濤を蹴つて日本にまで渡り、僅々二年間に數萬の信徒を

聖女テレサ

歸依せしめたフランシス＝ザヴィエルの功蹟よりも大であつたと言はれてゐる。

第十五章　西班牙の强大　和蘭の獨立　英蘭の興隆

西・葡兩國の世界政策

㈠西班牙・葡萄牙の世界政策　中古の末、新航路・新大陸の發見があつてから西・葡兩國は航海・探檢を競ひ、以て廣大な領土を獲得して、第十六世紀は富盛を極めた。卽ち西班牙は墨西哥(Mexico)・秘露(Peru)を征服して盛に植民し、金銀を採掘し、通商の利を收め、又東洋貿易をも志し、比律賓諸島を征服してマニラ(Manila)を根據地とした。葡萄牙は、新大陸ではブラジル(Brazil)を發見して、こゝに植民したが、主に東洋方面の通商に志し、印度のゴア(Goa)を根據地として、サラセン人・伊太利人を壓倒して、東洋貿易の巨利を占めた。かく印度洋・大西洋の航行盛となるに及び、地中海の諸都市は衰へ、葡萄牙の首都リスボン(Lisbon)は歐羅巴第一

レパントの海戰　希臘の西海岸に在る

ネーデルランドの國情

の貿易港となつた。

㈡西班牙の强盛　西班牙王フィリップ二世(Philip)(1556—98)(獨帝チャールス五世の子一五五六年卽位)は、伊太利(一部)・ネーデルランド(Netherlands)(今の白・蘭地方)及び海外に廣大な領土を有してゐたが、レパント(Lepanto)の海戰に土耳其を粉碎し(一五七一)、又葡萄牙王を兼ねて、その領地を收めるに及び(一五八〇)其の國富及び海上權は列强を壓するに至つた。かくて王は、基督教の擁護者舊教徒の選手として、全歐に覇たらんとした。

フィリップ二世

㈢和蘭の獨立　ネーデルランドは昔から種々の特權を有し、商工業が發達し、その北部諸州は新教(カルヴィン派)を奉じてゐたが、西班牙王フィリップ二世は、一切の特權を奪ひ、宗教裁判の勵行、司教(正僧)區の增加等により、新教弘通を阻止せんとしたので、人民は同盟して叛亂を起した。後南部諸州(舊教派)は西班牙に歸服

和蘭の建國

したが、北部七州は獨立を宣言し(一五八一)、オレンジ(Orange)公ウィリヤム(William (1533—84))を推して大統領とした。かくて次王フィリップ三世の時、兩國は休戰を約した(一六〇九)ので獨立の實を擧げ、茲に和蘭共和國(United Republic of Netherlands)が成立した。

英蘭教會の成立

(四) 英蘭の宗教改革　英蘭王ヘンリ八世(Henry (1500—47))は、初め信仰厚くルーテルの宗教改革説を攻撃して、法皇(レオ十世)の信任を得、「信仰保護者」(Defender of the Faith)の稱號を受けた位であつたが、王后カザリン(Catherine)(獨帝チャールス五世の叔母)を離婚して、宮女アン＝ボレイン(Anne Boleyn)と結婚せんとし、法皇に許を求めた。然るに法皇(クレメンス七世)は、その請をしりぞけたので、王は大いに怒つて法皇と關係を絶ち、議會の承認を經て、自ら英蘭教會(Anglican Church)(又は監督教會(Episcopale Church))の首長となつた(一五三五)。その後英蘭では女王マリー＝チューダー(Mary Tudor (1553—58))(ヘンリ八世の女カザリンの出)の時舊教に復したが、エリザベス(Elizabeth (1558—1603))女王(ヘンリ八世の女アン＝ボレインの出)の即位するに及んで新教(新教主義採用)を國教と定めた。然るに舊教

ヘンリー八世(1509—47)

グラーヴリーヌの海戰

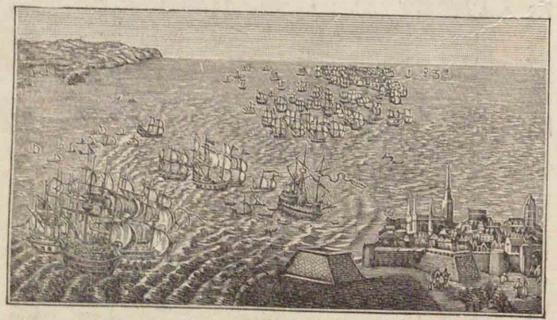
無敵艦隊の敗亡

徒は、エリザベスの王位を認めず、蘇格蘭(スコットランド)(Scotland)女王メリー＝スチュアート(Mary Stuart (1542—87))を迎立せんとし、西班牙王フィリップ二世も亦密かに之を援けた。然るに蘇格蘭に新教貴族の叛亂があつて、メリーは英蘭に逃れたので、エリザベスは之を監禁し後に殺した。フィリップ二世は大いに怒り、無敵艦隊(Invincible Armada)を編成して英蘭を襲つたが、却つて英吉利海峽(佛蘭西側グラーヴリーヌ沖)(Gravelines)に大敗した(一五八八)。これから西班牙の國勢は頓(トミ)に衰へ、英蘭は之に代つて、海上に雄飛するに至つた。

エリザベス(1558—1603)

エリザベス時代

女王の時代は、植民・貿易の氣運起りウォルター＝ローリー(Walter Raleigh (1552—1618))は、北米にヴァージニヤ(Virginia)植民地を開き



無敵艦隊

（一五八五）、東印度會社も創立された（一六〇〇）。又文藝も大いに榮え、所謂エリザベス時代を現出し、シェクスピヤ Shakespeare (1564–1616)（戯曲家）スペンサー Spenser (1553–99)（詩人）ベーコン Bacon (1561–1626)（哲學者）等の大家が輩出した。

第十六章　佛蘭西の宗教的內亂　三十年戰役

ユグノー戰役（一五六二―九八）八戰役あつた。

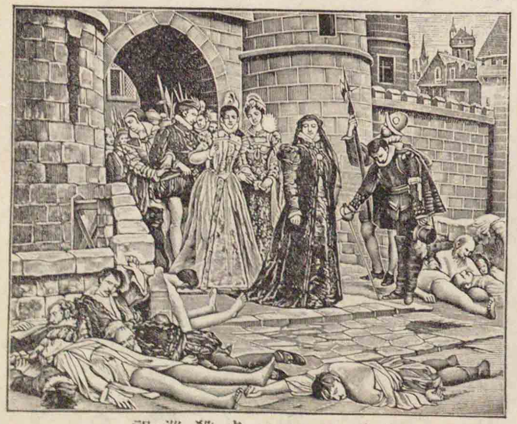
（一）ユグノー戰役

新教徒の舊教司祭慘殺

佛蘭西のカルヴィン派の新教徒をユグノー Huguenots といひ、フランシス一世以來虐待されてゐたが、漸次優勢となつた。當時佛蘭西では舊教（カトリク）・新教（プロテスタント）・政治の三黨派があつて、ギーズ Guise 公フランシス Francis は舊教派に、ブルボン Bourbon 家及びコリニー Admiral Coligny 提督等は新教派に、太后カザリン Catharine（フランシス二世、チャールス九世、ヘンリ三世の母）は政治派に首領で

セント＝ミカエルの虐殺（第二役　同聖人の祭日、一五六七年九月廿九日）
セント＝バーソロミューの虐殺（第三役の後同聖人の祭日、一五七二年八月廿四日）

あつた。然るに其の後新舊兩派の軋轢（アツレキ）が著しくなり、且ヘリン二世（フランシス一世の子）の死後、幼王（フランシス二世、チャールス九世）の下に實權を握つてゐた母后カザリン（ヘンリ二世后）が渦中（クワチュウ）に入るに及び、大內亂となつた。之をユグノー戰役といふ。この戰役は佛蘭西未曾有（ミゾウ）の殘虐を極めたもので、時に新教徒は舊教の司祭（僧侶）・修道者を謀殺（ボウサツ）し、ニーム Nîmes に於て數百人の舊教徒を絞殺（カウサツ）した（セント＝ミカエルの虐殺 St. Michael）。又第三役の後には政權に渴仰（カツガウ）せる太后カザリンの陰謀により、セント＝バーソロミュー St. Bartholomew の虐殺とて新教徒數萬人を慘殺（ザンサツ）した。かく宗教の爭に政治的陰謀が加はつて紛糾（フンキウ）を極めたが、ヘンリ四世 Henry (1589–1610)（新教派の首領ブルボン朝の祖）が即位し、自ら舊教に改宗し、ナント勅令 Edict of Nantes（信仰自由公許）を發するに及び國內が始めて治つた。



カザリンの虐殺巡視

三十年戰役の原因
三十年戰役(一六一八—四八)
ボヘミヤ戰役(第一期)
丁抹との戰役(第二期)
瑞典との戰役(第三期)
佛・瑞兩國との戰役(第四期)

㈢三十年戰役 獨逸ではアウグスブルグ(Augsburg)宗教和議(1555)の後新教弘まり、國內は平穩であつたが、ルドルフ(Rudolf 1576—1612)二世の頃舊教が漸く盛になるに及び新舊兩派は互に反目するに至つた。新教徒はファルツ選帝伯(Pfalz (Platinate))庇護の下に福音同盟(Evangelical Union)を組織し、舊教徒も亦公教聯合(Catholic League)を結び、バヴァリヤ(Bavaria)公を首領として、互に對峙してゐた。時にハプスブルグ家が此の爭を利用して、己が強大を圖らんとしたので大戰亂となつた。

ワレンスタイン(1583—1634)

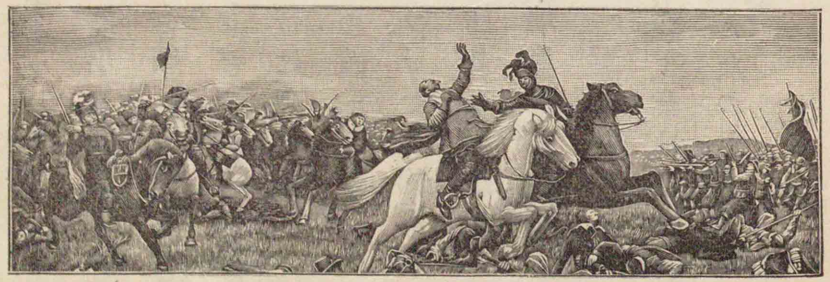
(一)ボヘミヤ戰役(Bohemia 1618—23) 舊教徒なるフェルヂナンド二世(ハプスブルグ家、ルドルフ二世の從弟)はボヘミヤ(新教徒の根據)王となり(一六一八)、翌年帝位(獨帝マチヤスの後を繼いで)に卽いたが、之より先、ボヘミヤ人はファルツ選帝伯を迎へて王とし叛旗を飜した(一六一八)。よつて皇帝は將軍チリー(Tilly 1559—1632)をボヘミヤに送つて之を平げた(ワイセンブルグの戰一六二〇)。

瑞典王グスタフ=アドルフはハプスブルグ家を抑へ、バルト海の制海權を得、北歐に覇たらんとした。

(二)丁抹との戰役(1625—29) 丁抹王クリスチャン(Christian 1588—1648)四世は英・蘭兩國と結び、新教徒救援を名をして獨逸に侵入したが(一六二五)、名將ワレンスタイン(Wallenstein 1583—1634)及びチリー等の帝軍に破られて講和した。

(三)瑞典との戰役(1630—35) 然るに熱心な新教徒なる瑞典王グスタフ=アドルフ(Gustavus Adolphus 1611—32)はバルト海(Baltic Sea)岸の地を獲得せんとし、佛蘭西と結んで獨逸に侵入し(一六三〇)、新教徒を援けて屢々帝軍を破つたが、ワレンスタインとリュッツェンに戰つて陣

グスタフアドルフ(1611—32)


リュッツェンの戰(1632)

歿した。（四）佛・瑞兩國との戰役（第四期戰役）（1635—48）、佛蘭西はハプスブルグ家に對する政略上、瑞典と氣脈を通じ共に兵を獨逸に出し、新教徒を援けて墺地利以下と戰ひ、處々に之を破つた。此の頃は、戰役當初の宗教的目的は他に外れて、ブルボン家（佛蘭西）對ハプスブルグ家（墺地利）を主とする國際的大戰亂となつた。然るに皇帝は、衰勢挽回（バンクワイ）（とりかへす）の困難を察して平和を希ひ、國內新教諸侯も、佛蘭西の政治的野心を惡み、戰爭の繼續を好まなかつたので、遂にウェストファリヤ（Westphalia）和約が成立し（一六四八）、戰亂が收まつた。

ウェストファリヤ和約

（五）此の條約に依て（1）新舊兩教徒は同權を得、（2）瑞典・和蘭は獨立を認められ、（3）佛蘭西・瑞典は各新領土を加へた。

此の戰役に依て獨逸は人口減少し、田園は荒れ、商工業は衰微して、ハンザ同盟は解散し、神聖羅馬帝國は唯名のみとなつたが、佛蘭西・瑞典は嶄然（ザンゼン）頭角を現すに至つた。

第十七章　和蘭の隆盛　英蘭の革命

和蘭の通商植民事業

（一）和蘭の通商植民事業　和蘭は、西班牙・葡萄牙等よりも後れて、世界政策の競爭場裡（ヂヤウリ）に現れたが、國民が勤勉・溫順・堅忍で、侵略よりも商利を收めることを主眼としたので、東洋方面でも西・葡兩國人を凌いで優勢となつた。第十七世紀初には、東印度會社が創立され、次でジャヴァ（Java）島のバタヴィヤ（Batavia）に總督府を置いて（一六一九）、東方經營の根據地とし、一時は臺灣をも占領し、終にはわが國との貿易を獨占するに至つた。

當時の和蘭と日本

當時の和蘭と日本　西暦一六〇〇年（慶長五年）ヤン＝ヨーステン（Yan Joosten）等の乘組んだ和蘭船が我國に漂着し、その後九年和蘭の商船は我が平戶で貿易を許され、島原の亂後は我國との貿易を獨占した。今尚我國にジャガタラいも（馬鈴薯）、ランドセル（Randsel—背囊）、ドンタク（Zondag—日曜、半ドン—土曜）、メス（Mes—小刀）等の外來語のあるのは、その名殘

和蘭人の海外發展
北米の和蘭植民地
ニュー＝ネーデルランド（今のニューヨーク）
ニュー＝ジャーシー地方
和蘭學藝の勃興
王權神授說

である。

㈡ 和蘭の隆盛 和蘭人タスマン(Tasman)は、南太平洋に於て、タスマニヤ(Tasmania)・ニュージーランド(New Zealand)・ニュー＝ホルランド(New Holland)（今の濠洲）などを發見し、歐羅巴各地に於ても、和蘭人は商工業、漁業上にハンザ及び英・佛兩國を壓し、殆ど海運業を獨占し、北米にまでも植民した。かく第十七世紀前半は、西班牙に代つて世界無比の富國となり、文運も勃興し、哲學者スピノザ(Spinoza (1632—77))法學者グロチウス(Grotius (1583—1645))畫家ヴァン＝ダイク(Van Dijk (1599—1641))等の大家を出した。

㈢ 英蘭の第一革命 英蘭(England)では女王エリザベスが死んで親族なる蘇格蘭(スコットランド Scotland)王ジェームス(James (1603—25))六世（メリー女王の子 英蘭王ジェームス一世）が入つて王位を繼承した（一六〇三）。王及び其子チャールス(Charles (1625—49))一世は、

刑場に趣くチャールス一世

クロンウェルの武斷政治

クロンウェル

王權神授說(Divine Right of Kings)を唱へて、いづれも秕政(ヒセイ わるいせいぢ)を行つた。殊にチャールス一世は前後二回も議會を解散し、終に武力を以て之を抑へんとしたから、議會は兵を擧げて反抗し、これから王黨(Royalists)（騎士派 Cavaliers）と議會黨(Parliamentarians)（圓顱派(エンロ) Roundheads）との二に分れて、八年に亙る大內亂(1642—49)が起つた。この時、議會黨の將軍クロンウェルは連りに王黨の軍を破り、遂に議會は王を捕へて之を審問し、死刑に處し、また共和政體を建てた（一六四九）。

㈣ 共和政治 かくてクロンウェル(Cromwell (1599—1658))は獨立黨(Independent)（當時議會黨は獨立黨と長老黨(Presbyterians)に分裂してゐた）を率(ヒキ)ゐて、大いに勢を得、推されて共和政府の統監(Lord Protector)となり（一六五三）、內は奢侈を戒め綱紀を肅正(シユクセイ)し、外は航海條例(Navigation Act)を發して和蘭の海運業を抑へ、又佛蘭西と結んで西班牙を攻めて、大いに國威を揚げた。されどその武斷政治の嚴酷(ゲンコク)は、國民の嫌惡(ケンヲ)を招き、其の死後間もな

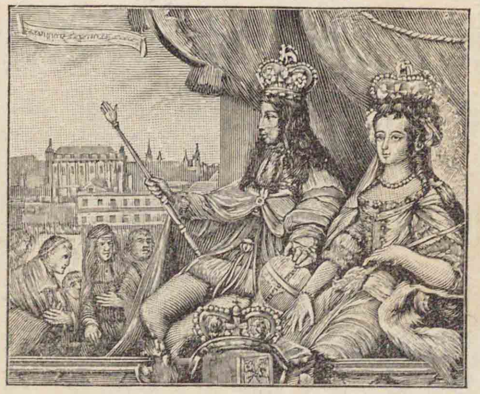
王政復古
二大政黨樹立の起原
政黨內閣の濫觴
名譽革命
名譽革命　大不列顚王國の成立(英吉利王國)

く、チャールス二世(前王チャールス一世の子) Charles (1660—85) が迎へられて、王政が回復した(一六六〇)。

二大政黨の樹立　この頃トリー黨 Tories・ホイッグ黨 Whigs の二大政黨が出來た。前者は王權を重んじ、稍〻保守的であつたから後世保守黨 Conservative と變形し後者は稍〻進歩的の考へを持つてゐたから、後に自由黨 Liberals となづけた。然しチャールス二世當時の內閣は兩政黨員から任用してゐたので、色々の不便があつた。それで後ウィリヤム三世はホイッグ黨員のみを以て內閣を組織させた。之が政黨內閣の濫觴(ランシャウ)である。

五　第二革命　然るにチャールス二世も、次の王ジェームス二世(前王の弟) James (1685—88) も專制政治を行ひ、外交政策を誤つて、國威を墜したので全く民望を失ひ國外に逃れた。依て國民は其女婿なるウィリヤム三世 William (1688—1702) を和蘭より迎へて王位に卽けた(一六八八)。之を名譽革命 Glorious Revolution といふ。

六　大不列顚王國　ジェームス一世(スチュアート王家の祖)



ウィリヤム三世と王妃

英國現王室の祖
ジョージ一世と
明治天皇

以來、英蘭・蘇格蘭(スコットランド)兩國は同一の王を戴いてゐたが、別々の議會を有した二國であつた。然るに女王アン(Anne 1702—14)の時、兩國の議會は合同して一國となり、大不列顚(ブリテン)王國(Kingdom of Great Britain)と稱した(一七〇七)。日本では之を英吉利(イギリス)又は英國といふ。

ジョージ一世

その後女王が歿して嗣なく、親族なる獨逸のハノーヴァー(Hanover)侯ジョージ一世(ジェームス一世の外曾孫)(George 1714—27)が入つて王位に登つた(一七一四)。これが現王室の祖である。

ジョージ一世 が即位の後、議會に王室費の増額を要求したが、議會は否決した。王は尚も強請すると一議員は「王よハノーヴァーに還られよ、吾々はかゝる王を戴くことを望まない」といつたといふ。我が明治天皇の時、議會は滿場一致で皇室費増額を可決した(明治四十一年)。天皇の御仁慈なる、その年度増額の金を人民救護の資にとて御下賜になつた。時の首相桂太郎はこの叡慮を奉戴して恩賜財團濟生會を設立した。

リシュリューとマザレン

ルイ十四世の内治

彼是對照して我國體の特異なる點がわかる。

第十八章　佛蘭西の强盛

㊀佛蘭西の興隆　佛蘭西では、第十七世紀に、樞機官(カルヂナル Cardinal)(大僧正)なるリシュリュー(Richelieu 1585—1642)(ルイ十三世の時)・マザレン(Mazarin 1602—61)(ルイ十四世の時)の二大政治家が相次で宰相(サイシヤウ)となり、王權の擴張を圖つた。リシュリューの政策は(一)國王の權力を佛蘭西第一とすること。(二)佛蘭西の國威を歐羅巴第一とすることとであつたが、マザレンも亦此の政策を繼ぎ、その實績を擧げたので佛蘭西は大いに興隆した。

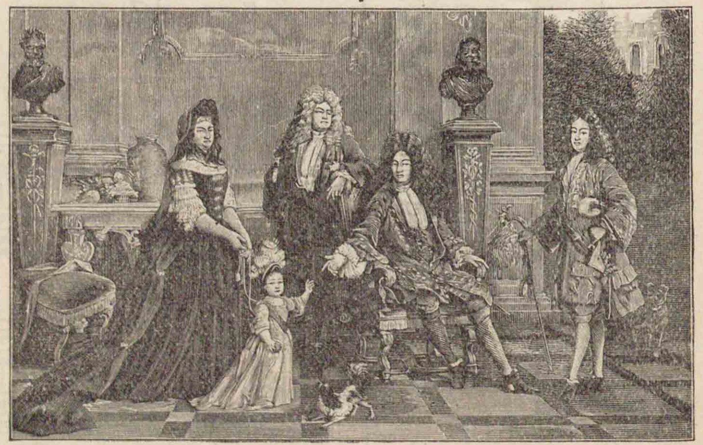
リシュリー (1585—1642)

㊁ルイ十四世　マザレンの死後(一六六一)國王ルイ(Louis 1643—1715)十四世は、親ら政治をとり、保護政策の父と呼ばるる財政家コルベール(Colbert 1619—83)を擢(タク)用(ヨウ)して、産業を奬勵し、植民貿易を興し、財政を整理し、ルーヴォア(Louvois 1941—91)をして、軍制を改革せしめたから、國力は愈〻充實した。

コルベール(1619—83)

ルイ十四世の外征

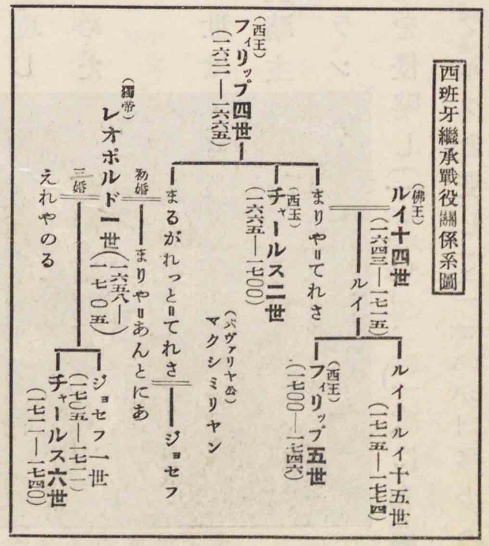
㊂ルイ十四世の外征　ルイ十四世は夙に歐羅巴に雄飛せんと欲し、侵略主義をとり、(一)西班牙領ネーデルランドに相續權があると主張して之を侵略し(一六六七—一六六八)、(二)次に和蘭と戰ひ(一六七二—一六七八)、(三)更に獨逸のファルツ(Pfalz)を侵して(一六八八—一六九七)多少の



ルイ十四世とその家族

西班牙繼承戰役（一七〇一—一七一三）

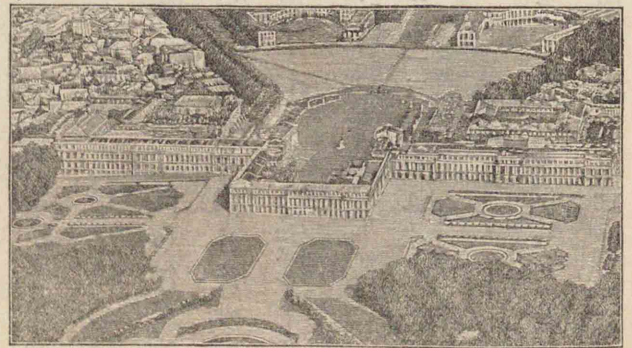
利を收めたが、(四)晩年最も重大な西班牙繼承戰役を起した。この頃西班牙王チャールス Charles (1665—1700) 二世が死し、ルイ十四世の孫フィリップ Philip (1700—46) 五世が、遺命により其の王位を繼いだが、獨帝レオポルド Leopold (1658—1705) 一世は其子チャールスを立てんとし、佛蘭西の強大を恐れてゐる英・蘭・葡等の強國と同盟して、佛蘭西と戰を開いた(一七〇一)。佛蘭西は一時苦境に陷つたが、獨逸でチャールス(父レオポルド一世及び兄ジョセフ一世兩帝死す)が帝位に上る(チャールス六世 1711—40)に及び局面一變し、列國はユトレヒト Utrecht 條約を結び(一七一三)佛・西兩國の合併せざるを條件として、フィリップ五世の王位繼承を認めた。



ルイ十四世の豪奢
文藝の奬勵

四 ルイ十四世の榮華と佛蘭西の學藝・風俗

佛蘭西は、國力の充實と共に中央集權完成し、ルイ十四世は「朕は國家なり」L'Etat c'est moi. と稱して專制政治を行ひ、壯麗なヴェルサイユ Versailles 宮殿を營み、朝儀を定めて王者の威嚴を示し、歌舞・盛宴を張つて歡樂を擅（ホシイママ）にした。かくて佛蘭西語は、歐洲上流社會の用語となり、その文學・儀式・風俗等も各國の模範となり、歐洲文化の中心となつた。又王は文藝を奬勵したから、コルネーユ Corneille (1606—84)・ラシーヌ Racine (1639—99)(悲劇)・モリエール Molière (1622—73)(喜劇)等の大家も出た。されど宮廷の奢侈と連年の外征とは、次第に國庫の缺乏を來し、人民は疲弊し、後の大革命の芽は既にこゝに萌（キザ）した。


飛行機から見たヴェルサイユ宮殿

露西亞の興起

ロマノフ家の起原

第十九章　露西亞の勃興

㈠露西亞の興起　第九世紀の半ルーリック（Rurik）の建てた（第八章參照）露西亞は、第十三世紀の半以後、蒙古の欽察汗國に臣事してゐたが、第十五世紀末モスコー太公イワン（Ivan）三世は自立して、東羅馬皇帝（既に亡びたる）の姪を娶つてその繼承者に擬し、希臘正教の保護者を以て自ら任じた。その孫イワン（Ivan 1533—84）四世は、全露西亞のツァール（Czar）（ケーザルより出た名稱皇帝の意）と稱したが、間もなく皇統が絶え、第十七世紀の初、ルーリック家の遠裔なるミカエル＝ロマノフ（Michael Romanov 1613—45）が選ばれて皇帝となつた（一六一三）。これがロマノフ（Romanov 1613—1917）家の始祖である。

ミカエル＝ロマノフ

㈡ペートル大帝　その後ロマノフ家のペートル大帝（Peter the Great 1682—1725）が即位した（一六八二）。當時、露西亞は瑞典・土耳其に塞がれて良港なく、文化も頗る低かつたが、大帝は南方土耳其（Turkey）を討つてアゾフ（Azov）海附近を奪ひ（一六九六）、獨・蘭・英等の諸國を巡歷して、その國情を視察すると共に自ら學術・技藝を體得して歸り、西歐諸國の風に倣つて、制度・文物・風俗等の改善を計り、以て其の面目を一新した。大帝は又土耳其に對する政略上、國內希臘正教の統治者となり（「希臘教徒の保護者」なる美名を土耳其領內の同教徒に示す爲）、露西亞（Russian）教會（Church）の基を開き、以て政治・宗教の兩權を統べた。

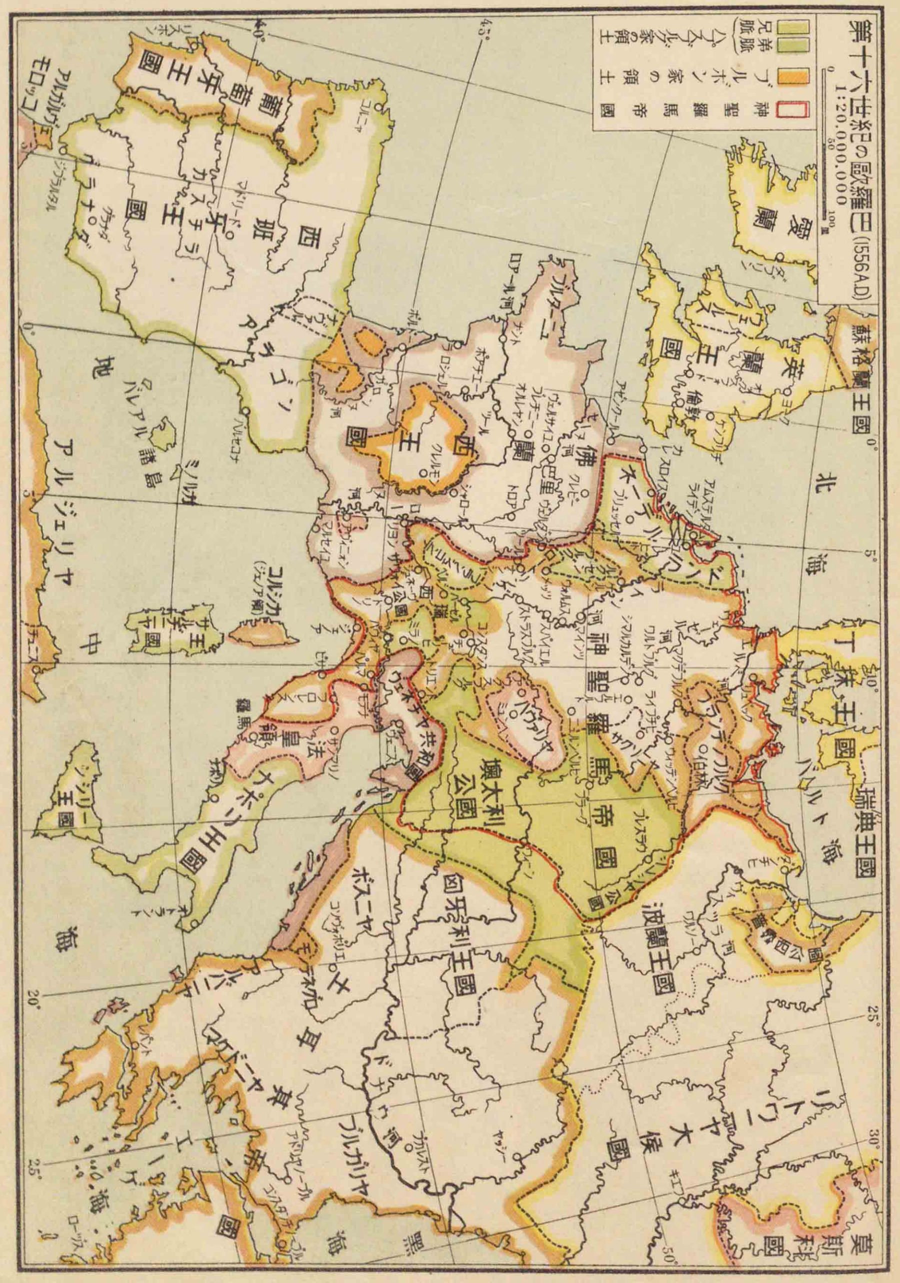
土耳其の希臘正教　回教國土耳其の治下にあつても君府は希臘正教の中心であつた。

露西亞教會の起原

露西亞の國是の萠芽

十六世紀頃のロシヤの聖堂

露國の國是　「朕の欲する所は陸に非ずして水である」とは、ペートル大帝の常に口にせる語で、その後歷代皇帝の海外侵略の方針となつたのであるが、彼の外遊中、英王ウィリヤム三世に招かれて大觀艦式に列した時、年來の希望一時に燃え上り、自分も亦他日かゝる大艦隊を備へて、世界に雄飛せんものをと決心したのである。



北方戰役（一七〇〇—二一）

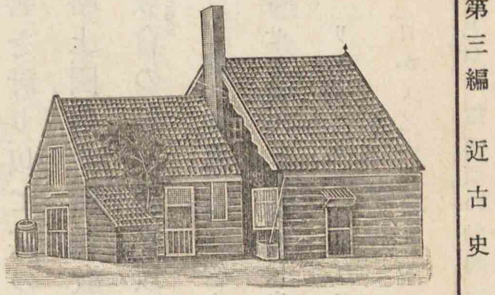
ナルヴァの戰

ペテルブルグの建設

ポルタヴァの戰

㊂北方戰役

この頃瑞典(スウェーデン Sweden)は、バルト海岸の大部を領し、北歐第一の强國であつた。バルト(Baltic Sea)海岸略取の野心に燃えてゐたペートル大帝は、瑞典王チャールス十二世(Charles (1697—1718))の年少なるに乘じ、丁抹(デンマルク Denmark)波蘭(ポーランド Poland)と同盟して瑞典を分割(ブンカツ)せんとした。然るにチャールス十二世は、之を悟り機先を制して先づ丁抹を攻め降し(一七〇〇)、ついでペー



ペートル大帝外遊中の寓居

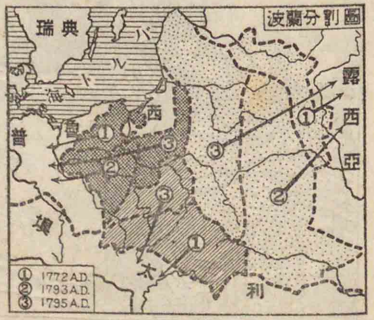
トル大帝の軍をナルヴァ(Narva)に粉碎し(一七〇〇)、轉じて波蘭・サクソニヤ(Poland Saxony)に侵入した。大帝は此の間に、バルト海岸の瑞典領を取つて帝都ペテルブルグ(Petersburg)(今のレニングラード Leningrad)を建設した。チャールス十二世は再び露西亞に攻入つたが却てポルタヴァ(Poltava)に

ペートル大帝

チャールス十二世(1697—1718)

カザリン二世(1762—96)

粉粹された(一七〇九)尙も土耳其と結んで露國に當らんとしたが成功せず、歸國後諾威(ノルウエー Norway)との交戰中陣歿した(一七一八)。



波蘭の分割圖

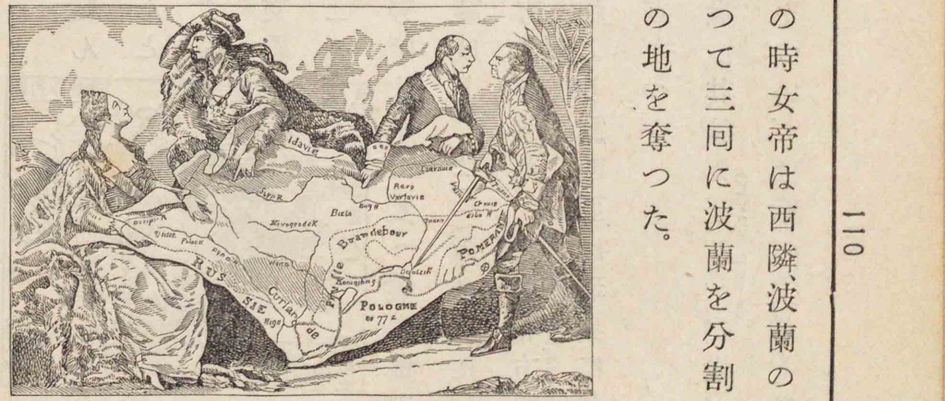
かくて瑞典の勢は次第に衰へ、遂に露西亞との間に和議成り(一七二一)露西亞にバルト海岸の地方を與へた。之を北方戰役(Northern War 1700—21)といふ。これより露西亞は瑞典に代り、北歐の强國となつた。

㊃ カザリン二世　其後カザリン(Catherine 1762—96)二世が即位するや(一七六二)ペートル大帝の遺志をついで西歐の文化を輸

波蘭の分割
第一回―露・墺・普（一七七二）
第二回―露・普（一七九三）
第三回―露・墺・普（一七九五）
波蘭滅亡の原因

入し、内治を勵み、外國經略に力めた。この時女帝は西隣、波蘭の衰微せるに乘じ、墺地利・普魯西の兩國と謀つて三回に波蘭を分割して遂に滅し、又土耳其と戰つて黒海(Black Sea)北岸の地を奪つた。

波蘭滅亡の原因　波蘭の分割は、第十八世紀の罪惡の歴史といはれてゐる。この國は第十一世紀の頃スラヴ族の建てた王國で一時强盛であつたが（一）天然の國境なきこと（二）貴族の跋扈甚だしく、中等社會存在せず、黨爭が烈しくて、社會の狀態が不良であつたこと（三）國會の制度の不備であつたこと等により外國の干渉する處となり遂に滅亡した。その後屢〻獨立を企て何時も失敗したが、第二十世紀に至り世界大戰の結果復興するを得た。



波蘭の分割（諷刺畫）

露西亞の極東經營

普魯西の興起

㈤露西亞の亞細亞經略　イワン四世の時、西比利亞(Siberia)の一部を取つて侵略の端緒を開いたが、第十七世紀には太平洋岸（オホーツク海よりカムチャッカ半島）に達し、ペートル大帝の時、清國（聖祖康熙帝の時）と尼布楚(ネルチンスク Nertchinske)條約を結んで（一六八九）、兩國の境界を定めた。カザリン二世の代に及んで、イルクック(Irkutsk)に日本語の學校を設け、千島を占領し、またラックスマン(Laxmann)を使節として、我國に通商を求めた（一七九二―寛政四年、光格天皇・德川家齊の頃）。

第二十章　普魯西の勃興

㈠普魯西の興起　普魯西(プロシヤ Prussia)は第十七世紀の初にブランデンブルグ(Brandenburg)侯國（七選擧侯國の一、第九章參照）が、舊獨逸武士團所領を併有したもので、その主フレデリック(Frederick)三世（1688—1713）は普魯西王として

ポツダムの巨人兵と
フレデリック゠ウィリヤム一世

墺地利繼承戰役(一七四〇—四八)

原因

第一シレシヤ役(一七四〇—四二)

認められ、フレデリック一世と稱した(一七〇一)。その子フレデリック=ウィリヤム一世(Frederick William (1713—40))は、極端な實際家で、勤儉・尚武を旨として内政を改革した。その子が有名なフレデリック大王(二世)(Frederick the Great (1740—86))である。

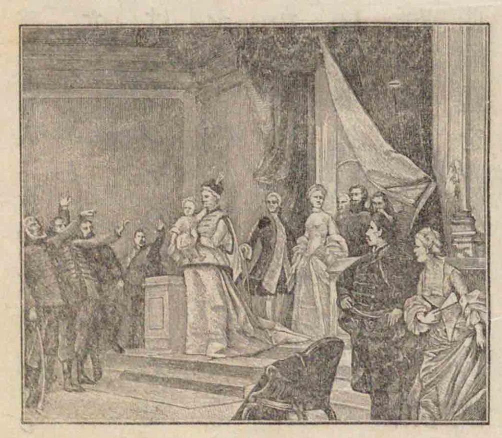
㊁墺地利繼承戰役　獨逸皇帝(墺地利公洪牙利王)チャールス六世(Charles (1711—40))は男子がなかつたので、存命中にハプスブルグ家の全領を皇女に讓る爲め、女子の相續を許す家憲(曲範)(Pragmatic Sanction)を制定して、列國の承認を得た。その後、皇帝が歿し(一七四〇)、皇女マリヤ=テレサ(Maria Theresa (1740—80))は家憲に基いて、墺地利を相續した。然るにバヴァリヤ(Bavaria)公チャールス(Charles)は佛蘭西の後援を得、先約に背いて繼承權を主張し、西班牙・サクソニヤ(Saxony)等も之に與して墺地利に侵入したので茲に墺地利繼承戰役(War of Austrian Succession (1740—48))が起つた(一七四〇)。この間戰に先

陣中のフレデリック大王

マリヤ=テレサの雄圖

きんじて、フレデリック大王は、無情にも突然墺領シレシヤ(Silesia)を侵略した。時にバヴァリヤ及び其の同盟軍は墺軍を破り、チャールスは獨逸皇帝(チャールス七世)となつた。マリヤ=テレサは、已むを得ずシレシヤを大王に與へて和し、洪牙利義勇軍の助をかり、遂に聯合軍を破つた(第一シレシヤ役)

マリヤ=テレサの雄圖　開戰の時マリヤ=テレサは年廿四、內父を失ひ、外大敵に襲はれ其身は一子を擧げて尙産褥にあつたが、國家危急の際なれば、勇を鼓して洪牙利に赴き、身に喪服を纒ひ、當才の皇子を抱いて、プレスブルグ(Pressburg)の議會に親臨し、朕の困難なる位置は朕の匿す能はざる所我王國、我王位の存亡の秋である。朕は他列國に見捨てられ唯我が洪牙利人固有の忠誠に信頼して、この國難に處せんのみ」と一語一涙勅語



洪牙利の國會臨場のマリヤ=テレサ

第二シレシヤ役（一七四四―五）
アーヘン和約
七年戰役（一七五六―六三）

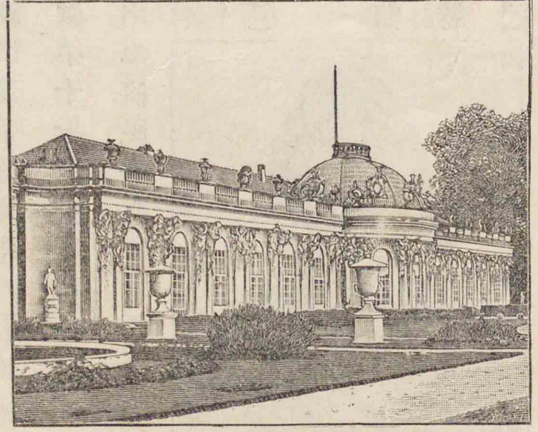
を賜ひ、擧國の應援を求めた所、滿場の議員悉く感激し「吾人は吾人の王マリヤ=テレサの爲に身命を致さん」と絕叫して義勇軍を起した。

墺地利が勝つたので、フレデリック大王はシレシヤの領有に不安を感じ、再び出兵して墺軍を破り、シレシヤの占領を確認させた（第二シレシヤ役）。尙ほ全局の戰爭は止まなかつたが、列國も戰に疲れて、遂にアーヘン（Aachen）の和約が成り（一七四八）、列國は墺地利の家憲を認めた。

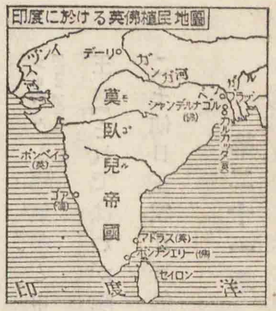
㊂七年戰役　マリヤ=テレサは、深く大王の無法を怨んで之に報復せんとし、露・佛・瑞典等の諸國と對普魯西同盟を結んで、之を分割せんと企てた。大王は之を悟り、機先を制して自ら進んで戰を開き（一七五六）、前後七年間歐洲の大半を敵として苦戰したが、遂に墺地利をしてシレシヤの領有を確認せしめて局を結んだ（一七六三）。かくて大王の威名は頓に高く、普魯西は歐羅巴の强國の列に入るに至つた。

大王とサン=スウシ宮殿

大王とサン=スウシ宮殿（Sans Souci）　大王はポツダム（Potsdam）の地に離宮を營んだが、附近に風車臺があつて、如何にも目ざはりであつたから、大王はその主なる老農夫に取拂を命じた。然るに翁は「この風車が私の爲に唯一の財產なること、恰も陛下の爲に普魯西があるやうなものだ」と憚る色もなく申し出た。大王は言下に悟つて「よくもいつたものかな、農夫の名は何といふ？」と。「獨身の氣樂な性分を里人が綽名してサン=スウシ（Sans Souci）（暢氣翁）と申す」と臣下が答へた。大王は「それではわが離宮を今より翁の名にちなみサン=スウシ宮と呼ばん」とこの寬容こそ他日王家が普魯西に民望を博する基であつた。

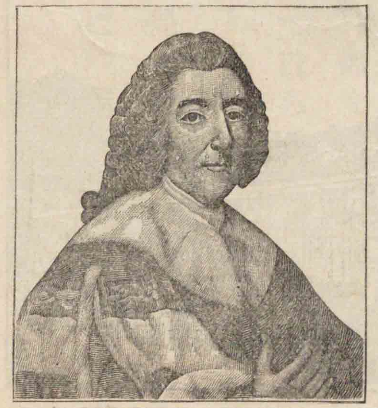

サン=スウシ宮殿

第二十一章　英・佛兩國植民地の衝突　北米合衆國の獨立



㊀英・佛兩國の世界政策　英・佛兩國人は夙に世界政策に志してゐたが、第十八世紀には和蘭人に代つて優勢となり、遂に兩國の競爭時代を現出するに至つた。東洋方面では特に印度に力を用ひ莫臥兒(モゴル)(Mogul)帝國の衰運に乘じ各、經略に着手し、又北亞米利加方面にも著目し、英蘭は第十七世紀の初(エリザベス女王時代)に東海岸に植民地を開き、その後十三州の植民地を作つた。佛蘭西人も同じ頃から植民を始め、今の加奈陀(カナダ)(Canada)の東部及びミシシッピ(Mississippi)河の流域(ルイ十四世の時代)を占領した。

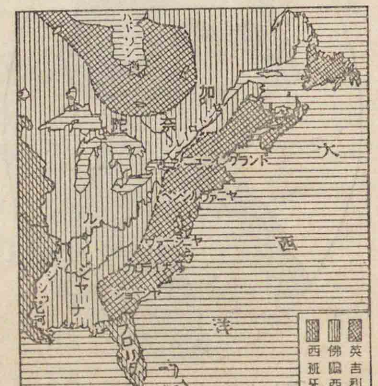
㊁英・佛植民地の衝突　かくて兩國の植民地は東西に於て漸次接近し、互に對峙(タイジ)して勢力の擴張を競ふに至つた頃、英國


老ピット(1708—1778)

北米合衆國獨立
遠因
近因

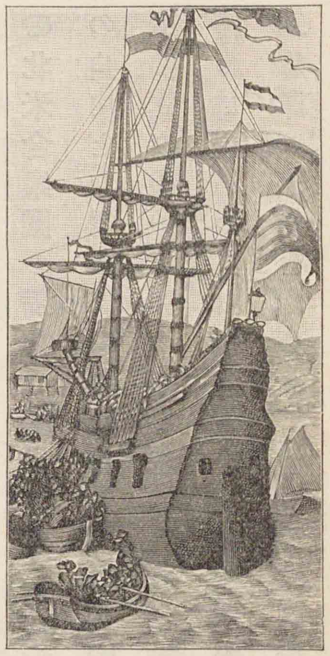
クライヴ(1725—74)

の宰相ウィリヤム・ピット(老ピット)(William Pitt)は全力を世界政策に用ゐた。彼の七年戰役の時は軍資を普魯西に給して佛國を歐洲方面に牽(ケン)制し、以て北米の加奈陀を奪ひ、印度に於ても英人クライヴ(Clive)(元東印度會社書記)は大いに佛軍(印度土侯との聯合軍)を破つて(一七五七)、英吉利の勢力を確立した。



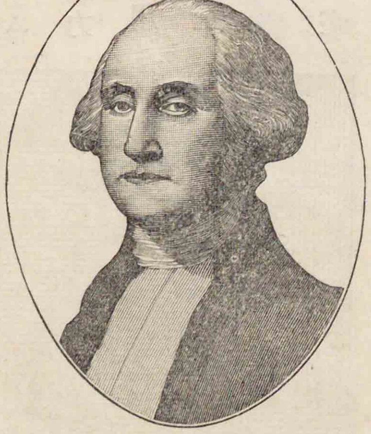
㊂北米合衆國の獨立　北米の英吉利植民地は、多くは信仰と政治の自由とを得る爲に、移住したものが開いたのであるから、頗る自由・獨立の精神が漲つてゐた。然るに英國政府は本國の商工業保護の爲、貿易の自由を束縛(ソクバク)し、尚ほ七年戰役後には、財政の困難を救ふ爲印紙條例(Stamp Act)を發布して、植民地に課税した(一七六五)。植民は之を

獨立宣言（一七七六）



アメリカ大陸への移民を送るメイフラワー號

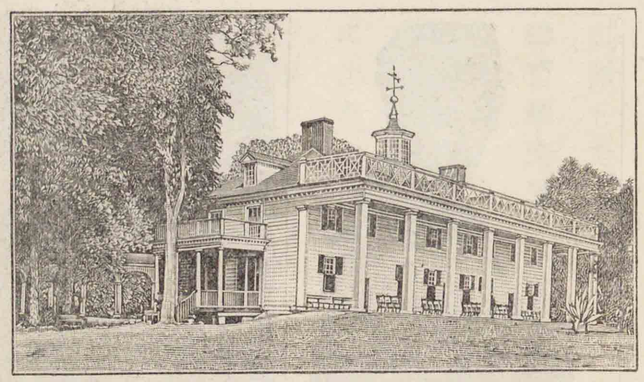
不當として服せず、植民地十三州は同盟して兵を擧げ、ワシントン（Washington (1732—99)）を總督に推し、翌年獨立宣言書（Declaration of Independence）を公にし（一七七六）、次いで十三州を以て聯邦を組織し亞米利加合衆國（United States of America）を建てた。獨立軍は初め兵器・糧食乏しく屢々敗戰したが、自由・平等論に熱した歐洲諸國人は、獨立軍に同情し、佛・西兩國も之を援けたから、獨立軍の勢漸く振ひ、遂に英軍の根據地ヨークタウン（Yorktown）を陥れて其大軍を降した（一七八一）。程なく和議が成立して亞米利加合衆國は全く獨立した



ワシントン (1732—99)

憲法制定

（一七八三）。その後合衆國は、共和政體の憲法を制定しワシントンを第一回の大統領に選び都をワシントンに奠（サダ）めた。



ヴァーノンの舊邸

第二十二章 第十八世紀歐洲諸國の情勢及び風潮 近古の文明

㊀**諸國の情勢及び風潮** 歐羅巴では近古に入りても、尚ほ中古の封建制度遺風が存してゐたが、英・佛・普・墺・露等の諸國が興るに及び、その內政を整へ、軍備を張り、產業を奬め、舊弊を破つて中央集權の實を擧げた。 然し第十八世紀の社會には、聖職者・貴族・平民の三階級があつて、前二者は種々の特權を有して後者を壓し

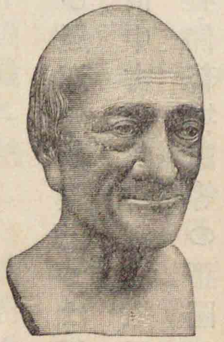
啓蒙運動　主として科學的見地により、舊來の陋習迷信を破り、新知識の普及を圖ること。

革新文學

てゐた。その反動として歷史(貴族の特權の由來を說明する)・宗教(王侯の特權を認める)を輕んじ、自由平等を尊び、理學(世界的・平等的)を重ずるの思想が盛になつた。

モンテスキュー (1689—1755)

ルソー (1712—78)



ヴォルテール (1694—1778)

㈡革新文學　この所謂啓蒙(ケイモウ)(Illuminism)的風潮に促(ウナガ)されて、佛蘭西に於て發達した革新文學(明快な文章で社會の改革を唱へるもの)は、次第に歐洲諸國に傳播(デンパ)した。初、佛人ヴォルテール(Voltaire 1694—1778)等が君主の權力に依て、貴族などの特權社會を打破することを主張したが、後、モンテスキュー(Montesquieu 1689—1755)が出て憲法政治を唱へ、ルソー(Rousseau 1711—78)は更に極端な自由平等論を鼓吹して、大いに人心を

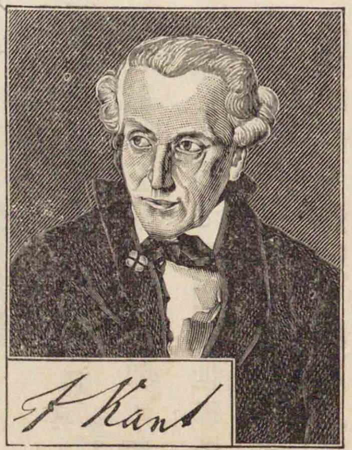
哲學・文學

美術

刺激した。

㈢哲學・文學　哲學では、近古に入つてベーコン(Bacon 1561—1626)(英人 經驗論)・デカルト(Descartes 1596—1650)(佛人 推理論)等の大家が現はれたが、第十八世紀に出たカント(Kant 1724—1804)(獨人)は最も傑出し、近世哲學の基を定めた。經濟學ではアダム=スミス(Adam Smith 1723—90)(英人「富國論」を著す Wealth of Nations)名高く、文學ではシェクスピヤ(英人)・コルネイユ・ラシーヌ・モリエール(共に佛人)・ゲーテ(Goethe 1749—1832)・シルレル(Schiller 1759—1805)(共に獨人)等の世界的文豪が出て、不朽の大作を殘した。

ベートーヴェン (1770—1827)



カント (1724—1804)

㈣美術　繪畫にはヴェラスケス(Velasques 1599—1660)・ムリリョ(Murillo 1617—82)(共に西人)・リューベンス(Rubens 1577—1640)・レンブラント(Rembrandt 1607—69)(共に蘭人)等の大家が出で、音樂にはモザルト(Mozart 1756—90)・

ベートーヴェン（共に獨人）（Beethoven 1770—1827）等の名手が出て多くの名曲を殘した。

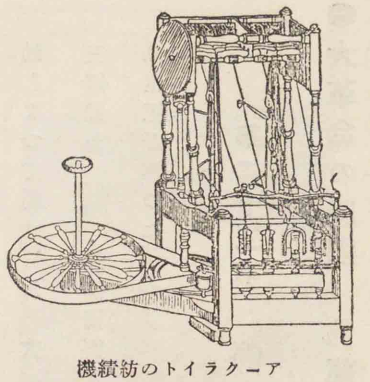
科學

五 科學　コペルニクス（波蘭人）（Copernicus 1473—1543）は地動説を唱へ、ニュートン（英人）（Newton 1642—1727）は引力の大法則を發見したが、第十八世紀に入つて佛蘭西に大家が輩出し、各種の科學は長足の進歩をなした。

諸發明と産業革命

六 諸發明と産業革命　科學の進歩は諸種の發明を促し、避雷針（米人フランクリン Franklin）・種痘（シュトウ）法（英人ジェンナー Jenner）の發明は、人類に恩惠（オンケイ）を與へたが、蒸汽機關（英人ワット Watt）・紡績機械（英人アークライト Arkright）の發明は、生産界に大なる影響を及ぼした。卽ち近古期に入り植民地が發達し、通商貿易が盛となつて、各國が世界政策を競ふ時代となつては、小規模の家内工業（手工）では、需要を充すことが不可能となつた。たまたま、第十八世紀後半以後、工場手工業（Manufacturer）

ニュートン（1642—727



アークライトの紡績機

が發達し、次で諸發明があつて、蒸氣を動力に應用する大規模の機械工業が發達し（主として英國に於て）、近世的工場制工業が生れて、從來の手工業を壓倒し、産業組織に急激なる一大變化を見るに至つた。之を産業革命（Industrial Revolution）といふ。

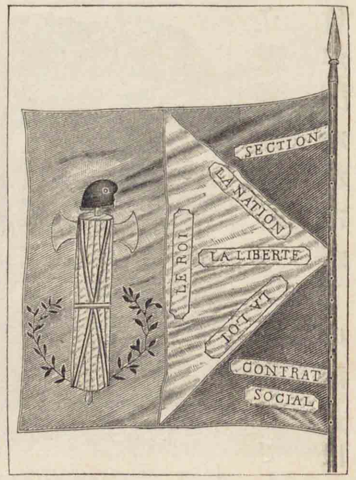
第四編 近世史

(佛蘭西大革命の頃(一七八九)より第十九世紀末頃(一九〇〇)に至る)

近世史—自由平等思想の勝を制した佛蘭西大革命は間もなく鎭定し、ナポレオンの出現により佛國は全歐洲を壓した。この間全歐の各階級は冷酷な運命に弄(モテアソ)され、人心に宗教的感情が起り爲にウィーン會議後神聖同盟が組織されたが、それが自由主義撲滅を目的とする保守專制の政策となるに及び、自由・統一の運動が盛になつた。即ち希臘・南米諸國の獨立、佛國の二度の革命(七月革命・二月革命)白耳義の獨立、伊・獨兩國の統一運動となつて現はれた。次で露國の南下政策は、クリミヤ・露土の二役を起した。其後三國同盟(獨・墺・伊)・露佛同盟及び英國の三大勢力によつて歐洲の均勢が保たれて第十九世紀が終つた。

第二十三章 佛蘭西大革命

㈠大革命の原因 佛蘭西では、ルイ十四世以來の宮廷の奢侈と、連年の外征との爲に、國庫が窮乏(キュウボウ)し、國力が疲弊した。然るに、ルイ十六世は財政行政の整理を志したが優柔不斷(イウジウフダン)(ぐづぐづしておもひきりのつかぬ)で之を果さず、又聖職者・貴族階級の不當なる特權を奪つて、平民(第三階級)(Tiers état)の負擔を輕減することも出來なかつた。そこへ、ルソー等が、過激な自由平等論を唱へたので、平民は歡んでその說を迎へ、一方北米合衆國の獨立を見て、彼等の理想が實現されたものと考へ、遂に大革命を起すに至つた。



佛蘭西の三色旗 (1789)

佛蘭西の三色旗 革命當時のもの、王家の色白を巴里の色赤・青の間に置き、左方に秘密結社のしるし羅馬の警吏の鉞(ヲノ)が描いてある。

社會の不平等を表はす諷刺畫

社會の不平等を表はす諷刺畫 平民は獨で王國を支へ、貴族は倘ほもそれを押しつけ、聖職者は纔かに指先で助けてゐる。

㈡革命の破裂 聖職者・貴族等に妨げられて、財政整理に困じ果て

立憲議會(國民議會)の組織

バスチーユ牢獄破壊の日(七月十四日)を革命記念日とし今尚國祭日である

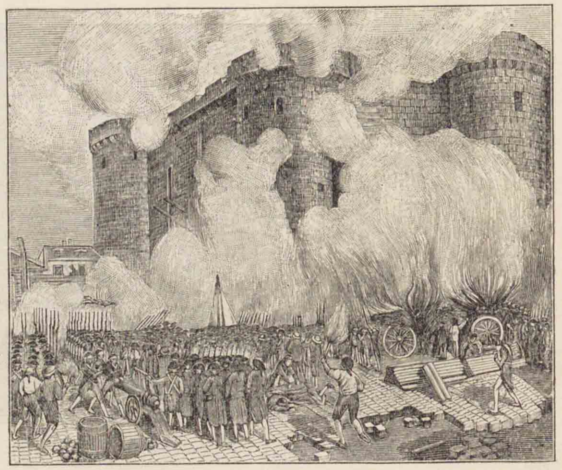
立法議會の組織

ルイ十六世

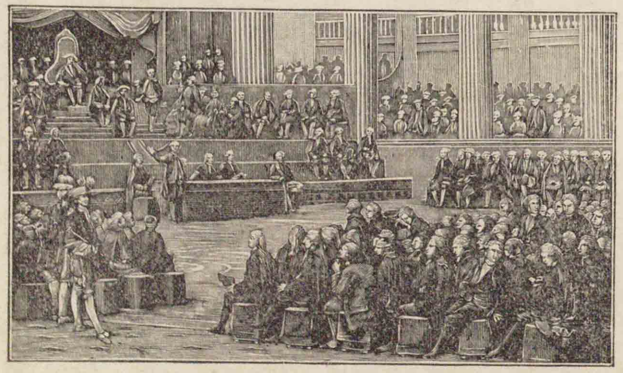
マリー=アントアネット

たルイ十六世は、國民の輿論に訴へて之を解決せんとし、久しく開かなかつた(一六一四年以來)三部會(States General (États Généraux))を召集したが(一七八九)、忽ち紛擾が起つた。平民は聖職者・貴族と離れて、自ら立憲議會(又は國民議會)(National Assembly (Assemblée Nationale Constituante) (1789—91))を組織して、憲法を制定するまでは、解散せざることを誓つた。其時暴民が起つてバスチーユの牢獄を破壊した(一七八九)。

㊂**王政の顛覆** 王は形勢の益〻不穩なるを察し、墺國(王后の里方)に逃れんとしたが、途中で捕へられた(一七九一)。この年立憲議會は新憲法を定めて自ら解散し、その憲法によつて、立法議會(Legislative Assembly (1791—2))が開かれたが、その議員は次第に共和主義に傾いた。墺國は革命の波及を恐れて、普國と同盟して佛國に侵入し佛人を威嚇したので、佛人は益〻激昂し、王は墺・普兩國と通じ國民を抑壓するものと疑ひ、暴民は大擧して王宮を襲つた。王は驚き難を議會に避けたが、議會は王を捕へて、獄に投じ、新に共和黨の議員のみで國民協會(National Convention (1792—5))を組織して、王政を廢して共和政を布き(一七九二)、王を叛逆罪



バスチーユ牢獄の破壊



三部會の光景

佛國々歌マルセィエイズ

に問ひ、翌年之を死刑に處した。又國民軍を募つて外國軍を撃退し、進んで獨逸に攻め入つた。

マルセィエイズの歌を謡ふ作者ルウジェ＝ド＝リール

佛國々歌マルセィエイズ（Marseillaise）　外國軍が北佛地方に侵入した頃、立法議會は軍兵を諸方に募つた。たまたま南方マルセィユ地方から來た數千の壯漢が、勇ましい歌を唱へつゝ巴里に入つた。この歌が佛國々歌となつた。

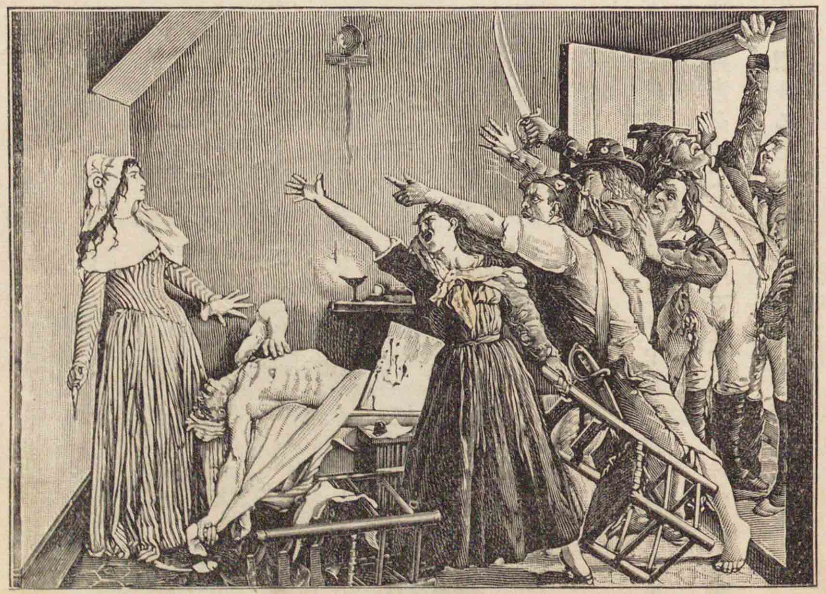
いざや起て國民よ、光榮（ヘエ）ある秋（トキ）は來ぬ！　我等に對し殘虐の血染の旗を彼は擧ぐ、聞かずや汝が野邊、無道の兵の叫び聲、腕に抱ける子供等や妻さへ來り居らんと。

隊伍作りて執れ劒、進め！　進め！　我が野邊に、そゝげ、けがれし敵の血を。

第一回歐洲大同盟

この一節を見ても如何に專制政治をのろひ、自由を叫んでゐたかがわかる（青年士官ルウジェ＝ド＝リール Rouget de l'Isle の作といふ。）

㈣恐嚇政治　國王處刑の報が傳はると、內外人は其の暴虐を憤り、勤王黨は地方に叛旗を擧げ、歐洲諸國（英・墺・普・蘭・西・伊等）は第一回大同盟 First Coalition (1793—?) を組織して、四面より佛國の境上を壓し、以て革命の氣勢を挫かんとした。　此時、過激共和黨は民心を統一して、外敵に當らんと



コルデーのマラー暗殺

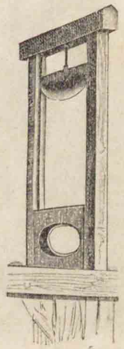
恐嚇政治（一七九三—四）

メートル法度量衡制度の採用

し、國民協會を暴壓して全權を握り、その首領マラー・ダントン・ロベスピエール（Marat Danton Robespierre）等は、公安委員會（Comittee of Public Safety）を設けて、暴力政治を行ひ、外は同盟軍を退け、内は反對黨を殘殺し、舊來の風俗・制度を打破して、理想の新社會を建設せんとした。これを恐嚇政治（Reign of Terror (1793-4)）といふ。然るにマラーが一少女（シャーロット＝コルデー）（Charlotte Corday）に刺殺され、次でダントン・ロベスピエールの死刑に處せらるゝに及び、革命の勢衰へ、恐嚇政治は終を告げた（一七九四）。

ロベスピエール

メートル法度量衡制度の採用　公安委員は舊物の打破に熱中し、共和暦（Republic Calendar）を定め、基督敎を廢して道理崇拜敎を創むる等の輕率を敢てしたが、一方今尚廣く行はれる簡單な十進法メートル法度量衡制度を採用する等有益なこともした。



ギヨチン

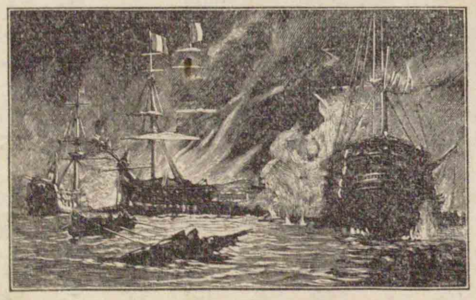
執政官政府（一七九五—九）

ナポレオンの出現

ナポレオンの埃及遠征

五　執政官政府　その後、國民協會は新憲法を定めて自ら解散し、新憲法により五名の執政官（Director）に行政を委ね、上・下兩院の立法府が設けられて、執政官政府（Directory Government 1795-9）が成立した（一七九五）。この時、王黨は新政府に反對して巴里に亂を起したが、青年士官ナポレオン＝ボナパルト（Napoleon Bonaparte）が之を鎭定した。かくて新政府は、三軍を以て墺國を攻めた。獨逸方面に向つた二軍は敗れたが、ナポレオンが率ゐて伊太利より進んだ第三軍は、連りに墺軍を破り、遂に地を割かせて和を結んだ（一七九七）。次で執政官政府はナポレオンの獻策に從ひ、英國の植民地を脅す爲、ナポレオンを將とし

大革命頃の佛國步兵



アブーキール灣の海戰

統領政府（一七九九—一八〇四）
第二回歐洲大同盟（一七九九—一八〇二）
ナポレオンのクーデター（武斷政略）

て埃及を遠征させた（一七九八）。その陸軍はピラミッド（Pyramid）塔下の戰で勝つたが、海軍はアブキール（Aboukir）灣内で英國艦隊に全滅された（一七九八）。

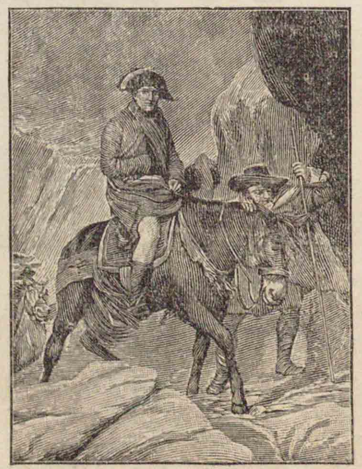
ナポレオンのクーデター

㊅**統領政府**　ナポレオンの埃及遠征中、英國の首相ピット（William Pitt）（少ピット）の下に、第二回大同盟（英・墺・露・葡・土）成り、大擧佛國を侵したので、（一七九九）佛國民は競々として、良將を待望してゐた。窃に歸國したナポレオンは、此の機に乘じ、兵力を以て政府を仆し（所謂クーデター）（Coup d'Etat）新憲法を制定し、統領政府（Consular Government）を立て、自ら第一統領（First Consul）となつて實權を握つたので、共和政は形骸のみを止めた武斷政治となつた。

第二十四章　ナポレオン一世の偉業

墺地利再征
佛蘭西の第一帝政
第三回歐洲大同盟（一八〇五）

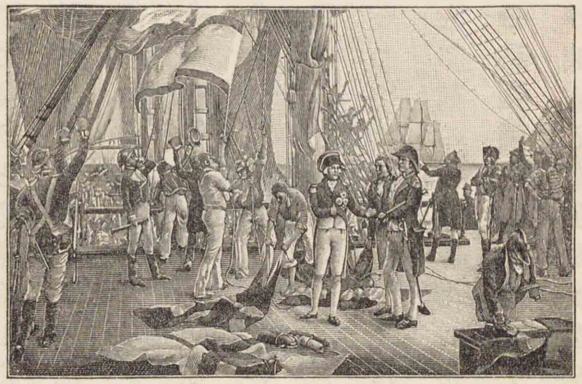
㊀**ナポレオン一世**　ナポレオンは、英・墺兩國が佛國の新憲法を認めないのを怒り、アルプスの嶮を越えて北伊に攻入つて、墺軍を破つたので、墺國は再び屈し、ライン左岸の地を割いて和した（一八〇一）。次で英國とも講和したから（一八〇二）歐洲の戰雲は一時收まつた。依てナポレオンは内治の刷新を圖り教育を奬め、舊教を再興し、財政を整へ、又有名なナポレオン法典を編纂するなど、大いに治績を擧げた。　かくて民望を一身に集めて終身統領に選ばれ、次で國民大多數の投票を得て帝位に登り、ナポレオン一世と稱した（一八〇四）。


サン＝ベルナルド越のナポレオン

㊁**英國侵入の失敗**　英國首相ピットの首唱で、第三回大同盟（Third Coalition (1805)）（英・墺・露・瑞典等）が成立して英國は益々反抗したので、ナポレオンは大いに怒り、直に

トラファルガルの海戰

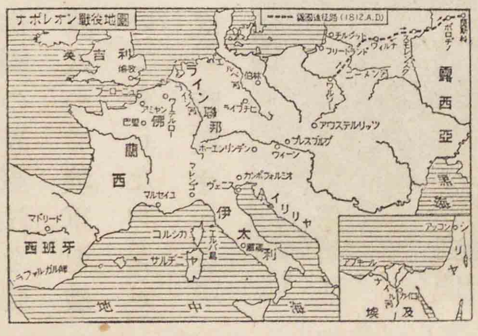
英國に侵入して、一擧にこれを征服せんと、佛西聯合艦隊を以て、英國艦隊を亞米利加方面に誘ひ、その虚に乘ぜんと企てたが、聯合艦隊はトラファルガル(Trafalgar)沖でネルソンの率ゐる英國艦隊に破られ、制海權は全く英國に歸したのでナポレオンの雄圖は水泡に終つた(一八〇五)。



ネルソンとその信號

㊂神聖羅馬帝國の解散

この頃、墺・露聯合軍が佛國に迫つたので、ナポレオンは鋒を轉じて獨逸に向ひ、之をアウステルリッツ(Austerlitz)に粉碎して(一八〇五、所謂三帝の戰)墺國をして和を

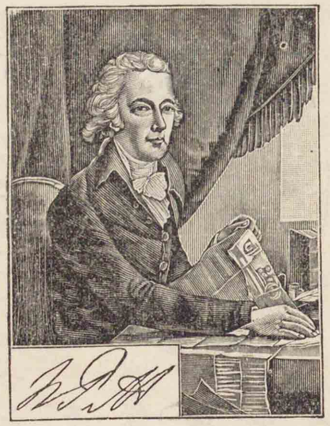


ライン同盟の成立

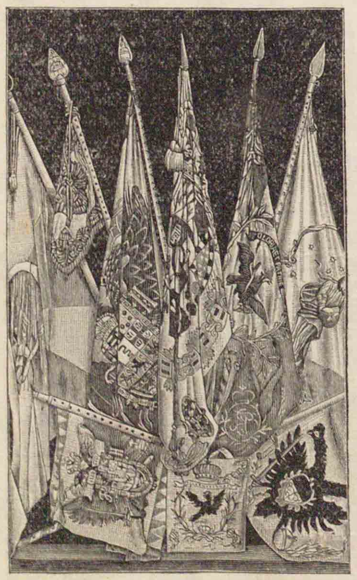
神聖羅馬帝國の滅亡

普魯西の屈辱

結ばせ、西南獨逸十六州を以て、ライン同盟(Confederation of the Rhine)を作らせ(一八〇六)自ら保護者となつた。そこで、虚名を擁してゐた神聖羅馬皇帝フランシス(Francis)二世は、帝國の解散を宣し、單に墺地利皇帝フランシス一世と稱したので、オットー大帝以來の神聖羅馬帝國(962—1806)は八百四十四年で名實共に亡びた(一八〇六)。普魯西は久しく中立を守つてゐたが、ナポレオンに侮辱されたので、遂に露國と結んで宣戰した(一八〇六)。ナポレオンは長驅して、普軍をイエナ(Jena)に破つて伯林を占領し、更に東普魯西



少ピット



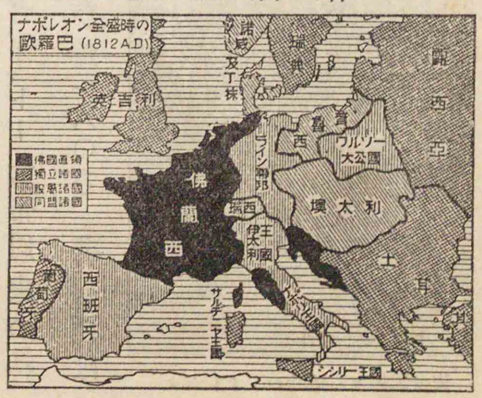
ナポレオンの分捕した列國々旗

大陸封鎖令

葡萄牙占領

に進み、普露聯合軍を粉碎して和を講じた(一八〇七)。

㊃大陸封鎖令 これより先、歐洲諸國は殆どナポレオンに服したが、英國のみ尚ほ屈しなかつたので、經濟上之を苦めんとし、伯林滯在中(普魯西征伐の時)大陸封鎖令(Continental System)を發して、大陸諸國の英國との通商を禁じた。然るに葡萄牙が之を奉じなかつたので、之を責めてその國土を占領し(一八〇七)、西班牙の王位を奪つて兄ジョセフ(Joseph)に與へた(一八〇八)。



㊄ナポレオンの極盛 墺國は、ナポレオンの西班牙征伐の不在を好機として、三度起つて開戰したが、ナポレオンは疾風迅雷、長

ナポレオン全盛

驅して墺軍をワグラム(Wagram)(ウィーンの北方)に破つて、和を結ばしめた(一八〇九)。翌年ナポレオンは、皇后ジョセフィン(Josephine)を廢して、歐洲第一の名門なる墺地利の皇女マリヤ＝ルイザ(Maria Louisa)を迎へて皇后とし(一八一〇)、その勢力は絶頂に達し、歐洲列強中その命を奉じないものは、唯英土兩國のみであつた。

第二十五章 ナポレオン一世の沒落 ウィーン會議

㊀ナポレオンの沒落 大陸封鎖に苦むものは、英國のみではなかつた。列國は商業が衰へ、物價が騰貴したので、その不平は鬱積し、密かに反抗の機會を狙つてゐた。先づ露國が禁を破つて、英國と通商したので、ナポレオン

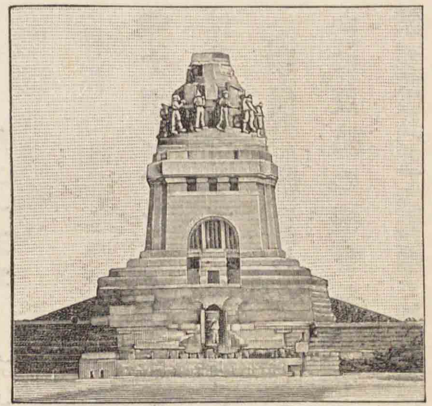
ロシヤ退却(ネー將軍の殿軍)

露國遠征の失敗

第四回歐洲大同盟（一八一三―四）

は大いに憤り、五十萬の大軍を以て露國に侵入し、遂にモスコー(Moscow)に入つたが、火災と飢寒とに苦められて退却し、途中露軍の追撃をうけ殆ど潰滅(クワイメツ)(くづれほろぶ)した（一八一二）。

㊁**歐洲獨立戰役**　諸國は此の機に乘じ、第四回大同盟(Fourth Coalition (1813―4))を組織し（一八一三）佛軍をライプチヒ(Leipzig)に撃破し所謂諸國民獨立戰役(War of Liberation)、なほ



ライプチヒの戰勝紀念碑

翌年同盟軍は巴里を陷れたので、ナポレオンは遂に屈し帝位を辭し、エルバ島に流された（一八一四）。列國は、ルイ十八世(Louis (18.3―24))（前王ルイ十六世の弟）の佛王即位を認め、王と巴里條約を結び、次でウィーンに會合して善後策を講じた（一八一四）。

㊂**ナポレオンの再擧**　翌年ナポレオンは突然エルバ島を脫して巴里に歸り、帝位を復したので、列國は色を失ひ、同盟軍を起して之

ワーテルローの戰

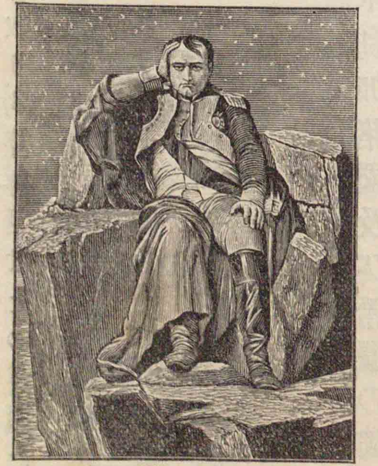
ウィーン會議

ワーテルローの戰

を攻めた。ナポレオンは機先を制して白耳義に入り、一度普魯西軍（ブリュッヘルの率ゐる）を破つたが、英將ウェリントン(Wellington (1769―1852))とワーテルロー(Waterlco)（白耳義ブリュッセルの南方）に戰つて大敗した（一八一五）。同盟軍は進撃して巴里を陷れ、米國に亡命(バウメイ)(くにからにぐ)せんとするナポレオンを途中に捕へてセントヘレナ(St. Helena)（大西洋中の孤島）に流し、ルイ十八世を即位せしめた。ナポレオンの帝位にあつたこの間を百日天下(The Hundred Days (Les Cent Jours))といふ。

㊃**ウィーン會議**　曏(サキ)のウィーン會議(Congress of Vienna (1814―5))はナポレオンの再擧に鑑み互に讓歩し、遂に議事を終了した（一八一五）。

(1)



セントヘレナ巖頭失意のナポレオン

神聖同盟

佛國は侵地を還し、(2)墺國は北伊を取り、(3)普魯西はその舊領を復し、(4)獨逸內の三十九邦（普・墺を含む）は聯邦を組織し、(5)和蘭は墺領ネーデルランド（今の白耳義）を併せて、ネーデルランド王國を建て、(6)瑞典は丁抹（デンマルク）より諾威（ノルウェー）を得、(7)露國は波蘭の一部を得、(8)英國はマルタ島 Malta・ケープ植民地 Cape Colony・錫蘭（セイロン）Ceylon（戰爭中占領した地方）を得た。

第二十六章　神聖同盟　亞米利加諸國及び希臘の獨立

㊀神聖同盟　ウィーン會議後、露帝アレクサンドル一世 Alexander (1801—1825) は、墺・普兩國の君主を說いて神聖同盟 Holy Alliance を組織し、各國の君主は基督敎の主義の示す博愛・正義・平和の精神を以て、內治・外交互に相扶（タス）けんことを約したところ、歐洲列國の君主

アレクサンドル一世

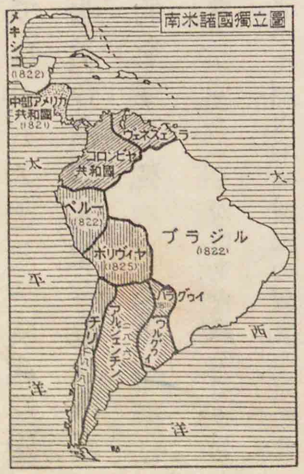
メッテルニヒの政策

（羅馬法皇・英王・土帝を除く）は概ね加盟した。

メッテルニヒ

然るに、墺國宰相メッテルニヒ Metternich (1772—1859) は、當時歐洲諸國が戰後の疲弊に苦み、革命の再發を恐るゝの情勢を察し、神聖同盟を利用して、諸國に起れる自由・民族主義の運動を抑へ、永く專制政治を維持し、之に依て墺國の威勢を張らんと企てた。

㊁亞米利加諸國の獨立　ナポレオンが西・葡兩國を滅した頃、亞米利加なる兩國の植民地は、獨立を計つたが、ウィーン會議後、本國の植民政策に不滿を抱き、ヴェネズエラ Venezuela・哥倫比亞（コロンビヤ）Colombia・ボリヴィヤ Bolivia・智利（チリ）Chili・秘露（ペルー）Peru・墨西哥（メキシコ）Mexico 等の諸國が相次いで獨立



南米諸國獨立圖

モンロー主義

し、伯剌西爾(ブラジル)(Brazil)(葡領)も亦獨立して帝國を建てた。メッテルニヒは、この獨立運動を鎭壓せんとしたが、英國及び北米合衆國は、却てその獨立を認め、これに聲援したので、皆その目的を達した。

モンロー

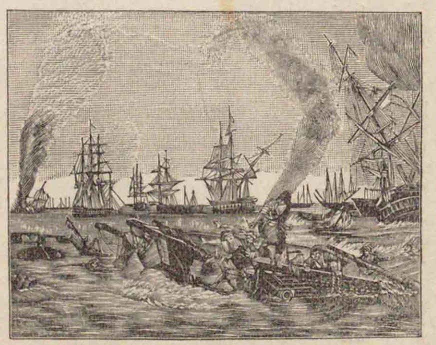
モンロー主義　メッテルニヒが巴里會議を開き列強の干渉によつて亞米利加諸國の獨立を鎭壓せんとした時に、米國大統領ジェームス＝モンロー(James Monroe)は敎書を發して(一八二三)、亞米利加諸國の獨立に干渉することを排斥した。これより米國は歐洲大陸の事に干渉せぬ代り、歐洲大陸諸國も亦兩米大陸の事に干渉することを許さぬ方針を歴代踏襲(タウシフ)し、遂に北米合衆國の國是(コクゼ)となつた。之をモンロー主義(Monroe Doctrine)といふ。

(三) 希臘の獨立　この頃、希臘人も土耳其の壓制を脱せんと獨立の旗を擧げたが(一八二一)、忽ち挫かれた。然るに露帝は自國の勢力を伸

張するため、メッテルニヒの抗議を斥(シリゾ)け、英・佛兩國と同盟して、土耳其と戰ひ、遂に之を屈せしめて和を講じ希臘の獨立を承認せしめた(一八二九)。かくて神聖同盟は崩潰した。

第二十七章　佛蘭西の政變　ナポレオン三世

チャールス十世

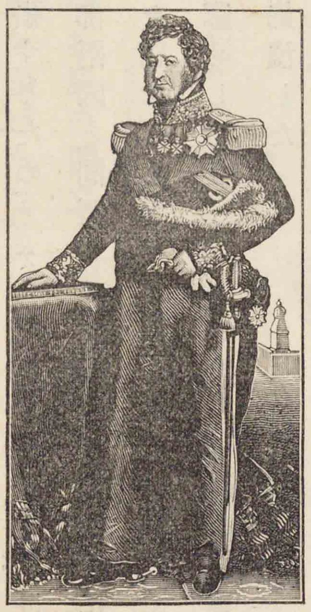


ナヴァリノの海戰

(一) 七月革命　佛王チャールス十世(Charles X)(ルイ十八世の弟)(1824—30)は、極端な保守主義を執り、恣(ホシイママ)に議會を解散し、言論・出版の自由を束縛したから、豫て自由民權思想の盛であつた佛蘭西人は、怒つて巴里に暴動を起

七月革命の影響
白耳義の獨立

し、(一八三〇、七月)王は逃亡し、ルイ=フィリップ Louis Philip (1830—48)(王族オルレヤン家)が迎へられて王位に卽いた。これを七月革命 July Revolution といふ。この革命は諸國に影響して、自由獨立の運動を起さしめた。白耳義(ウィーン會議後ネーデルランド王國の內)人が、和蘭人と爭つて獨立し立憲王國を建てた(一八三〇)のは、その主なるもので、その他波蘭(ポーランド)・獨逸・伊太利等にも、自由・統一の企があつたが、何れも失敗した。白耳義は、後倫敦(ロンドン)會議で列國に獨立を認められ、永世局外中立國たることを保證された(一八三九)。



ルイ=フィリップ

㊁二月革命　其後、佛王ルイ=フィリップは屢〻外交に失敗し、內治を誤つたので民望を失つた。たまたま選擧法改正の示威的宴會の禁止から、巴里に暴動起り(一八四八、二月)王は英國に逃れ、國民は假政府を組織し、王政を廢して共和政とした。

佛蘭西第二共和政
二月革命の影響

これを二月革命 February Revolution といふ。新憲法が制定されて、ルイ=ナポレオン Louis Napoleon (1808—73)(ナポレオン一世の甥)が選ばれて大統領となつた。この革命の影響も、忽ち諸國に傳はり、墺國にも暴動があつて、メッテルニヒは失脚して英國に逃れて、政權は改革派の手に移つた。洪牙利(ホンガリヤ) Hungary 人及び伊太利人も、墺國に抗して自由・統一の爲に戰つたが、何れも失敗した。普魯西にも暴動が起つたが、民意を容れた憲法が布かれて鎭定した。

二月革命巴里市街戰

ナポレオン三世

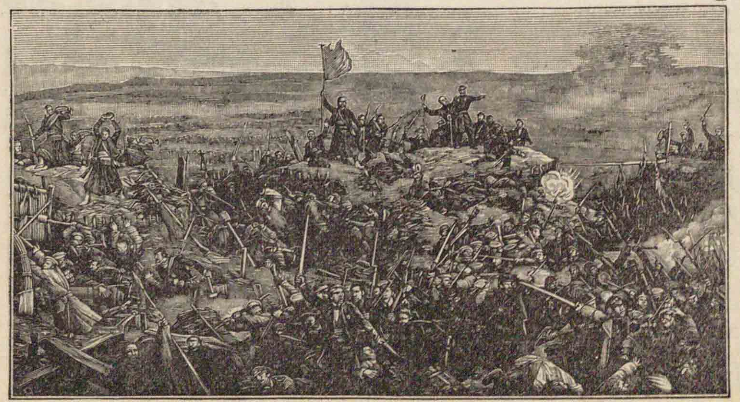
㊂ナポレオン三世　大統領ルイ=ナポレオンは當時國民が伯父の偉業を慕へる

佛蘭西第二帝政

に乘じ、頻に民望を收め、勢力を養ひ、遂にクーデター（武斷政略）Coup d'Etatを決行して、反對黨を抑へ國民の選擧によつて帝位に卽き、ナポレオン三世と稱した（一八五二）。

ナポレオン三世の皇后

（四）クリミヤ戰役　ナポレオン三世は、帝政の基礎を固め、更に威を全歐に振はんと機會を狙つてゐた。たまたま露國が土耳其の衰弱に乘じ、之を併せんとして開戰したので（一八五三）、ナポレオン三世は英國と結び土耳其を援け、聯合軍はセバス



セバストポールの戰

ナイチンゲール

トポールSebastopol（クリミヤ半島）の要塞を圍み、後サルヂニヤSardinia（伊國の前身）の援兵を得て、之を陷れたので、露國は屈して和を講じた（一八五六）。之をクリミヤCrimean War 1854—56戰役といふ。かくてナポレオン三世は露國南下の野心を挫き、その威名を全歐に轟かせた。

ナイチンゲール

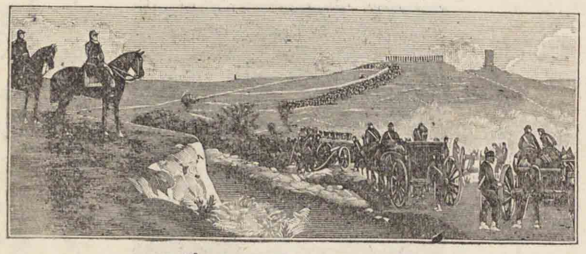
ナイチンゲール　英國の貴婦人フロレンス＝ナイチンゲールFlorence Nightingale (1820—1910)は、クリミヤ戰爭の慘狀を聞き、政府に請ふて同志と共に戰地に赴き、傷病兵の救護に盡力してクリミヤの天使と慕はれた。今の赤十字社事業は玆に源を發したのである。

（五）ナポレオン三世の內治外交　この名聲を利用して、殖產興業を圖り、交通を整備し以て富强を加へ、又東洋方面の經略に成功し、伊太利の獨立運動に關係し多少の利を得たが、墨西哥（メキシコ）の內亂に干涉

伊太利の國情

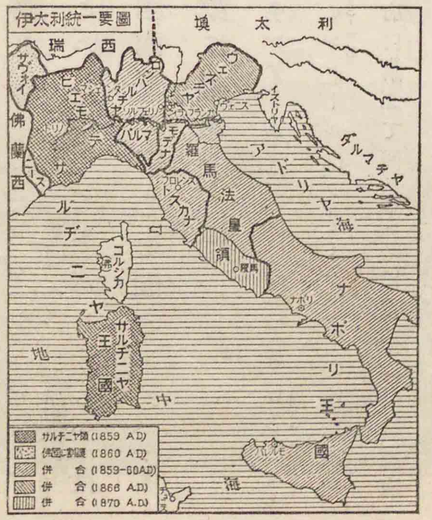
したのは、失敗の緒となつた。

第二十八章　伊太利の統一



ソルフェリノの戰

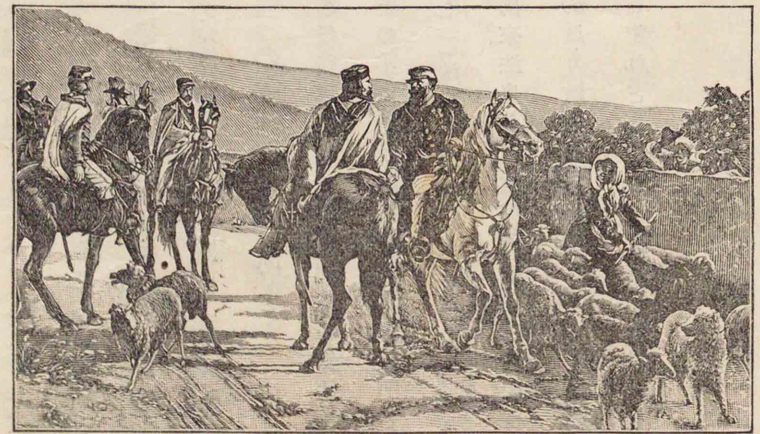
㈠伊太利の國情　伊太利は、中古以來多くの小邦に分裂してゐた。七月革命の頃から、伊太利人は自由・統一の思潮に動かされて、統一的國家の建設を企てたが、何時も墺國に妨害されて果さなかつた。然るにサルヂニヤ王ヴィクトル＝エマニュエル二世(Victor Emanuel (1849—78))は、賢相



カヴール伯(Count of Cavour (1801—61))を用ひ、憲政を布き、國力を養ひ、クリミヤ戰役には英・佛聯合軍を援けてその歡心(クワンシン)(きげんをとる)を買ひ、更にナポレオン三世と密約して戰備を整へ、統一の期を待つてゐた。

カヴール

㈡伊太利統一戰役　遂にナポレオン三世の應援を得て、墺國と開戰し、大いに墺軍を破つてロンバルヂヤ(Lombardy)を割かしめて講和した(一八五九)。また法皇領の一部・中部諸國及び俠雄(ケウユウ)ガリバルヂ(Garibaldi (1807—72))の征服し



ガリバルヂとヴィクトル＝エマニュエル二世の會見

伊太利王國の建設

た南部地方を併せて、殆ど伊太利全土（ヴェネチヤ・法皇領を除く）を統一して、伊太利王國の建設を宣言し（一八六一）、フロレンス(Florence)に都を奠めた（一八六五）。

「羅馬問題」の解決

㊂統一の完成　翌年普墺戰役（第三十章參照）に普國を援けて、ヴェネチヤ(Venezia)を得、又普佛戰役（第三十章參照）の時、佛國守備兵の徹退に乘じ、羅馬（法皇領）を占領して、此處に遷都し（一八七〇）、伊太利統一の大業を完成した。

「羅馬問題」の解決　法皇ピウス九世(Pius(1846—78))は、此の普佛戰役後に於ける伊太利王の條約を無視したる法皇領の侵略、並に併合を大いに憤り、その不正を抗議し關係者を破門した。伊太利政府は「法皇身分保證令(Law of Guarantees)」を發布したが（一八七一）、法皇は之を認めず、自らヴァチカン(Vatican)宮内の捕虜と稱して、足一歩もその外に出でず、爾來法皇と伊太利王室とは互に反目してゐたが、一九二九年二月十一日、ラテラン條約成り、政府は法皇のヴァチカン市國の創建と、その主權とを認め、法皇は國際的主權は有すれども、列强と世俗的競爭をなすの意思なきを聲明して、圓滿に解決した。

第二十九章　南北戰役　墨西哥の內亂

リンカーン(1809—65)

南北戰役（一八六一—六五）

㊀版圖の膨脹　米國は最初十三州であつたが、其後ルイジヤナ(Louisiana)（佛國）・フロリダ(Florida)（西班牙）を買收し、カリフォルニヤ(California)（墨西哥と戰ひ）等を併せ、第十九世紀の半、其の領土は太平洋岸に達した。

南北國情の相違

㊁南北戰役　然るにその南部は、民主黨(Democrats)が優勢で、住民は農業（奴隷使役）を營んで自由貿易を主張し、商工業の盛な北部は共和黨(Republicans)の根據で、奴隷廢止を力說し、保護貿易を唱へてゐた。かく政治・經濟上、事情を異にせる兩部の反目はリンカーン(Lincoln(1809—65))（奴隷廢止論者）の大統領當選によつて極に達し、南部は分離して亞米利加聯邦(Confederate States of America)を組織し、別に大統領を選み、北部と開戰した（一八六一）。かくて五年に亘る內亂は北軍の勝に歸し（一八六五）、奴隷は解放された。その後、漸

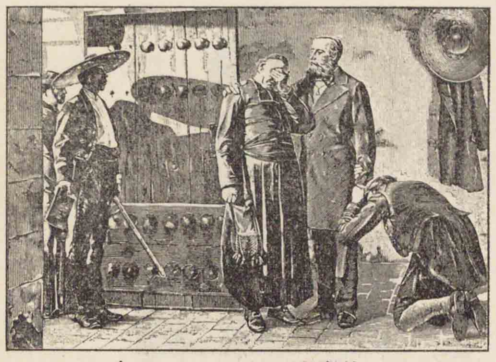
ストウ女史と奴隷解放

墨西哥の國情

ナポレオン三世の干涉

く南北は融和して、國勢は再び盛になつた。

ストウ女史と奴隷解放　この頃リンカーンと並んで奴隷解放運動に盡力したのはストウ(Stowe)女史(1811—96)であつた。その傑著「アンクル=トムス=ケビン」(Uncle Tom's Cabin)は巧に奴隷の慘狀を描寫して、人道に訴へ、該運動に非常な貢獻をなし、ひいては南北戰役の導火線となつた。



銃殺前のマクシミリヤン帝

ストウ女史

㊂墨西哥の內亂　墨西哥共和國は、獨立後、黨爭激しく、財政甚しく紊れ、遂に外債利子の支拂を停止したので(一八六一)、債權國たる英・佛・西三國との間に葛藤(かつとう)を生じた。その時、ナポレオン三世は南北戰役の紛亂に乘じ、墨西哥を保護國となさんと企て、兵力を以て干涉し、共和政を廢し、マクシミリヤン(墺帝の弟)を墺國より迎へて皇帝とした(一八六四)。然るに南北戰役が終ると米國はモンロー主義に基き、佛國に嚴重に抗議したので、佛軍も終に屈して撤兵した(一八六七)。かくてマクシミリヤン帝は殺されて共和政となり、ナポレオン三世の聲望は地に墜ちた。

獨逸人の統一希望

第三十章　獨逸の統一

ウィリヤム一世

㊀獨逸統一の氣運　獨逸は、墺・普兩國以下三十九邦が聯邦を組織し(ウィーン會議後)、墺國がその牛耳をとつてゐたが、その聯邦の結合は固くなかつた。然るに獨逸でも民族統一主義が盛になり、普魯西(プロシヤ)が國力を充實して威望を高め墺地利を凌ぐやうになつた。時に普王ウィリヤム一世(William)(1861—88)(一八六一即位)は聯邦內から墺國を驅逐して獨逸を統一せんと

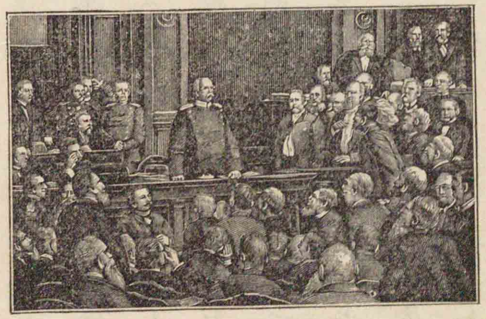
原因

欲し、宰相ビスマルク(Bismarck (1815—98))・參謀長モルトケ(Moltke (1800—91))を重く用ゐて、議會の反抗も顧みず軍備を擴張し、密に其の機會を狙つてゐた。

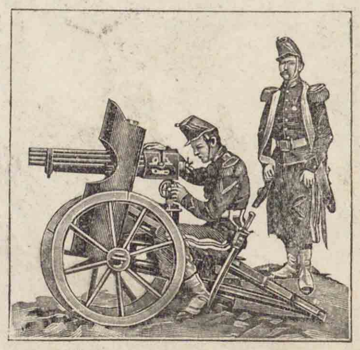
普墺戰役(一八六六)

モルトケ

(二)普墺戰役 然るに丁抹(デンマルク)戰役(一八六四)の結果、丁抹から得たシレスウィヒ(Schleswig)・ホルスタイン(Holstein)二州の處分に就て、普墺兩國間に爭が起つて、普魯西は先づ伊太利と同盟して、ホルスタインを占領し、墺國及び獨逸聯邦の大半を敵として開戰した(一八六六)。普魯西は連戰連勝忽ちウィーンに迫つたので、墺國は和を請ひ、二州に對する野心を抛棄し、ヴェネチヤを伊太利に割き、今後獨逸の事件に關與せ



議會に於けるビスマルク



普佛戰役當時に於けるフランスの機關銃

ざることを約した(一八六六)。かくて普魯西は北獨逸聯邦(North German Confederation)を組織してその盟主となり(一八六七)、更に南獨逸の四王國と同盟を結び、國勢は益〻隆盛に赴いた。

普佛戰役(一八七〇—一)

原因

(三)普佛戰役 佛國民は普國の隆盛を見て不安を感じ、ナポレオン三世は、ビスマルクに翻弄されて、外交上の失敗を重ねしを怨み、普國の勢を挫いて民望を回復せんと企てた。普國も亦佛國と一戰して獨逸の統一を完成せんとして

戰場に於けるウィリヤム一世

佛蘭西の第三共和政

講和

ゐたたまたま西班牙王位繼承問題から、兩國は開戰するに至つた（一八七〇）。普軍は急速に大軍を發して、敵の侵入軍を擊退して佛國に攻入り、ナポレオン三世をセダン（Sedan）に降し、進んで巴里を包圍した。

セダン開城後ナポレオン三世とビスマルクとの會見

佛國民は周章の餘り帝政を廢して共和政とし、専ら防戰に勉めたが、その効なく開戰後七月で、巴里も陥つたので、遂に屈し、地を割き（エルザス・ロートリンゲン Elsass Lothringen）償金（五十億フラン）を出して和を講じた（一八七一）。

㊃**獨逸統一の完成**　これより先獨逸統一の氣運は愈熟し、普王ウィリヤム一世は、かのルイ十四世の榮華を偲ぶヴェルサイユ（Versailles）宮殿（當時獨逸大本營）で獨逸

ウィリヤム一世獨逸皇帝となる

1獨逸皇帝ウィリヤム一世
2皇太子フレデリック＝ウィリヤム
3バーデン大公フレデリック
4大宰相ビスマルク
5參謀總長モルトケ

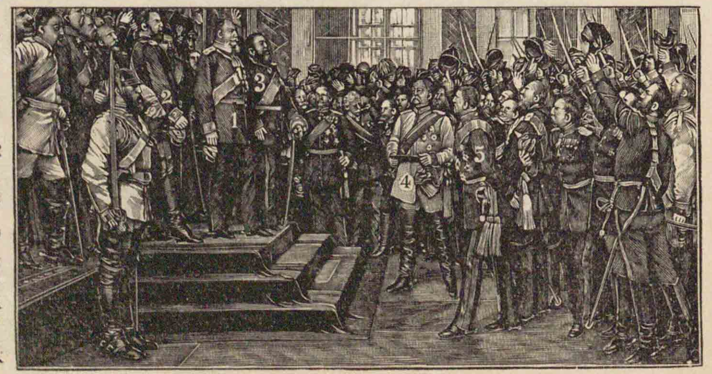
露土戰役（一八七七—八）

原因

皇帝の位に卽いた。次で伯林（ベルリン）に聯邦會議を開いて新憲法を制定し、普魯西王は獨逸皇帝の位を世襲し、帝國の全權を握ることとなり、多年獨逸人の希望してゐた統一の業は、遂に完成した。

第三十一章　露土戰役　伯林會議

㊀**露土戰役**　露國はクリミヤ戰役後も、南下政策を斷念せず、常に土耳其（トルコ）侵略の機を狙つてゐた。然るに、土耳其は行政・財政紊亂し、且基督教徒を迫害したので、バルカン（Balkan）半島の諸民族は相ついで叛いた。露國は之を好機とし、基督教徒を救ふを名とし

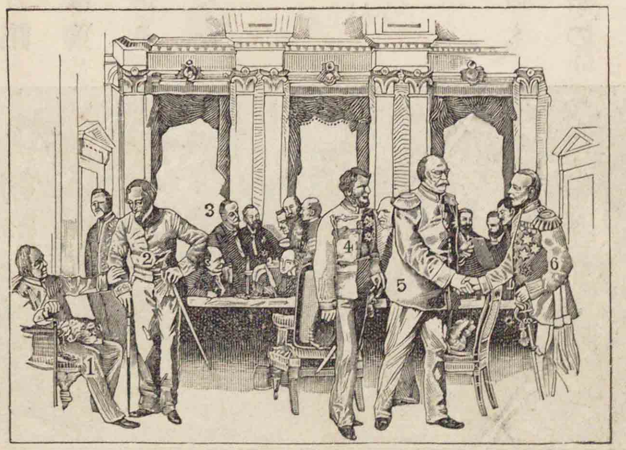

ヴェルサイユ宮殿に於ける卽位式

サン=ステファノ條約

伯林會議
1ゴルチャコフ（露）
2ヂスレーリ（英）
3ホーエンローエ（獨）
4アンドラッシー（墺）
5ビスマルク（獨）
6シュワロフ（露）

て、土耳其と戰を開いた（一八七七）。露軍はプレヴナ（Plevna）の要塞（勇將オスマン パシャ固守 Osman Pasha）を陷れ、進んでコンスタンチノープルに迫つたので、土耳其は屈して、急にサン=ステファノ（San Stefano）の條約を結んだ（一八七八）。

㊁**伯林會議**　然るに英・墺二國は此の條約を以て、露國の受益過大なりとして反對した。そこでビスマルクは自ら其の調停者となつて、伯林會議を開き（一八七八）、前條約を破棄し、(1)塞爾維（セルビヤ Servia）・黑山國（モンテネグロ Montenegro）・羅馬尼（ルーマニヤ Rumania）の獨立を認め、



ベルリン會議

三國同盟の成立

二國同盟の成立

(2)勃牙利（ブルガリヤ Bulgaria）に自治を許して、土耳其に朝貢（テウコウ）せしめ、(3)墺國にボスニヤ（Bosnia）・ヘルゼゴヴィナ（Herzegovina）の管理權を委ね、(4)英・露・希の諸國に多少の土地を割かしめた。かくて露國の南下策は挫かれ、土耳其は又疲弊した。

第三十二章　歐羅巴諸國の均勢

㊀**三國同盟及び露佛同盟**　獨逸は普佛戰役後、佛國の報復を恐れてゐたが、伯林會議後は、更に露國に怨まれるやうになつたので、墺・伊二國と攻守同盟を結んで之に備へた（一八八三）。　佛國はこの三國同盟（Triple Alliance）に不安を感じ、露國と二國同盟（Dual Alliance）を結んで、之と對抗することとなつた。

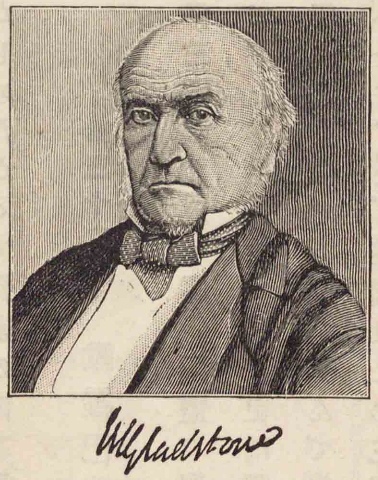
㊁**英國名譽の孤立**　ヴィクトリヤ女王（Victoria（1837–1901））は即位（一八三七）以來賢相ヂスレーリ（Disraeli）

ヴィクトリヤ女王

リ・グラッドストン(1809―98) Gladstone 等を重く用ひ、歐洲大陸の革命的擾亂を前に、よく穩健な手段によつて、選擧法改正・愛蘭問題・奴隷廢止等の大問題を解決し、海外發展に成功し、雄大な海軍を備へて、獨力で三國同盟・露佛同盟との對立を維持し、以て名譽の孤立 Glorious Isolation を誇つてゐた。

ボイコット(排貨或は不買同盟)の語の起原

ボイコット Boycott (不買同盟) 愛蘭問題は、英國二百年來の難問題であつた。卽ち愛蘭人はクロンウェルの時、土地を沒收され農民は殆ど小作人の地位に沈み、永年地主の抑壓に苦しめられてゐたが、第十九世紀後半第二次グラッドストン內閣の頃、愛蘭小作人は地主の立退命令に對抗する爲め、同盟して土地の借入を拒絕し、取引と交際とを禁じて地主を窮境に陷れた。この行動は、一八八〇年始めてボイコット Boycot といふ地主に對し行はれたから、其の名が取引拒絕の意味に用ひられ、やがて不買同盟排貨の意味に轉化したのである。



グラッドストン

第三十三章 阿弗利加及び太平洋方面に於ける列強の經營

世界政策の發展

㊀世界政策の發展 第十九世紀後半の、歐洲各國の人口增加と、產業革命による生產過剩とは、列國をして益〻海外發展の必要を感ぜしめ、盛に世界各地に植民し、通商上市場の擴張を計る、激烈な競爭を見るに至つた。

英國の印度帝國建設

㊁英國の亞細亞經營 英國は新嘉坡(シンガポール) Singapore を購ひ(一八二四)翌年マラッカ Malacca を取り、アデン Aden を占領し(一八三九)、清國より香港(ホンコン) Hongkong を割かしめ(鴉片戰役一八四二)更に北京條約にて九龍(キユウリユウ) Kaulung (香港對岸)を取り(英佛聯合軍の役一八六〇)以て東亞に於ける根據を確實にし、又ヴィクトリヤ女王の卽位(一八三七)前後には殆ど印度を領したが、遂に東印度會社は、その統治權を英國政府に移し(一八五八、

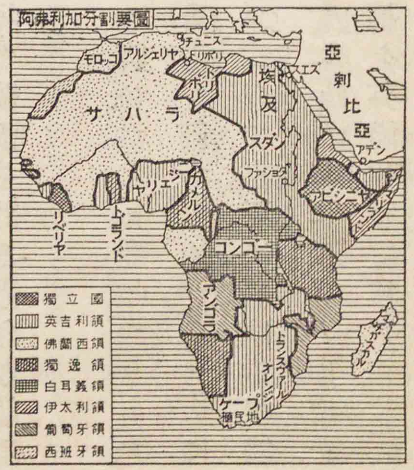
英國の阿弗利加經營

英國の南阿征服

次で印度帝國を建て、女王をその帝位に即けた（一八七七）。これより方面を轉じて、ベルチスタン（Baluchistan）を保護國とし（一八七六）、アフガニスタン（Afghanistan）を援けて露國に當り、ついで緬甸（Burma）を併合した（一八八六）。日清戰役後は威海衞（Weihaiwei）を租借して（一八九八）、露國との均勢を計つた。

セシル＝ローヅ

㊂**英國の阿弗利加經營**　第十九世紀の後半埃及（土耳其の屬邦）の財政が紊れたので、英國はそのスエズ（Suez）運河株券を買收し（一八七五）、遂にその實權を握り（一八八二）、又埃及領スダン（Sudan）をも英國の勢力範圍に入れた（一八九八）。南阿でも英國は和蘭のブール人（Boers）が建てた國（オレンジ自由國南阿共和國）と戰つて、遂に之を征服して（一八九九）、この地に南阿弗利加聯邦（Union of South Africa）を組織した（一九一〇）。奇傑セシル＝ローヅ（Cecil Rhodes（1853－1902））の南阿の開拓と相俟つて、遂に阿弗利加縱貫鐵道の工事に着手した。

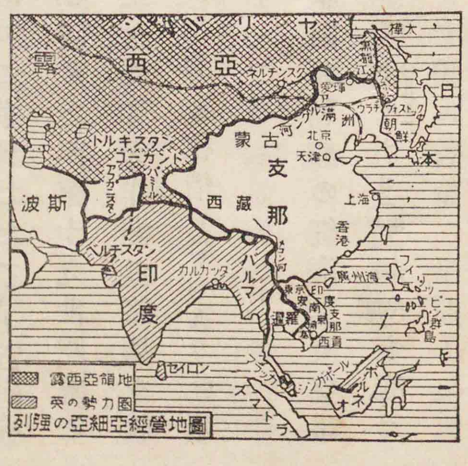


露國の亞細亞經營

佛國の亞細亞及び阿弗利加經營

㊃**露國の亞細亞經營**　露國は第十九世紀の初、西は波斯（Persia）からコーカサス（Caucasus）地方を取り、次第に中央亞細亞を侵略して、南はアフガニスタン（Afghanistan）を脅かして印度に迫り、支那の西境を壓した。東は西比利亞（Siberia）より南下して太平洋・日本海に達し、浦鹽斯德（Vladiostok）を得て（一八六〇）、根據地とし、日清戰役後關東州を租借した（一八九八）。

㊄**佛國の經營**　佛國は印度支那（Indo-China）に勢力を扶植し、柴棍（Saigon）を占領し（一八五九）、東埔塞（Cambodja）を保護國とし（一八六三）、更に安南（Annam）と戰つて東京（Tongking）地方を



佛國の阿弗利加横斷策
獨逸の經營
伊太利の經營

取り、次で安南を保護國とした(一八八四)。又暹羅(シャム Siam)よりメコン(Mekong)河東の地を奪ひ(一八九三)清國より廣州灣(コウシユウワン Kwangchauwan)を租借した(一八九九)。阿弗利加では北岸のアルジェリヤ(Algeria)を取り(一八三〇)、チュニス(Tunis)を征服し(一八八一)、サハラ(Sahara)の大部を取り、マダガスカル(Madagascar)島を植民地とし(一八九六)、遂に阿弗利加横斷策を企つるに至つた。その遠征隊はナイル(Nile)河上流なるファショダ(Fashoda)を占領したが、英國の嚴重な抗議にあつて撤兵した(一八九八)。

六 獨逸の經營　獨逸の植民は列國に稍〻後れたが、第十九世紀末より、阿弗利加中部以南の東西兩岸に領土を得、又大洋洲(Oceania)の諸島を收めて植民に力めた。又、清國に迫つて膠州灣(コウシユウワン Kiaochau Bay)を租借し(一八九八)此處を極東經營の根據地とした。

七 伊太利の經營　伊國は第十九世紀末、阿弗利加の紅海岸及び印度洋岸に領土を得、その後土耳其と戰つてトリポリ(Torpoli)(阿弗利加地中海岸)を奪つた(一九一二)。

米西戰役(一八九八)
太平洋經營
物質文明の進步

八 北米合衆國の經營　米國も世界の大勢に動かされて、近年モンロー主義を捨てて、帝國主義(侵略主義)を採るやうになつて、布哇(ハワイ Hawaii)王國の革命に干涉して之と併合し(一八九八)キューバ(Cuba)島(西領)民を援けて西班牙と戰ひ比律賓(フィリッピン Philippine)諸島を得た(一八九八)。かくて米國は太平洋上に雄飛せんとし、海軍を擴張し、パナマ(Panama)運河を開鑿し(一九一四)、又清國の領土保全門戸開放・機會均等主義を唱へ(一八九九)以て東洋方面の活動を試み始めた。

ルーズヴェルト

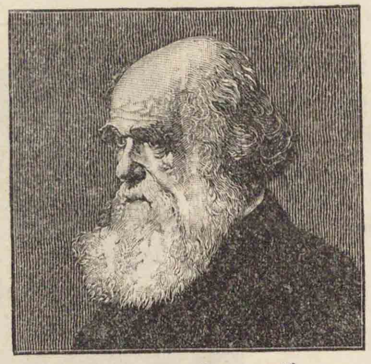
第三十四章　近世の文明

一 文藝及び科學　第十九世紀以來、政界の波瀾多く、民主主義は漸次發達旺盛となり、各國は概ね立憲政治を採用するに至つた。此間、

藝術・科學

藝術・科學等の物質文明は空前の大進步をした。哲學には、カントを祖述する大家各國に出で、史學に於て、ランケ（獨人）Ranke (1795—1886)は史界を一新し、文學界には、トルストイ（露人）Tolstoi (1828—1910)・バイロン（英人）Byron (1788—1824)・ハイネ（獨人）Heine (1799—1856)・イブセン（諾威人）Ibsen (1828—1906)・ユーゴー（佛人）Hugo (1802—85)・ゾラ（佛人）Zola (1840—1902)名高く、美術界では繪畫のミレー（佛人）Millet (1814—75)・彫刻のロダン（佛人）Rodin (1840—1917)が有名である。科學では、ダーウィン（英人）Darwin (1809—92)の生物進化論・マイエル（獨人）Mayer (1814—78)の勢力不滅說は著しきもので、レントゲン（獨人）Röntgen (1845—95)はX放散線を、キューリー Curie 夫妻（英人）はラヂウム Radium を、パストール（佛人）Pasteur (1822—95)は狂犬病豫防注射其他各種の發見をなして、理化學界に貢獻した。

ランケ


ダーウィン

科學の應用

㊁ **科學の應用**　學術の進步するにつれ、種々の發明が現はれ、之が

アンゼラスの鐘

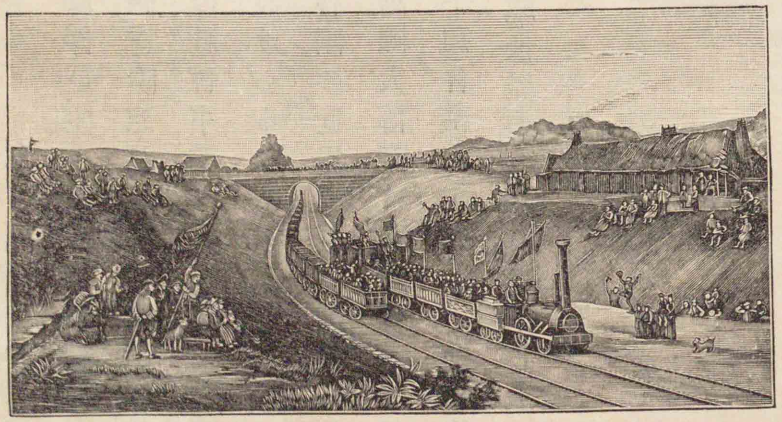
ジャン＝フランソア＝ミレーの筆
Jean Francois millet (1814－75)

ミレーは、田園畫家として世界に偉名を轟かした近代佛國畫界最大の誇たる人。この畫は彼の傑作である。

日は既に暮き、地平線一體は壯嚴な黄色に染められ、廣漠たるノルマンヂー平原は夕靄が迫つて來て、たゞ微かに教會堂の鐘樓のみが見えてゐる。その尖端なる十字架が最後の夕陽を浴びて金色に輝く時、アンゼラスの晩鐘が朗かに響くや、家路を急ぐ若き田舎の夫婦は立ち止まつて、鍬を土にさしうなだれたまゝ、靄の中に溶けて漂ふ鐘の響に心耳をすませて靜かに祈禱を捧げ、感謝の念に溢れながら、たゞ法悦の滿足に合掌してゐる有樣。尊き勞働！聖き祈禱！家庭の清淨のほども伺はれてうれしい。

晩の祈り　(ミレー作)

實用に供せらるゝに至つた。就中近世文化に重大な影響を與へたものは、蒸氣と電氣の應用である。卽ち既に發明せられた蒸汽機關は、第十九世紀の初フルトン(米人) Fulton (1765—1815) によつて船に、スチヴンソン Stephenson (英人) (1781—1848) によつて車に應用せられ、この汽車・汽船は世界の交通商業に一大變化を起した。其他電話(英人ベル)・電信(獨人ガウス Gauss 發明米人モース Morse 改良)・電燈(米人エヂソン Edison)・無線電信(伊人マルコニ Marconi)等の發明があり、最近は無線電話の使用が著しく盛となつた。又學術の進步は兵器の改良を促し、銃砲・彈藥・艦艇・航空機・タンク・毒瓦斯等が盛に實戰に



スチヴンソン發明當時の汽車

社會事業の發達

國際事業

用ゐらるゝに至つた。

㊂社會事業の發達　物質文明の發達に伴ひ、生存競爭は愈〻激甚となり、貧富の懸隔・勞資の反目は社會狀態を險惡ならしめんとしたが、一方相互扶助の思想も發達し、諸種の社會事業が興り、慈善病院・養老院・孤兒院・盲啞院等が各文明國に設けらるゝに至つた。

㊃國際事業の發達　世界交通機關の發達、各國の世界政策の發展に伴ひ、種々の世界共通事業が勃興した。萬國大博覽會・萬國郵便電信聯合・各種學藝上の萬國會議及び萬國平和會議・萬國赤十字同盟等の世界的會合が屢〻催されて、人類の幸福・世界の平和に貢獻した。

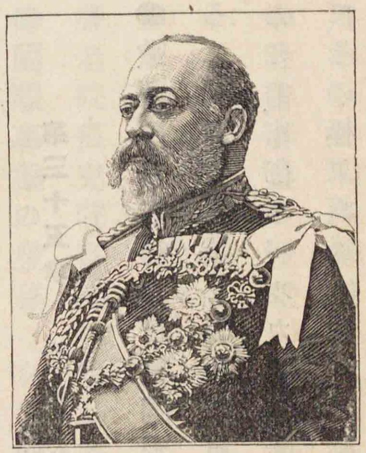
第五編　現代史（一九〇〇頃より現在に至る）

現代史　その後米國及び日本が列强の國際關係に參加し、日英同盟は嚮（サキ）の獨・墺・伊三國同盟・露佛同盟と鼎立（テイリツ）して勢力の均衡（キンカウ）に備へた。然るに、日露戰役後は形勢が一變して、歐洲は新に成立した三國協商（英・佛・露）と三國同盟との對抗となつたが、獨逸の急激な世界政策の實行、スラブ・ゲルマニヤの兩統一主義の衝突が主因となつて世界大戰となり、その結果世界は大改造を見るに至つた。

第三十五章　世界大戰勃發前の歐羅巴

㊀歐亞の新形勢と日英同盟　獨帝ウィリヤム二世（Wilhelm）（1888—1918）の卽位（一八八八）するに及び商工業を奬勵し、軍備を擴張して、大いに海外に雄飛せんとした。卽ちバルカン方面よりの進出を企て、先づ露國と接近して、その極東經營に便宜を與へ、以てこの方面に於ける露國の野心

日英同盟の成立（一九〇二）
三國協商の成立（一九〇七）



エドワード七

を他へ轉ぜしめた。英國は、獨逸の軍備擴張及び露獨の接近により、孤立を誇る能はざるに至り、露國の極東經營に不安を抱ける日本と同盟した（一九〇二）。

（二）三國協商の成立　三國同盟・露佛同盟及び英國（後、日英同盟）の三大勢力の鼎立によつて、歐洲の均勢が保たれてゐたが、獨逸の勃興により漸く不安を生じ、英國は佛國と協商を結び（日露戰役中一九〇四）、露國とも亦協商を結んだ（日露戰役後一九〇七）。之が所謂三國協商（Entente）で、三國同盟（Triple Alliance）（獨・墺・伊）と對立することとなつた。但し伊太利はアドリヤ海（Adriatic Sea）方面で墺國と利害を異にし、却て佛國と親むに至り、三國同盟は其の實二國同盟となつた。かくて獨逸の世界政策の發展は益々列國を脅し、英・佛・露三國は共同の敵として、その行動を注視

露國の南下策
墺國のボスニヤ・ヘルツェゴヴィナ併合
伊土戰役（一九一一―一九一二）

してゐた。

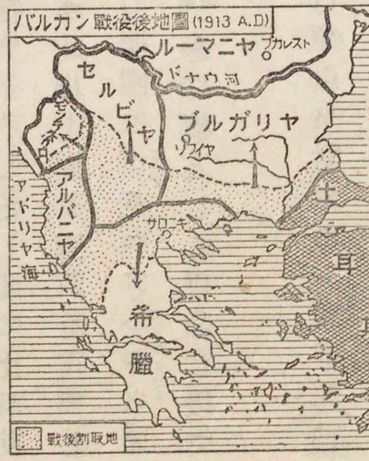
（三）バルカンの形勢　日露戰役に敗れた露國は、再び南下策を企て、バルカン半島地方のスラヴ民族を糾合して威を張らんとした。然るに獨逸は墺國を後援して、同じくこの方面に進出せんことを努めたので、玆に露國と獨・墺兩國との衝突が萠した。此頃土耳其に革命があつて（一九〇八）、青年土耳其黨（Young Turks）が政權を握り憲政を復興した。此の政變に乘じて勃牙利は獨立し、墺國はボスニヤ（Bsnia）・ヘルツェゴヴィナ（Herzegovina）（スラヴ族なる塞爾維國がかねて望める所）を露國の疲弊（日露戰後）を好機として併合し、以て塞爾維の怨を買つた。

（四）伊土戰役　伊太利は佛國のチュニス（Tunis）占領以來、對岸のトリポリ（Toripoli）（土耳其領）に着目してゐたが、土耳其の國勢不振に乘じ、之を奪はんと企て、正當の理由もなく開戰した（一九一一）。土耳其は敗戰し、且つバルカン半島内に戰亂勃發の兆があつたので、トリポリ及びキレナイカ（Cyrenaica）を

バルカン戰役
第一役（一九一二―一九一三）
第二役（一九一三）

伊太利に割いて和した（一九一二）。

五 **バルカン戰役** この戰役中、土耳其の窮境(キュウキャウ)に陥れるに乗じ、バルカン半島なる塞爾維(セルビヤ Servia)・黑山國(モンテネグロ Montenegro)・勃牙利(ブルガリヤ Bulgaria)・希臘(Greece)の四國は、その領土を蠶食(サンショク)せんと企て、同盟して土耳其に宣戰し（一九一二）大いに之を破つた（第一役）。然るに四國は土耳其の割讓地分配に關して相衝突し、勃牙利は他の三國及び土耳其・羅馬尼(ルーマニヤ Roumania)と戰つたが連敗して屈伏し、ブカレスト(Bucharest)に講和した（第二役）。その結果土耳其は歐洲に於ける領土の大半を失ひ、他の四國は各領土を擴め、新にアルバニヤ(Albania)公國（永久中立國）が出來て、塞爾維の發展はまた妨げられた。



遠因
近因

第三十六章 世界大戰役

一 **大戰役の原因** 前章に述べた史實は、大戰役の遠因であるが、更に之を約言すれば、(1)英獨兩國の經濟的・政治的・軍事政策の衝突、(2)獨逸の汎(パン)ゲルマニヤ主義(Pangermanism)と露國の汎(パン)スラヴ主義(Panslavism)との衝突、(3)獨佛兩國の反目、(4)バルカン諸國の紛爭等であるが、バルカン戰役(Balcan War)後、獨墺兩國は塞爾維(セルビヤ)の膨脹に不安を抱ける折柄、ボスニヤの首都セライェヴォ(Serajevo)に於て排墺主義の一青年が、墺國皇儲(クワウチヨ)夫妻を暗殺した（一九一四）。そこにおいて墺國は斷然塞爾維に宣戰を布告した。

セラィェヴォに於ける墺地利皇太子夫妻の暗殺

日本の參戰
戰況
西部戰線
東部戰線

㈡大戰役の勃發　そこで、露國は塞爾維を援け、獨逸は墺國に味方して宣戰し、佛國も亦獨逸に戰を宣した。獨軍は白耳義の中立を犯して佛國に向つたので、英國は之を責めて獨逸と開戰し、日本は日英同盟(第三日英攻守同盟)の誼によつて獨逸に宣戰した。かくて前古未曾有の世界大戰は始つた。

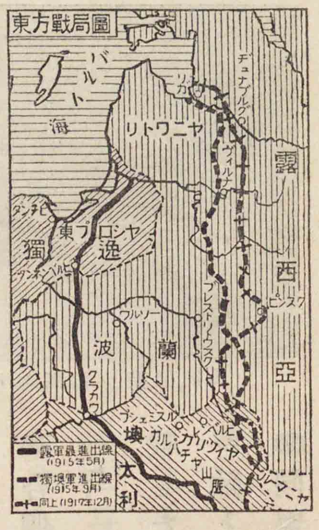
ポアンカレー

クレマンソー

㈢同盟軍の優勢　西部戰線では、獨逸の主力軍は白耳義を蹂躙して佛國に侵入し(一九一四)、一擧に巴里を衝かんとしたが、佛國の名將ジョッフル(Joffre)は、之をマルヌ(Marne)河畔に擊破した。東部戰線では、獨逸の勇將ヒンデンブルグ(Hindenburg)が、獨逸の東境に侵入した露軍を擊退し、進んで波蘭を占領した(一九一五)。バルカン方面では、同盟國は勃牙利を誘ひ、共に塞爾維・黑山國を攻めて、その國土を奪ひ(一九一五)、更に土耳其・勃牙利軍と協力して羅馬尼を攻擊し、その國都を陷れた(一九一六)。伊太利は其後三國同盟を脫して、聯合側に味方し(一九一五)墺國に侵入せんとしたが、同盟軍の爲に擊退され、却て北伊を侵された(一九一七)。

ジョッフル

バルカン方面
伊太利の參戰
露國の革命



㈣露國の革命　露國は開戰以來大敗を重ね、內政は紊亂し、物資も亦缺乏し、民心の險惡となつた折しも、豫て官僚政治の積弊を憤れる社會黨の貴族等の一團は、遂に革命を起し、ロマノフ(Romanov)朝を仆して假共和政府を建てた(一九一七)。然るにレニン(Lenin)・ト

ニコラス・レニン

米國の參戰

ロツキー(Trotzky)等過激(Bolsheviki)思想を抱く者、協力して第二革命を起し、假政府を倒して勞農(Soviet)政府を建て恣に同盟側と單獨講和を結んで聯合側から脫した。

マスクをかけた獨逸の機關銃兵

五 米國の參戰

英・佛・伊の聯合軍は、日本と共に海上を制し、敵國を封鎖し、物資供給の途を斷ち、その植民地を悉く奪つた。然るに獨逸は、潜航艇を以て奇勝を得んとし、終に無制限潜航艇戰を宣言した（一九一七）。米國は、之を怒り聯合側に味方して獨逸に宣戰した（一九一七）。世界各國も之に倣つて、獨逸に宣戰したので、獨逸は世界の獨立國の大半を敵とするに至つた。

六 同盟側の屈服と獨・墺の革命

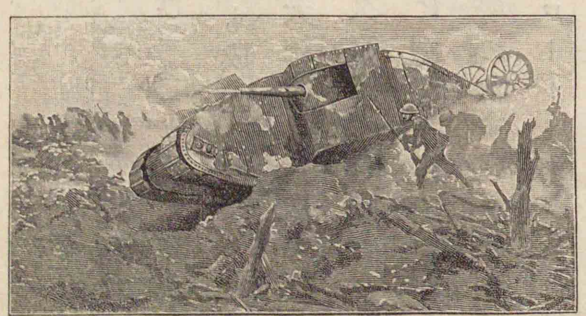
此間バ

勃牙利の降伏

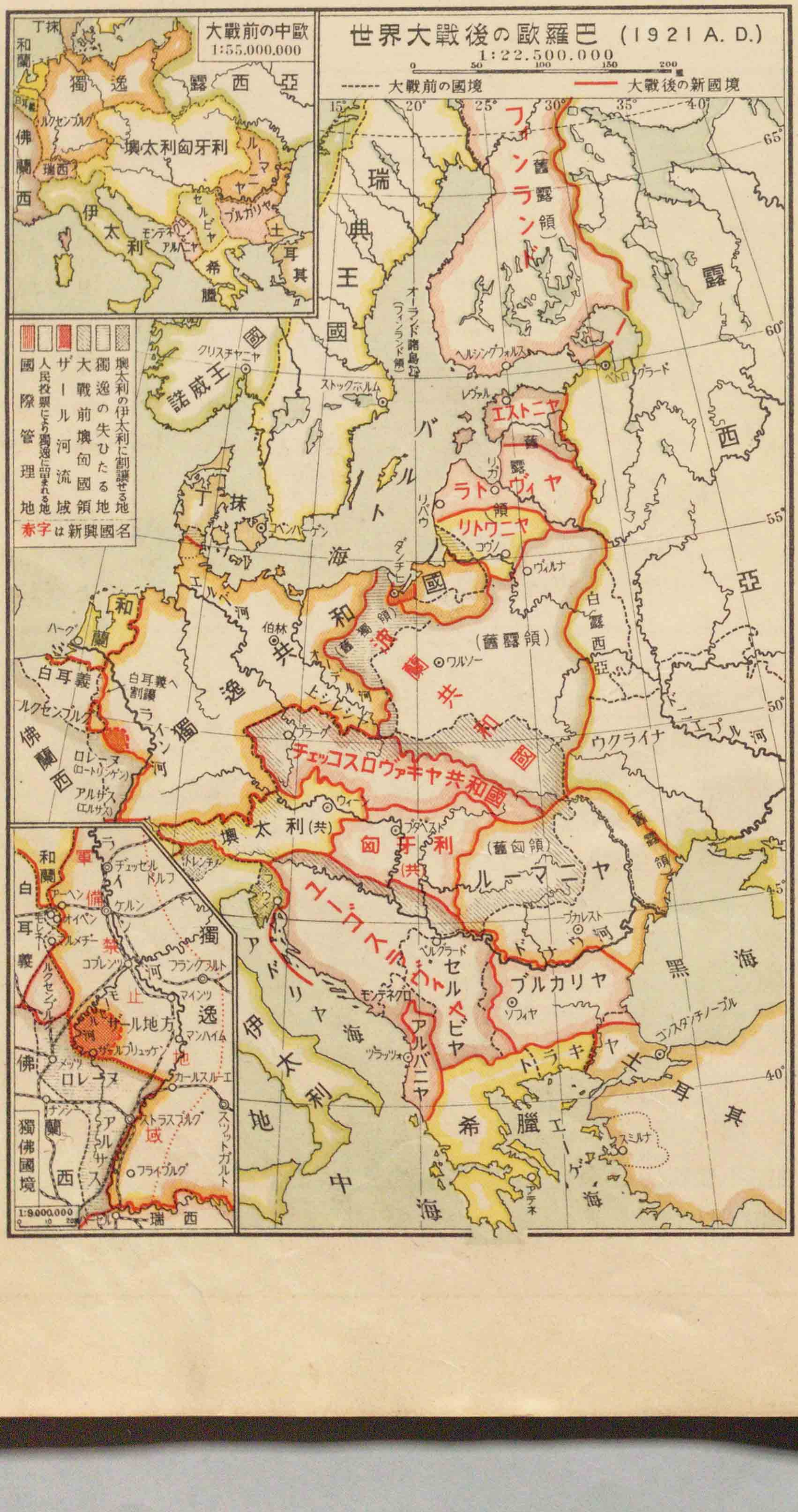
土耳其の降伏

ルカン方面では、聯合國は迫つて希臘を味方とし（一九一七）、共に勃牙利を攻めて遂に之を降した（一九一八）。英國は各方面より土耳其（同盟側）を壓迫して、遂に和を請はしめた（一九一八）。西部戰線では、獨墺軍は英・佛・米聯合軍と對陣してゐたが、この頃獨逸は物資缺乏し、士氣は漸く衰へた。聯合側は佛國のフォッシュ(Foch)元帥を總司令官とし、その結束愈々固く、遂に攻勢に轉じ、殆ど佛國の東邊を回復した（一九一八）。墺軍も伊軍に擊破せられて、北伊を撤退した。これより先、獨墺兩國には民主主義が優勢となり、革命が起つたが、獨・墺兩國の皇帝は共に退位

聯合軍總司令官
フォッシュ元帥



タンク

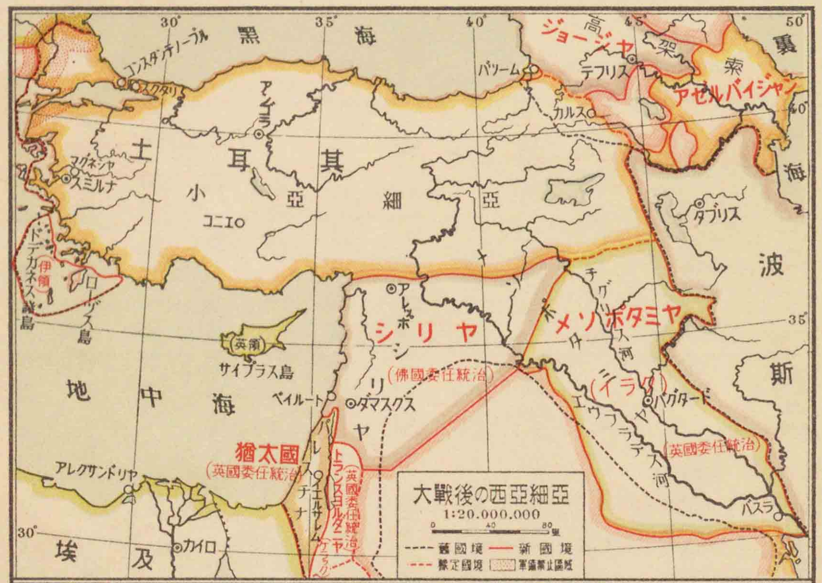


巴里講和會議

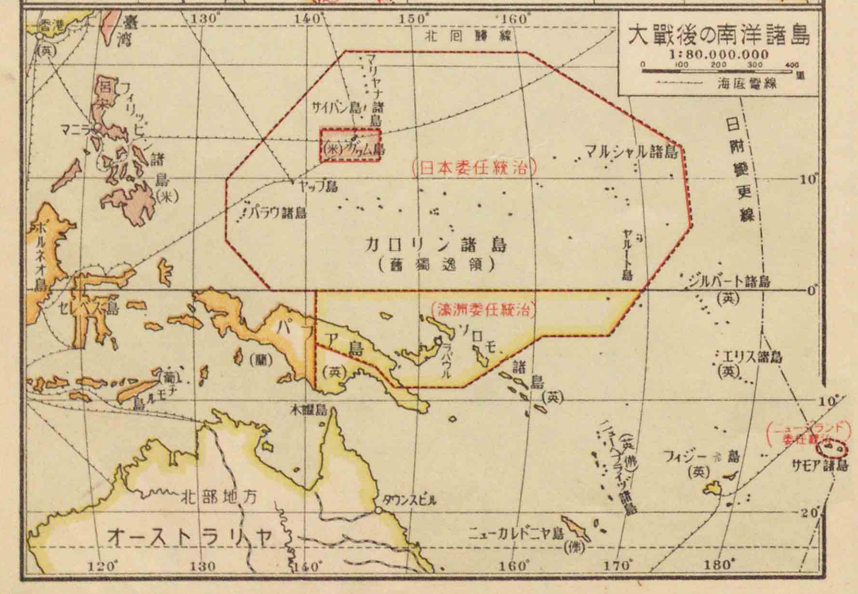
し、何れも共和國となつた(一九一八)。

㊆巴里講和會議　聯合側諸國の代表者(日・英・米・佛・伊の五大國以下二十七ケ國)は、巴里に會議し先づ獨逸に對するヴェルサイユ(Versailles)條約を結び(一九一九)、次で墺國・勃牙利(一九一九)、及び土耳其(一九二〇)との講和條約も成立した。ヴェルサイユ條約は、米國大統領ウィルソン(Wilson)の主唱により、世界恒久平和を目的とし、國際聯盟(League of Nations)勞働規約に關する條項をも含んでゐる。これ等の條約によつて、獨逸は(1)エルザス・ロートリンゲンを佛國に割讓し、波蘭(ポーランド)と白耳義とに若干の地を與へ、(2)巨額の賠償金支辨を列國と約し、(3)海外植民地及び領土の全部を放棄(ハウキ)し、(4)徴兵制度を廢し、陸海軍の兵數を制限した。墺國は洪牙利(ホンガリヤ)と分離し、土耳其は著しく領土を縮少され、又

ウィルソン



大戰後の西亞細亞
1:20.000.000



大戰後の南洋諸島
1:80.000.000

新なる國家が建設された（次章に詳説）。

第三十七章　世界大戰後の世界

㊀世界の改造　講和條約の結果、獨・墺・土の諸國は大損害を蒙り、土耳其は歐洲に於ては、僅にコンスタンチノープル及び其の附近を保つに至り、又歐洲諸國はウィルソンの提唱した民族自決主義に基づいて境界を改定することとした。

(1) バルト海方面にフィンランド(Finland)・エストニヤ(Estonia)・ラトヴィヤ(Latvia)・リトワニヤ(Lithuania)の四共和國が創立せられ、

(2) 波蘭(Poland)は多年の宿志を遂げて復活し、

(3) 墺洪國の解體によつて、チェッコスロヴァキヤ(Czechoslovakia)・ユーゴスラヴィヤ(Yugoslavia)が創設せられ、墺國及び洪國は領土を縮少され分離獨立した。

(4) 伊太利は北部國境及びアドリヤ海岸に領土を擴張し、

國際聯盟―聯盟の彼の滿洲問題、上海事件に對し認識不足の爲め、我國民の國際聯盟に對する信頼を減じつゝあるは遺憾である。

(5)佛國・白耳義等の諸國も國境地方に於て獨逸より土地を獲得した。

㈡國際聯盟　巴里講和會議に於て、ウィルソンの提唱に基いて成立した國際聯盟は、從來の均勢主義を棄てゝ、各國は(1)國際正義を保持し(2)國際間の協力を促進し、以て(3)世界の永久平和を確立することを目的とする。今やその加入國五十餘ヶ國の多きに達し、相當の效果を納めつゝある。

㈢大戰後の紛爭と世界の不安　波蘭は領土問題につき露國と爭ひ(一九二〇)、伊太利はフィウメ(Fiume)に關してユーゴ＝スラヴィヤと爭ひ(後一九二四協定成り伊國に併合)その後ムッソリニ(Mussolini)が首相となり國粹(ファシスチ)(Fascisti)黨を率ゐて戰後の經營に當つた。佛國は獨逸に對し賠償の實行を迫つて强硬な態度をとり(一九二三)、講和

ムスタファ＝ケマル＝パシャ夫妻

ケマル＝パシャの奮起

ケマル＝パシャと一夫一妻主義

條約の結果に不滿なる土耳其は、その國民黨首領ケマル＝パシャ(Kemal Pasha)の奮起によつて、大いに希臘軍を破つて若干の領土を回復し、次で皇帝(スルタン)(Sultan)を廢してアンゴラ(Angora)を首府とする共和國を創建した(一九二三)。

ケマル＝パシャの父は一小官吏であつたが母は偉い婦人であつた。早く夫に死別し、苦しい中に子供を育て上げた。ケマルが土耳其人には稀なる金髪であるのはアルバニヤ生れの母親の血統を承けたもので、異常の精力と耐力も、この民族的面目を傳へたものである。過去六百年の專制國家を變じて共和制を確立したケマルは、更に回教千數百年來の傳統を破つて、婦人の社會的地位の向上を計つた。即ち極端な婦人蔑視(べッシ)を意味する覆面(フクメン)を撤去し、密室から解放し、日沒後の外出嚴禁の舊慣を破り一夫多妻の弊風を改正した。

㈣米國の活躍　大統領ウィルソンは、世界大戰後世界の改造につき、國際間に大活躍を試みたが、その主唱によつて成立したヴェルサイユ講和條約は、却て自國の上院で批准されなかつた。米國は別に

ワシントン會議（一九二一）

露國政府の承認

獨逸と講和條約を結び（一九二一）、且つ國際聯盟にも加入せず、獨得の立場を主張した。次の大統領ハーヂング（Harding 1865—1923）は、軍備制限を提議し、日・英・米の三大國以下佛・伊・白・支・蘭・葡・諸國の委員をワシントン（Washington）に會して、主力艦隊の比率を協定し（日・英・米・佛・伊・海軍條約）、各國の支那の主權・領土尊重を約し（極東協約）、四國協約（日・英・米・佛）を結んで日英協約を廢棄せしめた（一九二一）。又米國の排日問題は年と共に烈しくなり、遂に移民制限法を實施して（一九二四）我移民の入國を禁じた。

ハーディング

㊄露國政府の承認　露國は過激派政府（勞農政府）の下に、全露大小諸邦が聯合して、ソヴィエット（Uion of Soviet Socialist Republics）社會主義共和國聯邦を組織した（一九二二）。英（一九二七斷交・後一九二九復舊）・佛（後一九二七斷交）・伊等の諸國は之を承認し（一九二四）、我國も亦その主義を宣傳せざる約にて、ソヴィエット（Soviet）政府を承認した（一九二五）。

ロカルノ會議

不戰條約

國際主義と國民主義・國粹主義

㊅最近の歐米政局　(1)ロカルノ會議（Locarno）—英・佛・伊・獨・白等の諸國は、ロカルノ（瑞西）に會議して、國境の安全保障と國際仲裁とに關する條約を結び（一九二五）、次で獨逸の國際聯盟加入（一九二六）により愈、その實行力を生じた。(2)不戰條約—米國の提案による不戰條約は列强及び英國自治領等十五箇國の代表により巴里で調印され（一九二八）、現在の加入國は五十九箇國に及んでゐる（一九三二）。之等の條約により國際的紛議は平和的處理法に俟つこととなつた。(3)國際主義（Inter-nationalism）と國民主義（Nationalissm）・國粹主義（Fascim）—かく國際主義の興隆するに對し、國民主義・國粹主義も盛となり、殊に伊太利のムッソリニの率ゐる國粹黨（ファシスチ（ファシヨ）Fascisti (Fascio)）の政治は獨裁專橫に傾き、又獨逸に於ても國粹社會黨を率ゐるヒットラー（Hitler 1889—×）は大統領選擧にヒンデンブルグ（Hindenburg 1847—×）元帥に敗れ（一九三六萬票對一三四一萬票）、其後の總選擧に於ても

ヒットラー

軍備縮小運動

ジュネーヴ會議

倫敦會議

ジュネーヴ一般軍縮會議

ローザンヌ賠償會議

絶對多數は贏ち得なかつたとはいへ、斷然第一黨としての威力を擁して、獨裁の機會を窺つてゐる（一九三二）。(4)軍備縮小運動―列强は彼のワシントン會議に於て主力艦の協定を遂げたが、更に補助艦についても協定せんと、米國大統領クーリッヂ Coolidge の提唱により(A)ジュネーヴ Genève (Geneva) 會議（瑞西）が開かれたが決裂に終つた（一九二七）。(B)倫敦會議―次に英國政府の主唱により倫敦會議を催し（一九三〇）、日・英・米・佛・伊等の諸國は補助艦の制限（比率日六、九英一〇、米一〇）を協定した。(C)ジュネーヴ一般軍縮會議―國際聯盟主催の一般軍備縮小會議が約六十箇國參加の下に開かれ、米國大統領フーヴァー Hoover (1874―×)（一九二九以來就任）の軍備三分一縮減案提出などあつたが、その成功は疑はしい（一九三二）。(5)ローザンヌ Lausanne 賠償會議―獨逸及び債權國たる諸國（日・英・佛・伊・白等）の代表は、ローザンヌ（瑞西）に會し、獨逸は「歐洲復興資金」（敢て賠償金といはず）三十億馬の一時金を支拂ふことの妥協成立し（一九三二）、協定に調印を了した

英・佛・西・露諸國の政情

西洋歷史を學び終つて、

（當初の一三二〇億馬に比すれば驚くべき減額）。(6)英・佛・西・露諸國の政情―世界を擧げての不況は深刻化し、失業者益〻激增し、國庫は愈〻歲入不足に窮するに至つた。殊に英國に於ては、失業保險大削減を餘儀なくされて勞働黨內閣（首相マクドナルド）は瓦解し、更にマクドナルド Macdonald (1866―×) を首班とし、保守黨・自由黨員を網羅する所謂「擧國一致內閣」が出現して憲政常道の記錄を破り、後、金本位制をも停止した（一九三一）。佛國では大統領ヅーメル Doumer (1857―1932)（一九三一就任）は兇漢の手に斃れ、後任としてルブラン Lel run (1871―×) が當選した（一九三二）。西班牙には革命があつて、皇帝アルフォンゾ十三世 Alphonso (1886―1931) は國外に蒙塵し、アルカラ＝ザモラ Alcala Zamora (1878―×) を首班とする政府成り、西班牙共和國が確立した（一九三一）。露國は第一次五箇年計畫を終へ（一九三二）、更に第二次五箇年計畫を企てて國力の充實に努めてゐる。

㊆西洋歷史を學び終つて　我が國史を顧るに、上に萬世一系の皇室を戴き、下に之を宗家と崇め奉る忠良な國民があつて、よく權利

主義を奉じて忠孝一致の誠を盡し來つた世界無比の我國體を誇ると同時に、他國數百年間に成りし文化を短日月間に吸收消化し、遂に世界三大强國の列に伍するを得た優秀民族なることを自覺する。然し飜つて現狀を見るに、内は國土狹小、物資貧弱にして、產業振はず、國民海外發展の氣象に乏しく、人口問題・食糧問題に苦しみ、外は世界を擧げて自由主義・民本主義・國粹主義流行し、就中我國體と相容れざる過激思想の潮流の押寄するあり、剩へ列强の耳目は、太平洋問題に集注されんとするの時、吾々の責任の愈、重大なるを思ふ。吾々は忠君愛國の精神を以て、自己の本務を勵精し、世界の大勢を達觀して、大國民たるの實を擧げ、以て天壤無窮の皇運を扶翼し、進んで世界の文明、人類の幸福の爲に貢獻せねばならぬ。

新編　西洋歷史　改版　終

附錄(一)　年表　(時代變遷の概觀一覽表)

上古史　(太古より紀元三七五迄)

時代	世紀	重要事項
東方諸國時代	B.C.三十一世紀…B.C.五世紀頃	埃及：B.C.三〇〇〇頃 埃及建國／B.C.一八〇〇頃 ヒクソス侵入／B.C.一三五〇頃 ラメス二世／B.C.五二五 波斯に征服さる
		バビロニヤ：B.C.二二五〇頃 ハムラビ王
		アッシリヤ：B.C.七〇〇頃 アッシリヤ統一完成／B.C.六〇六 ニネヴェ陷落、四國對立
		バビロニヤ：B.C.五三八 バビロン陷落
		波斯：B.C.五五〇 波斯建國／B.C.五二一—四八五 ダリウス一世
希臘時代	B.C.……四世紀頃	B.C.七七六 第一回オリンピヤ祭
		波斯戰役：B.C.四九二 第一回戰役／B.C.四九〇 第二回戰役／B.C.四八〇 第三回戰役
		アテネ隆盛：B.C.四四四—四二九 ペリクレス時代／B.C.四三一—四〇四 ペロポネス戰役
		スパルタ强勢：B.C.四〇四—三七一
		テーベの强勢：B.C.三七一 レウクトラの戰
		アレクサンドル大王 (B.C.三三六—三二三)／B.C.三三〇 波斯滅亡
日本		神代　B.C.六六〇　帝國興起時代
支那		二二〇四 夏 一七六六 殷 一一二二 周 (春秋の世)(戰國の世)

時代	世紀	重要事項
羅馬時代	B.C.四世紀頃……B.C.　A.D.…A.D.四世紀頃	B.C.七五三 羅馬の建國
		王政時代 (B.C.七五三—五一〇)
		共和政時代 (B.C.五一〇—三一)
		階級競爭時期 (B.C.五一〇—三六七)
		伊太利統一時期 (B.C.三六七—二六四)
		外國征服時期 (B.C.二六四—一三三)：B.C.二六四—二四一 第一ポエニ戰役／B.C.二一八—二〇一 第二ポエニ戰役／B.C.一四九—一〇六 第三ポエニ戰後
		内亂時期 (B.C.一三三—三一)：B.C.一三三—一二三 グラックス兄弟の改革／B.C.六〇 第一回三頭政治／B.C.四三 第二回三頭政治／B.C.三一 アクチウムの海戰
		帝政時代 (B.C.三一—A.D.四七六)
		二元政治期 (B.C.三一—A.D.一九二)：B.C.四 基督の誕生
		武斷政治期 (A.D.一九二—二八四)：二二六 ササン朝波斯起る／二八四 ヂオクレチヤヌス帝即位
		獨裁政治期 (二八四—四七六)：三二三 コンスタンチヌス大帝の統一／三九五 帝國の東西分立
日本		帝國興起時代　A.D.一九二　朝鮮服屬時代
支那		(戰國の世) B.C.二二一 秦 二〇五 B.C. 漢 A.D.二二〇 三國 二六五 西晉

中古史（三七五より一五〇〇頃迄）

民族動搖時代

世紀	重要事項
四世紀	**ゲルマニヤ民族の移動** ・三七五 フン族の壓迫 ・三九五 羅馬帝國の東西分裂
五世紀	四〇二 この頃よりゲルマニヤ民族大に羅馬領内に侵入 四五一 カタラウヌムの戰 ・四七六 西羅馬帝國滅亡 四八六 フランク建國
六世紀	**東羅馬帝國** 五二七 ユスチニヤヌス大帝卽位 五七一 マホメット生る
七世紀	**サラセンの活動** ・六二二 ヘジラ(回教紀元) 六四二 サラセン人波斯を滅す
八世紀	七二六 形像使用禁止令 七三二 ツール戰 七五五 サラセン帝國の東西分立 **チャールス大帝**（七六八―八一四） ・八〇〇 西羅馬帝國の再興
九世紀	八四三 ヴェルダン條約 八七〇 メルセン條約

日本	朝鮮服屬時代	五六二 蘇我時代	六四五 大化新時代	七〇八 奈良時代	七八四 平安時代
支那	三一六 東晉	四二〇 南北朝時代	五八一 隋	六一八 唐	

封建時代

世紀	重要事項
九世紀	**ノルマンの活動** 八六二 露西亞の建國
十世紀	・九六二 神聖羅馬帝國建設 九八七 佛蘭西カペー朝
十一世紀	・一〇六六 ノルマンの英蘭征服 **十字軍**（一〇九六―一二七〇） 一〇七七 カノッサ事件 一〇九六―九九 第一十字軍 一一四七―四九 第二十字軍
十二世紀	一一九八 法皇インノセント三世
十三世紀	・一二一五 大憲章發布(英) 一二五〇―七三 大空位時代(獨) 一二七〇 第七十字軍 **東方民族侵入** 一二九九 オスマン土耳其建國 （一四〇二） アンゴラの戰

新氣運勃興時代

世紀	重要事項
十四世紀	**西歐諸國の興起** 一三〇二 三部會の起原(佛) 一三三七 百年戰役の始 一三五六 金印勅書發布(獨)
十五世紀	・一四五三 東羅馬帝國滅亡 百年戰役の終 一四五五―八五 薔薇戰役 **文藝復興・地理上の發見** 一四九二 コロンブスの新地發見 一四九八 ガマの印度航路發見 （一五一九―二二） マジェラン一行の世界一週

日本	平安時代	一一八五 鎌倉時代	一三三三 吉野時代	一三九二 室町時代		
支那	唐	九〇七 五代	九六〇 北宋	一一二八 南宋	一二〇六 元	一三六八 明

近古史（一五一七頃より一七八九頃迄）

宗教改革時代

世紀	重要事項
十六世紀	**獨逸の宗教改革** ・一五一七 ルーテル改革說を唱ふ 一五四五―六四 トリエント宗教會議 ・一五五五 アウグスブルグ宗教和議 **佛蘭西の宗教改革** 一五六二―九八 ユグノー戰役 一五九八 ナント勅令 **英蘭の宗教改革** 一五三四 英蘭教會の成立 一五五八 エリザベス女王卽位 ・一五八八 無敵艦隊の全滅 **西班牙と和蘭** 一五五六 西班牙王フィリップ二世卽位 一五七一 レパントの海戰 一五八一 和蘭の建國
十七世紀	**三十年戰役**（一六一八―四八） 一六一八―二四 第一期(ボヘミヤ戰役) 一六二五―二九 第二期(丁抹との戰役) 一六三〇―三五 第三期(瑞典との戰役) 一六三五―四八 第四期(佛瑞兩國との戰役) ・一六四八 ウエストファリヤ條約 **英蘭の革命** 一六四二―四九 第一革命 一六四九―六〇 共和政 一六六〇 王政復舊 ・一六八八 名譽革命

日本	一四九〇 戰國時代	一五七三 安土桃山時代	一六〇三 江戸幕府創業時代
支那	明	一六一六 清	

諸強國勃興時代

世紀	重要事項
十七世紀	**佛蘭西の强盛** 一六六一 ルイ十四世親政 一六六七―六八 西領ネーデルランド侵入 一六七二―七八 和蘭の役 一六八九―九七 ファルツ戰役 （一七〇一―一三） 西班牙繼承戰役 **露西亞の勃興** 一六八二 ペートル大帝卽位 ・（一七〇〇―二一） 北方戰役
十八世紀	**普魯西の勃興** 一七四〇 フレデリック大王卽位 マリヤテレサ卽位 ・一七四〇―四八 墺地利繼承戰役 一七五六―六三 七年戰役 一七七二―九三―九五 波蘭三回の分割 **英・佛植民戰役** 一七五六―六三 植民地七年戰役 一七五七 プラッシーの戰(印度) 一七五九 英國加奈陀略取 ・一七六三 巴里和約 **米國獨立戰役**（一七七五―八三） 一七七六 米國獨立宣言 一七八三 ヴェルサイユ和約 一七八七 米國憲法制定 一七八九 ワシントン大統領就任

日本	一六五一 江戸幕府隆盛時代	一七四五 江戸幕府衰亡時代
支那	清	

近世史(一七八九頃より一九〇〇頃迄)

時代	佛蘭西革命時代	保守自由主義
世紀	十八世紀	十九世紀

佛蘭西大革命(一七八九—九五)

年	重要事項
・一七八九	革命の破裂(三部會)
一七八九—九一	立憲議會(國民議會)
一七九一—九二	立法議會
一七九二—九五	國民協會
・一七九二	王政廢止
一七九三—九七	第一回歐洲大同盟
一七九三—九四	恐嚇政治
一七九五	革命鎭定

ナポレオン時代(一七九五—一八一五)

年	重要事項
一七九五—九九	執政官政府
一七九八—九九	ナポレオン埃及遠征
一七九九—一八〇二	第二回歐洲大同盟
一七九九—一八〇四	統領政府
一八〇四	ナポレオン皇帝卽位
一八〇五	第三回歐洲大同盟
・一八〇六	神聖羅馬帝國滅亡
	大陸封鎖令
一八一二	露西亞征伐
一八一三—一四	第四回歐洲大同盟
一八一四—一五	ウィーン列國會議
・一八一五	ワーテルローの戰

反動時代

年	重要事項
一八一五	神聖同盟成立
一八一〇—二五	南米諸國の獨立
一八二三	モンロー主義發表
一八二一—二九	希臘獨立戰役

日本	江戸幕府衰亡時代
支那	清

時代	衝突時代	自由統一主義流行時代	帝國主義世界政策流行時代
世紀	十九世紀		

七月革命

年	重要事項
・一八三〇	七月革命
一八三一	白耳義の獨立

二月革命

年	重要事項
・一八四八	二月革命
一八五二—七〇	ナポレオン三世
一八五四—五六	クリミヤ戰役
一八六一—六五	南北戰役(米國)

伊太利の統一

年	重要事項
一八五九—六一	伊太利統一戰役
一八七〇	統一の完成

獨逸の統一

年	重要事項
一八六六	普墺戰役
・一八七〇—七一	普佛戰役

東方問題

年	重要事項
一八七七—七八	露土戰役
・一八七八	伯林會議

歐洲諸國の均勢

年	重要事項
・一八八三	三國同盟(獨・墺・伊)
一八九一	露佛同盟

阿弗利加及び太平洋方面の列强經營

年	重要事項
一八六九	スエズ運河開通
一八七五頃	露國の中亞侵略
一八七七	印度帝國建設(英國)
一八八一	佛國チュニス占領
一八九八	米國布哇併合
	米西戰役
一八九九	南阿戰役
(一九〇三—一九一四)	米國パナマ運河經營

日本	江戸幕府衰亡時代	一八六八	明治時代
支那	清		

現代史(一九〇〇頃以後)

時代	世界大戰前後の時代
世紀	二十世紀

大戰勃發前世界の形勢

年	重要事項
一九〇二	日英同盟
一九〇四—五	日露戰役
一九〇四	英佛協商
一九〇七	英露協商
一九〇八	土耳其革命
一九一一—一二	伊土戰役
一九一二—一三	バルカン戰役

世界大戰(一九一四—一九一九)

年	重要事項
一九一四	大戰勃發
一九一五	伊太利參戰
一九一七	露國革命
	米國參戰
一九一八	休戰成立
一九一九	巴里講和會議

大戰後の世界

年	重要事項
一九二〇	土耳其共和政
一九二一	ワシントン會議
一九二二	愛蘭自由國創設
一九二三	佛白ルール占領
一九二四	ドーズ案賠償成立
一九二五	ロカルノ條約調印
一九二八	不戰條約調印
一九二九	羅馬問題解決
一九二九	ハーグ賠償會議

日本	明治時代	一九一二	大正時代	一九二六	昭和時代
支那	清	一九一二	中華民國		

時代	世界大戰前後の現代
世紀	二十世紀

年	重要事項
一九三〇—三一	倫敦會議
一九三一	西班牙の革命
一九三一	英國「擧國一致內閣」成立
一九三二	ジュネーヴ一般軍備縮小會議
一九三二	ローザンヌ賠償會議

日本	昭和時代
支那	中華民國

―ワ―

ワイセンブルグ Weissenburg…………94
ワーテルロー Waterloo………………139
ワグラム Wagram…………………137
ワシントン Washington………118, 119
ワシントン會議…………………182, 184
ワット Watt…………………………122
ワルドゼーミウレル Waldsemüller…………………………78
ワレンスタイン Wallenstein…………………………94, 95

—— モ ——

モース Morse……167
モーゼ Moses……4
英臥兒帝國 Moghul……116
モスコー Moscow……138
モスル Mosul……57
モザルト Mozart……121
モリエール Moliere……105, 121
モルトケ Moltke……154, 157
モレア半島 Morea……10
門戶開放主義……165
モンテスキュー Montesquien……120
黑山國 Montenegro……158, 172
モンロー Monroe……142
モンロー主義
　Monroe Doctrine……142, 165

—— ヤ ——

ヤコブ Jacob……35
耶蘇會 Sosiety of Jesus……86
ヤン=ヨーステン Yan Joosten……97

—— ユ ——

ユーグ=カペー Hugh Capet……66, 67
ユーゴー Hugo……166
ユーゴスラヴィヤ Yugoslavia……179, 180
ユグノー Huenots……80, 92
ユグノー戰役……92, 93
ユスチヤヌス大帝 Justinianus……40, 41
ユダ Judas……35
ユダヤ Judaea……4
ユダヤ敎……12
ユダヤ人……5, 35
ユトレヒト條約 Utrecht……104

—— ヨ ——

ヨーク York……6
ヨーク家 York……69, 70
ヨークタウン Yorktown……118
ヨハネ John……35
ヨルダン河 Jordan……4

—— ラ ——

ライプチヒ Leipzig……138
ライン Rhine……133
ライン同盟
　Confederation of the Rhine……135
ラインランド Rhineland……184
ラヴェンナ Ravenna……41
ラシーヌ Racine……105, 121
ラックスマン Laxmann……111
ラテラン宮殿
　Lateran……47, 49, 81, 183, 184
ラテン人 Latnis……22
羅典文字 Latin Literature……30
ラトヴィヤ Latvia……179
ラファエル Raphael……74, 80
ラメス二世 Rames……3
ランカスター家 Lancaster……69, 70
ランケ Ranke……22, 166

—— リ ——

リクルグス Lycurgus……10
リシュリュー Richelieu……102
リスボン Lisbon……8
リヂヤ Lydia……7
立憲議會(國民議會)
　National Assembly……126
立法議會 Legislative Assembly……126
リトワニヤ Lithuania……179
リュッツェン Lützen……95
リュベック Lübeck……62
リューベンス Rubens……121

リンカーン Lincoln……151
領土保全主義……165

—— ル ——

ルイ八世 Louis……57
ルイ九世 St. Louis……57, 66
ルイ十三世 Louis……102
ルイ十四世 Louis……102, 103, 104, 156
ルイ十六世 Louis……125
ルイ十八世 Louis……139
ルイジヤナ Louisiana……151
ルイ=ナポレン(ナポレオン三世)
　Louis Napoleon……145, 146
ルイ=フィリップ(佛王)
　Louis Philip……144
ルウジェ=ド=リール
　Rouget dedIsle……128, 129
ルーヴォア Louvois……103
ルーズヴェルト Roosevelt……165
ルブラン Lebrun……185
羅馬尼 Roumania……158, 172
ルーリック Rurick……53, 106
ルス Rus……52
ルソー Rouseau……120, 125
ルドルフ(獨王) Rudolf……54
ルドルフ二世(獨帝)……94

—— レ ——

レウクトラ Leuctra……15
レオ三世(東羅帝) Leo……47
レオ三世(法皇) Leo……49
レオ六世(東羅帝) Leo……48
レオ九世(法皇) Leo……49
レオ十世(法皇) Leo……81, 90
レオナルド=ダ=ヴィンチ
　Leonard da Vinci……74
レオニダス Leonidas……13
レオポルド一世(獨帝) Leopold……104
レニン Lenin……175
レニングラード Leningrad……108
レパント Lepanto……89
レピヅス Lepidus……29
レムス Remus……22
戀愛詩 Minnesager……59
レンス Reims……60, 68
レントゲン Rön'gen……166
レンブラント Rembrant……121

—— ロ ——

ローザレヌ Lausanne……184
ロサンジェルス Los Angels……9
ロージャー=ベーコン
　Roger-Bacon……59
勞働規約……178
勞農政治 Soviet……178
ロートリンゲン Lothringen……156, 178
羅馬公敎會
　Roman Catholic……37, 46, 49, 58
羅馬法典……32
羅馬法皇 Pope……46, 47
羅馬法皇領
　Papal States……50, 149, 150
羅馬問題……150
ロカルノ Locarno……183
露西亞敎會 Russian Church……107
ロダン Rodin……166
露土戰役……124, 157
露佛同盟……124, 160, 169
ロベスピエール Robespierre……130
ロマネスク建築 Romanesque……60
ロマノフ家 Romanov……106, 175
ロムルス Romulus……22
ロロ Rollo……51
ロンバルヂヤ Lombardy……50, 149

ヘヂラ Hegira……43
ペテルスブルグ St. Petersburg……108
ペトラルカ Petrarcha……73
ヘブライ Hebrews……4
ペルクレス Pericles……15
ペリクレス時代 Periclian Age……15, 9
ペリゴール Périgord……67
秘露 Peru……88, 141
ペルガムム Pergamum……18
ペルガメント Pergament……18
波斯 Persia……6, 7, 103
波斯戰役……12
ペルセポリス Persepolis……7
ヘルツェゴヴィナ Herzegovina……159, 171
ベルチスタン Baluchistan……162
伯林 Berlin……62
伯林會議……157, 158
ヘレネス族 Hellenes……8
ヘロドツス Herodotus……2, 19
ペロポネスス Peloponnesus……10
ペロポネスス戰役
Peloponnesian War……15
ヘンリ(葡) Henry……71
ヘンリ(葡王子)
Henry the Navigator……77
ヘンリ二世(英蘭王) Henry……65
ヘンリ二世(佛王) Henry……93
ヘンリ三世(英蘭王) Henry……65
ヘンリ三世(佛王) Henry……92
ヘンリ四世(獨王) Henry……53
ヘンリ四世(佛王) Henry……93
ヘンリ七世(英蘭王) Henry……70
ヘンリ八世(英蘭王) Henry……90

―― ホ ――

ポァチェー Poitiers……63
ポァンカレー Poincaré……174
ボイコット(不買同盟) Boycot……160
ボイコット Boycot……160
ホーエンロー工 Hohenlohe……158
法皇身分保證令 Law of Guarantees……150
封建制度 Feudal System……37, 59, 60
保護政策 Mercantile System……103
ホーマー Hommer……19
波蘭 Poland……108, 144, 179
ポーロ Paul……35
北米合衆國……164
保守黨(英) Conservatives……100, 185
ボスニヤ Bosnia……159, 171, 173
ボッカチオ Boccaccio……73
ポツダム Potsdam……115
北方戰役 Northern War……108, 109
ボナヴェンツラ Bonaventura……59
ボニファキウス八世 Boniface……66
ボヘミヤ Bohemia……52, 60, 94
ホラチウス Horace……33
ボリヴィヤ Bolivia……141
ホルスタイン Holstein……154
ポルダヴァ Poltava……108
葡萄牙 Portugal……71
ボルドー Bordeaux……67
ボロニヤ Bolognia……59
洪牙利 Hungary……52, 145, 178
香港 Hongkong……161
ポンペィウス Pompeius……27, 28

―― マ ――

マイエル Mayer……166
マクシミリヤン(墨)
Maximilian……152, 153
マグデブルグ Magdeburg……52
マクドナルド Macdonald……185
マケドニヤ Macedonia……8, 16
マケドニヤ王國 Macedonia……18, 25

マザレン Magarin……102
マジェラン Mazellan……78
マジャール Magyars……52
マダガスカル Madagascal……164
マチヤス Mathias……94
マチルダ Matilda……54
マテォ Matteo……35
マニラ Manila……88
マホメット Mahomet……42, 43
マホメット二世 Mahomet……72, 73
マラー Marat……129, 130
マラッカ Malacca……161
マラトン Marathon……14
マラソン競走 Marathon race……14
マリー=アントアネット
Marie Antoinette……126
マリウス Marius……27
マリヤ=テレサ
Maria Theresa……112, 113, 114
マリヤ=ルイザ Maria Louisa……137
マルクス=アウレリウス
Marcus Aurelius……31
マルコニ Marconi……167
マルコ=ポーロ Marco Polo……75, 76
マルセィエイズ Marseillaise……128
マルセイユ Marseille……56, 128
マルタ Malta……140
マルチン=ルーテル
Martin Luther……81, 82, 83
マルヌ Marne……174

―― ミ ――

ミイラ(木乃伊) Mummy……3
ミカエル=セルラリウス
Michael Caerularius……49
ミカエル=ロマノフ
Michael Romanov……106
ミケネ Mycæne……1
ミケランジェロ Michaelangelo……74, 80
ミシシッピ Mississippi……116
ミノス Minos……1
南阿弗利加聯邦
Union of South Africa……163
ミラノ Milan……36, 60
ミルチヤデス Miltiades……14
ミレー Millet……166
ミレツス Miletus……13
ミロン Myron……10
民主黨(米國) Democrats……151
民族主義……173
民族自決主義 Self-determination……179
ミンネジンゲル Minnesinger……59
民本主義……185

―― ム ――

ムサ Musa……45
無制限潜航艇戰……176
ムッソリニ Mussolini……180
無敵艦隊 Invincible Armada……91
ムリリョ Murillo……121

―― メ ――

名譽革命 Glorious Revolution……100
名譽の孤立
Glorious Isolation……159, 160
墨西哥 Mexico……88, 141, 147, 152
メソポタミヤ Mesopotamia……3
メヂナ Medina……43
メヂヤ Media……6
メッカ Mecca……42, 43
メッテルニヒ Metternich……141, 142
メリー=スチュアート Mary Stuart……91
メリー=チュードル Mary Tudor……90
メルセン Mersen……50

ノルマンヂー公 Normandy……64

―― ハ ――

バーソロミュー Bartholomew……35
バーソロミュー=ヂヤズ
Bartholomew Diaz……77
ハーヂング Harding……182
ハイネ Heine……166
バイロン Byron……166
バヴァリヤ公 Bavaria……94
バグダード Bagdad……44
バスチーユ Bastille……126
パストール Pasteur……166
バタヴィヤ Batavia……97, 108
拔都 Batu……71
パナマ Panama……165
ハノーヴァー Hanover……101
バビロニヤ Babylonia……3, 6, 7
バビロン Babylon……17
ハプスブルグ Hapsburg…54, 94, 96, 112
ハムラビ Hammurabi……3
ハムラビ法典 Hammurabi……4
鉄込色板ガラス Stained glass……60
バユー Bayeux……64
巴里 Paris……59, 178
巴里講和會議……178
バルカン半島 Balkan……8, 157, 171
バルカン戰役……172
パルチヤ(安息) Parthia……28, 31
パルテノン Parthenon……12
パルテノン神殿……21
バルト海 Baltic Sea……95
緬甸 Burma……162
パレスチナ Palestine……4
布哇 Hawaii……165
汎ゲルマニヤ主義 Pangermanism……173
汎スラヴ主義 Panslavism……173
ハンザ同盟 Hanseatic League……62, 96
ハンニバル Hannibal……24
ハンブルグ Hamburg……72

―― ヒ ――

ピウス九世 Pius……150
東ゴート Ostrogoths……38
東フランク Frank……50, 52
東羅馬皇帝……106
東羅馬帝國……72, 74
ピサ Pisa……56
ビザンチン文化 Byzantine……2
ビスマルク Bismarck……154, 155, 158
ピット(老) Pitt……116, 117
ピット(少) Pitt……132
ヒットラー Hitler……183
ピピン Pipin……49, 50
百日天下 The Hundred Days……139
百年戰役 Hundred Year's War……67
表音繪文字 Hieroglyph……3
ピラミッド Pyramid……3, 132
ピンドス山脈 Pindus……8
ヒンデンブルグ Hindenburg……174, 138

―― フ ――

ファショダ Fashoda……164
ファビウス Fabius……25
ファルツ Pfalz……103
選帝伯 Count Palatinate……94
フィウメ Fiume……180
フィデヤス Phidias……20
比律賓諸島 Philippine……78, 88
フィリップ Philip……16
フィリップ(使徒) Philip……35
フィリップ二世(佛王) Philip……66
フィリップ二世(西王) Philip……89, 91
フィリップ三世(西王) Philip……90

フィリップ四世(佛王) Philip……66
フィリップ五世(西王) Philip……104
フィリップ六世(佛王) Philip……67
フィレ Philae……2
フーヴァー Hoover……184
ブール人 Boers……183
フェニキヤ Phoenicia……5, 24
フェルヂナンド(アラゴン王)
Ferdinand……70, 71
フェルヂナンド二世(獨帝)……94
普墺戰役……150, 154
フォシウム Photius……48
フォッシュ Foch……177
ブカレスト Bucharest……172
福音同盟 Evangelical Union……94
富國論 Wealth of Nation……121
武士(騎士) Knight (chevalier)……60, 61
武士道 Chivalry……61
不戰條約……183
武斷政治(羅馬)……22, 31
復興式 Renaissaance Style……74, 80
プトレメウス Ptolemaeus……1, 18
普佛戰役……155
ブラジル Brazil……78, 88, 142
プラトー Plato……21
ブラマンテ Bramante……74, 80
フランク族 Franks……39
フランク王國 Frank……39, 60
フランクリン Franklin……122
フランシス(アッシシ) Francis……64
フランシス(ギーズ公) Francis……92
フランシス一世(墺帝) Francis……135
フランシス一世(佛王) Francis……84, 85
フランシス一世(獨帝) Francis……135
フランシス二世(佛王) Francis……92, 93
フランシス=ザヴィエル
Francis Xavier……86, 88
ブランシュ Blanche……57
佛蘭西革命……124
プランタジネット朝 Plantagenet……65
ブランデンブルグ Brandenburg……111
ブリタニヤ Britania……28, 39, 64
ブルッセル Brussels……139
ブリュッヘル Blücher……139
勃牙利 Bulgaria……159, 171, 172
フルトン Fulton……167
ブルネレスコ Brunellessco……74
ブルボン家 Bourbon……92, 96
プレヴナ Plevna……158
ブレーメン Bremen……62
プレスブルグ Presburg……113
フレデリック一世(普王)
Frederick……111, 112
フレデリック二世(普大王)
Frederick……112
フレデリック=ウィリヤム一世(普王)
Frederick William……112
プロテスタント Protestant……84, 85
フロリダ Florida……151
フロレンス Florence……56, 62, 153
フン(匈奴) Huns……38, 60
文藝復興 Renaissance……2, 73, 44, 82

―― ヘ ――

米西戰役……165
平民(羅馬) Plebeians……23
ベーコン Bacon……92, 121
ヘースチングス Hastings……64
ペートル(使徒) Peter……35, 46, 47
ベートーヴェン Beethoven……122
ペートル大帝
Peter The Great……106, 107, 108
ペートルの遺產
Patrimonium Petri……50

大不列顛王國
Kingdom of Great Britain……101
太平洋問題……185
大洋洲 Oceania……164
大陸封鎖令 Continental System……136
ダヴィッド David……4
タキツス Tacitus……33
タスマン Tasman……98
タスマニヤ Tasmania……98
タッデイ Thaddaeus……35
ダマスク Damask……57
ダリウス Darius……7, 13
ダリウス三世 Darius……16
タリク Tarik……45
ダンチヒ Danzig……62
ダンテ Dante……73
ダントン Danton……130

― チ ―

チェッコスロヴァキヤ Czechoslovakia……179
ヂオクレチヤヌス Diocletianus……32
チグリス Tigris……3, 6
ヂスレーリ Disraeli……159
チツス Titus……31
チベル河 Tiber……22
帖木兒 Timur……72
チャールス一世(英王) Charles……98, 99
チャールス二世(英王) Charles……100
チャールス二世(西王) Charles……104
チャールス四世(獨帝) Charles……67
チャールス五世(獨帝)
……83, 84, 85, 89, 90
チャールス六世(獨帝) Charles……104
チャールス七世(佛王) Charles……69
チャールス七世(獨帝) Charles……113
チャールス九世(佛王) Charles……92, 93
チャールス十世(佛王) Charles……143
チャールス十二世(瑞典王) Charles……108
チャールス大帝……37, 49, 52, 66
チャールス=マルテル Charles Martel……49
チュードル家 Tudor……70
中期ペルシヤ……31
長老黨 Presbyterians……99
智利 Chili……141
チリー Tilly……94, 95

― ツ ―

ツァール Czar……106
ツヰングリ Zwingli……86
ヅーメル Doumer……185
ツールの戰 Tours……44
ツールーズ Toulouse……67
ヅンス=スコタス Duns Scotus……59

― テ ―

帝國主義 Imperialism……165
テーベ Thebes……15
テオドシウス一世 Theodsius……32
テオドラ Theodra……41
デカメロン Decamerone……73
デカルト Descartes……121
テミストクレス Themistocles……13
テルモピレー Thermopylae……13
テレサ(聖女) Theresa……87
田園詩 Troubadour……59
天主敎(切支丹宗)……87
丁抹 Denmark……51, 52
丁抹戰役……154

― ト ―

東印度會社(英)
East India Company……92, 117, 161
東印度會社(和蘭)
East India Company……97

東印度會社(英國)……92, 117, 161
統監 Lord Protector……99
統領政府 Consular Government……132
トーナメント Tournament……61
トーリー黨 Tories……100
道理崇拜敎
Cultus of Reason (Raison)……130
ドーリヤ式 Doric Order……21
ドリヤ族 Dorians……10
獨裁政治(羅馬)……22, 32
獨立宣言(米國)
Declaration of Independece……118
獨立黨(英國) Independent……99
都市國家 City State……8
ドナウ河 Donau……38
トマス(使徒) Thomas……35
トマス=アクィナス Thomas Aquinas……59
トマス=アケンピス
Thomas á Kempis……59
ドムレミー Domremy……68
トラファルガル Trafalgar……134
トリエント Trient……86
トリポリ Tripoli……164, 171
トルストイ Tolstoi……166
トルバドウル Troubadour……59
奴隸廢止問題……169
トロツキー Trotzky……176
東京(トンキン) Tongking……163

― ナ ―

ナイチンゲール Nightingale……147
ナイル Nile……2, 164
ナポレオン一世
Napoleon……132, 133, 134 其他
ナポレオン三世 Napolen……152, 155 156
ナポレオン=ボナパルト
Napoleon Banaparte……131
ナルヴァ Narva……108
ナント勅令 Edict of Nantes……93
南北戰役 American Civil War……151
南阿共和國……162

― ニ ―

ニーム Mimes……93
二月革命 February Revolution……145
ニケーヤ Nicaea……48
二元政治(羅馬)……30
二國同盟 Dual Alliance……158
西ゴート Visigoths……36, 38
西フランク Frank……50, 51, 66
西羅馬帝國……38, 39, 49
日英同盟……169, 174
日淸戰役……163
日露戰役……159, 179, 171
ジァシー New Zersey……98
ニュー=ジーランド New Zealand……98
ネーデルランド Netherland……98
ニュー=ホルランド New Holland……98
ニューヨーク New York……98

― ネ ―

ネーデルランド Netherlands……84, 89
ネーデルランド王國 Netherland……140
ネルソン Nelson……134
尼布楚條約 Nertchinske……111
ネロ Nero……31

― ノ ―

農奴 Serf……62
ノートルダム Notre Dame……69
諾威 Norway……109, 140
ノルマン Norman……46, 51, 52, 64
ノルマン王統……65
ノルマンヂー Normandy……51

―― シ ――

ジェームス一世(英蘭王)
James……98, 100, 101
ジェームス(二世)(英蘭王) James……100
シェクスピヤ Shakespeare……92, 121
ジェスイット Jesuit……86
ジェノア Genoa……56, 62
ジェンナー Jenner……122
ジォフレイ Geofrey……65
死海 Dead Sea……4
司教 Bishop……46
四國協約……182
司祭 Priest……46
シシリー Sicily……25, 52, 84
七月革命 July Revolution……143, 144
七年戰役 Seven Year's War……114
執政官政府
Directory Government……131
侍童 Dage……61
シナイ半島 Sinai……4
ジブラルタル Gibraltar……45
ジパング Zipang……75, 76
西比利亞 Siberia……111, 163
シモン Simon……35
ジャヴァ Java……97
暹羅 Siam……164
シャルトル Chartres……60
ジャンヌ＝ダルク
Jeanne d'Arc……67, 68, 69
衆議院(英) House of commons……66
宗教改革 Reformation……70, 81
宗教裁判 Inquisition……86
從士 Squire……61
十字軍 Crusade……55
自由主義 Liberalism……185
修道院 Monastery……63
自由黨 Liberals……100, 185
ジュネーヴ Geneva……184
シュワロフ Shuvaloff……158
ジュピター Jupiter……19, 33
小亞細亞 Asia Minor……12
城砦 Château……62
ジョージ一世 George……101
薔薇戰役 War of Roses……70
初期基督敎建築 Early Christian……60
諸國民獨立戰役
War of Liberation……138
贖宥 Indulgence……81, 82
ジョセフ Joseph……136
ジョセフ一世(獨帝)……104
ジョセフィン Josephine……137
ジョッフル Joffre……174
ジョン(英蘭王) John……65
ジョン二世(葡王) John……71, 77
ジョン十二世(法皇)……53
シラクサ Syracuse……25
シリヤ Syria……3, 5, 18, 25
シルレル Schiller……121
シレシヤ Silesia……112, 113, 114
シレスウィヒ Schleswig……154
新嘉坡 Singapore……161
成吉思汗 Gingiskhan……71
神曲 Diuina Comedia……73
清國……163
信仰保護者 Defender of the faith……90
神聖同盟 Holy Alliance……125, 140
神聖羅馬皇帝
Holy Roman Emperor……53, 135
神聖羅馬帝國
Holy Roman Empire……80, 134, 135
人道學者 Humanist……74
新バビロニヤ……6
新約聖書 New Testament……35

―― ス ――

スエズ Sue……162
スカンヂナヴィヤ Scandinavia……51, 86
スキピオ Scipio……24, 27
スコットランド(蘇格蘭)
Scotland……98, 01
スコラ哲學 Scholasticism……59
スダン Sudan……162
スチヴンソン Stephenson……167
スチュアート家 Stuart……100
ステファン Stephen……52
ストウ Stowe……152
ストックホルム Stockholm……9
スパイエル Speyer……84
スパルタ Sparta……10, 11
スピノザ Spinoza……98
スフィンクス Sphinx……3
西班牙繼承戰役
War of Spanish Succession……104
スペンサー Spenser……92
スラ Sulla……27
スラヴ族 Slavs……52, 171
スルタン Sultan……181

―― セ ――

西印度諸島 West Indies……78
聖ドミンゴ會 St. Domingo……64
聖バーナード會 St. Bernard……63
聖フランシスコ會 St. Francisco……64
聖ベネヂクト會 St. Benedict……64
青年土耳其黨 Young Turks……171
錫蘭 Ceylon……140
ゼウス Zeus……9, 33
世界政策 World Politics……81, 88, 116
セシル＝ローズ Cecil Rhodes……162, 163
セダン Sedan……156
セネカ Senca……33
セバストポール Sebastopol……147
セライェヴォ Serajev……173
セルジュック＝トルコ Seldjuk-Turks……55
塞爾維 Servia……153, 171, 172, 173
選擧法改正問題……160
セント＝ソフィヤ大聖
St. Sophia……41, 73
セント＝ヘレナ St. Helena……139
セント＝バーソロミューの虐殺
St. Bartholomew……93
セント＝ペートル大聖
St. Peter……80, 81
セント＝ミカエルの虐殺 St. Michael……93
セント＝ルイス St. Louis……9

―― ソ ――

總主敎 Patriarch……48, 49
ソヴィエット社會主義共和國聯邦
Union of Soviet Socialist
Republics……182
ソクラテス Socrates……20
ゾラ Zola……166
ソルフェリノの戰 Solferino……148
ゾロアストル Zoroaster……7
ソロモン Solomon……4, 5
ソロン Solon……11

―― タ ――

ダーウィン Darwin……166
第一歐洲大同盟 First Coalition……129
大空位時代 Great Interregnum……54
大憲章 Magna Carta……65
第三回歐洲大同盟 Third Coalition……133
第四回歐洲大同盟 Fourth Coalition……138
第二回歐洲大同盟
Second Coalition……132

カリフ　Caliph …………………………44
カリフォルニヤ　Cali ornia ……………151
ガリヤ　Gallia …………………………28, 39
ガリレオ　Galiles ……………………………74
カルヴィン　Calvin …………………………86
カルタゴ　Carthage ……………………24, 25
樞機官　Cardinal ……………………………102
カルメン會　Carmel …………………………87
カント　Kant ……………………………121, 166
關東州 ……………………………………………163
カンネー　Cannae ………………………24, 25
東埔塞　Camboja ……………………………163

— キ —

ギーズ　Guise …………………………………92
機會均等主義 …………………………………165
議會黨　Parliamentarians ……………………99
騎士　Knight (chevalier) ……………………61
騎士派　Cavaliers ……………………………99
寄進勅書　Donatio constatin ………………50
貴族(羅馬)　Patricians ………………………23
北獨逸聯邦
Noth German Confederation ………155
欽察汗國　Kiptchach Khan ………72, 106
舊約聖書　Old Testament ………………4, 34
キュリー　Curie ………………………………166
キューバ島　Cuba ……………………………165
九龍　Kaulung …………………………………161
恐嚇政治　Reign of Terror ………129, 130
共和黨(米國)　Republicans ………………151
共和暦　Republic Calender ………………130
ギョチン　Guillotine …………………………130
ギリシヤ(希臘)
Greece ……………1, 9, 142, 143, 172
希臘公教
Greek Catholic ………48, 49, 106, 107
希臘風世界　Hellenistic World ……………17
希臘風文化　Hellenism ……………………18
基督　Christ ……………………………………34
基督敎 ……………………………………32, 34, 42
キリストの模倣
De Imitatione Christi ……………………59
キレナイカ　Cyrenaica ……………………171
金印勅書　Golden Bull ………………………55

— ク —

クーデター　Coup d'Etat ………13?, 146
クーテンベルヒ　Gutenberg ………………75
グスタフ=アドルフ
Gustavus Adolphus ………………………95
クセルクセス　Xerxes ………………………13
忽必烈　Khubilai ……………………………75
クライヴ　Clive ……………………………117
グラーヴリーヌ　Greavelines ………………91
旭烈兀　Khulagu ………………………………72
グラックス　Gracchus ……………26, 27
グラッドストン　Gladstone ………………160
クラッスス　Crassus …………………………27
グリーンランド　Greenland …………………52
クリスチヤン四世　Christian ………………95
クリステネス　Clisthenes ……………11, 12
クーリッヂ　Coolidge ………………………184
クリミヤ戰役
Cremean War ……124, 126, 147, 157
クレオパトラ　Cleopatra ……………………29
ダレゴリー二世　Gregory ……………………48
グレゴリー七世　Gregory ……………………53
クレマンソー　Clemenceau …………………174
クロヴィス　Clovis ……………………………49
グロチッス　Grotius …………………………98
クロンウェル　Cromwell ……………………99

— ケ —

啓蒙的風潮　Illuminism ……………………120

ケーザル　Caesar ……………………27, 28
ケーザル暦　Caesar …………………28, 30
形像破壞派 ……………………………………48
形像崇敬派 ……………………………………48
ゲーテ　Goethe ………………………………121
ケープ植民地　Cape colony ………………140
契約の櫃 …………………………………………5
ケーロネヤ　Chaeronea ………………………16
楔形文字　Cuneiform ……………………………4
ケマル=パシャ　Kemal Pasha ……………181
ゲルマニヤ
Germania …31, 36, 37, 38, 39, 61, 63
ケルン　Köln ……………………………………62
祆敎　Zoroaster …………………………………7
元老院(羅馬)　Senate ……………………28, 29

— コ —

ゴア　Goa ………………………………………88
航海條例　Navigation Act …………………123
コーカサス　Caucasus ………………………163
康熙帝(聖祖) …………………………………111
工場手工業　Manufacture …………………122
廣州灣　Kwangchauwan ……………………164
膠州灣　Kiaochau Bay ……………………164
公安委員會
Committee of Public Safety ………130
國民協會　National Convention …………127
國民主義　Nati nalism ………………………183
國際主義　Internationalism …………………183
國際聯盟　Leag e of Nations ……178, 180
國粹主義　Fos cism …………………………183
國粹黨　Fascisti ……………………………180
ゴシック式　Gothic ……………………………60
五善帝　Five Good Emperors ………………31
黑海　Black Sea ………………………………110
コペルニクス　Copernicus …………74, 122
コーラン　Koran …………………………………43
コリニー　Coligny ……………………………92
コリント式　Corinthian Order ………………21
ゴルチャコフ　Gortchakov …………………158
コルデー　Corday …………………129, 130
コルドヴァ　Cordova …………………………44
コルネイュ　Corneille ……………105, 121
コルネリヤ　Cornelia …………………………27
コルベール　Colbert …………………………103
コロセウム　Colosseum ………………………33
哥倫比亞　Colombia …………………………142
コロンブス　Columbus …………………………77
コンスタンチヌス大帝
Constantine ………………………32, 36, 50
コンスタンチノーブル
Constantinoplus ………32, 72, 73, 158

— サ —

柴棍　Saigon …………………………………163
サクソニヤ　Saxony ………………108, 112
サハラ　Sahara ………………………………164
ザマ　Zama ……………………………24, 27
サラセン(大食)　Saracens …37, 43, 47, 50
サラセン帝國　Saracens ………43, 44, 65
サラミス　Salamis ……………………………13
サルヂニヤ　Sardinia ………………………147
產業革命　Iudustrial Revolution …………123
サン=ヴィターレ　St. Vitale ………………41
三十年戰役　Thirty Year's War ……80, 93
サン=スウシ　Sans Souci …………………115
サン=ステファノ　San Stefano ……………158
三國協商　Triple Entente ………169, 170
三國同盟　Triple Alliance 124, 159, 160, 169
三頭政治　Triumvirate (第一回) ……27, 28
三頭政治　Triumvirate (第二回) …………29
サン=ベルナルド　St. Bernard ……………133
三部會　States General ………67, 126, 127
三位一體 …………………………………………48

アンドラッシー Andrassy……15
安南 Annam……163
アン=ボレイン Anne Boleyn……90

―― イ ――

イエス=キリスト Jesus Christ……34
イェナ Jena……135
イェホヴァ Jehovah……4
イェルサレム Jerusalem……34, 55
イェルサレム王國 Jarusalem……56
イオニヤ式 Ionic Order……21
イオニヤ族 Ionians……11, 12
威海衛 Wehaiwei……162
イクチヌス Ictinus……20
イグナシウス Ignatius……48
イグナチウス=ロヨラ
Ignatius Loyola……86
イサベラ(カスチラ女王)……70, 71, 77
イシス Isis……2
イスラエル Israel……4
イスラム教(回教) Islam……42
イスランド Iceland……52
イソップ物語 Æsop's Fables……19
伊太利戰役 Itarian Wars……84
伊土戰役……171
イブセン Ibesen……166
移民制限法……182
インペラトル Imperator……28
イリヤッド Iliad……19
イルカン(伊兒汗) Il Khan……72
イルクック Irkutsk……111
イレネ Irene……48
イワン三世 Ivan……106
イワン四世 Ivan……106, 111
イングランド(英蘭)教會
Church of England……90
印紙條例 Stamp Act……117
印度帝國……162
インノセント三世 nnocent……54

―― ウ ――

ヴァージニヤ Virginia……91
ヴァージル Virgil……33
ヴァスコ=ダ=ガマ Vasco da Gama……77
ヴァチカン Vatican……2, 10, 150
ヴァロア家 Valois……67
ヴァン=ダイク Van Dijk……98
ヴァンダル Vandals……39, 40
ウィーン會議 Vienna……124, 139
ヴィンセント=ド=ボーヴェー
Vincent de Beauvais……59
ヴィクトリヤ女王 Victoria……159
ヴィクトル=エマニュエル二世
Victor Emanuel……148, 149
ウィッテンベルヒ Wittenberg…81, 82, 83
ウィリヤム(英蘭王) William……64
ウィリヤム(オレンジ公) William……90
ウィリヤム一世(普王獨帝)…153, 156, 157
ウィリヤム二世(獨帝) William……169
ウィリヤム三世(英王) William……100
ウィルソン Wilson……178, 179
ウェストファリヤの條約
Westphalia……80, 96
ヴェニス Venice……56, 62
ヴェネズエラ Venezuela……141
ヴェネチヤ Venezia……150, 151
ヴェラスケス Velasques……121
ウェリントン Wellington……139
ヴェルサイ宮殿 Verasailles……105, 156
ヴェルサイ講和條約
Versailles……178, 182
ヴェルダン Verdun……50
ウォルター=ローリー
Walter Raleigh……91

ヴォルテール Voltaire……120
ウォルムス Worms……53, 84
浦鹽斯德 Vladivostok……163
ウルバン二世 Urban……55

―― エ ――

永世局外中立國……144
英佛聯合軍の役……161
エウフラテス Euphrates……3
エグバート Egbert……64
エーゲ海 Aegean Sea……1
埃及 Egypt……1, 2, 162
埃及王國 Egypt……18
エストニヤ Esthonia……179
エチオピヤ Ethiopia……7
エヂソン Edison……167
エドワード三世 Edward……67
エドワード七世 Edward……170
エパミノンダス Epaminondas……15, 16
エピクテツス Epictetus……33
エリザベス(英蘭女王) Elizabeth…90, 91
エリザベス(ヨーク家王女)
Elizabeth……70
エルザス Elsass……156, 178
エルバ島 Elba……138
エルフルト Erfurt……83
圓顱派 Roundheads……99

―― オ ――

オヴィヂウス Ovid……33
王黨(英) Royalist……99
王權神授說 Divine Right of King……99
墺地利繼承戰役……112
オクスフォード Oxford……59
オクタヴィヤヌス Octavianus……28, 29
オストラコン Ostrakon……12
オストラシズム Ostracism……12
オスマン Osman……72
オスマン=トルコ Osman Turks……72
オスマン=パシャ Osman Pasha……158
オスロ Oslo……51
オヂッセイ Odyssey……19
オットー大帝 Otto……37, 52, 135
オドアケル Odacer……39
オベリスク Obelisk……3
オホーツク海 Okhotsk……111
オリンピヤ Olympia……8, 9, 10
オルレヤン Orleans……67, 68, 69
オルレヤン家 Orleans……144
オレンジ自由國 Orange……162

―― カ ――

ガイセリック Gaiseric……39
カヴール Cavour……149
ガウス Gauss……167
カールスタイン城……60
革新文學……120
過激思想 Bolsheviki……176
家憲(典範) Pragmatic Sanction……112
カザリン(佛王后) Catharine……92
カザリン(英王后) Catharine……90
カザリン(ルーテルの妻) Catharine……83
カザリン二世(露帝)
Catharine……109, 111
カスチラ Castile……57
カタコム Catacomb……34
カタラウヌム Catalaunum……39
公敎聯合 Catholic League……95
カナダ(加奈陀) Canada……116
カナーン Canaan……4
カノッサ Canossa……54
カペー朝 Capet……67
カムチャッカ半島 Kamchatka……111
ガリバルヂ Garibaldi……149

索引

―ア―

頁
アーヘン Aachen ……114
アークライト Arkwright ……122, 123
アイスツルフ Aistulf ……50
愛蘭(アイルランド)問題 ……160
アウグスツス Augustus …… 29, 30, 31, 34
アウグブルグ Augusburg ……85, 94
アウステルリッツ Austerlitz ……134
アクチウム Actium ……29
アクロポリス Acropolis ……12
アスパシヤ Aspasia ……20
アゾフ Azov ……107
アダム=スミス Adam Smith ……121
アッシシ Assisi ……64
アッシリヤ Assyria ……5, 6
アッチカ Attica ……11
アッチラ Atila ……39
アテネ Athens ……9, 10, 11, 14, 21
アデルベール Adelbert ……67
アデン Aden ……161
アドリヤ海 Adriatic Sea ……170, 179
アフガニスタン Afganistan ……162, 163
アブキール Aboukir ……132
アフフ=マツダ Ahura-Mazda ……7
阿弗利加縦貫鐵道 ……163
鴉片戰役 ……161
アムステルダム Amsterdam ……9
亞米利加 America ……78
亞米利加合衆國
United States of America ……118
亞米利加聯邦
Cenfederate States of America ……151
アメリゴ=ヴェスプッチ
Amerigo Vespucci ……78
アラゴン Aragon ……71
アラビヤン=ナイト Arabian Nights ……45
アラベスク(回教式) Arabesque ……45
アリストートル Aristotle ……20
アルカラ=ザモラ Alcala Zamora ……185
アルキメデス Archimedes ……24, 25
アルジェリヤ Algeria ……163
アルバート Albert ……59
アルバニヤ Albania ……172
アルファベット Alphabet ……5
アルフォンゾ十三世 Alphonso ……185
アルプス山 Alps ……24, 133
アルベラ Arbera ……16
アレクサンドリヤ Alexandria ……17, 18
アレクサンドル大王
Alexander the Great ……8, 16
アレクサンドル一世 Alexander ……140
アン(英女王) Anne ……101
アンクル=トムス=ケビン
Uncle Tom's Cabin ……152
アングロ=サクソン Anglo-Saxons ……39, 64
アングロ=マイ=ウス Angro-Mainyus ……7
アンゴラ Angora ……181
アンジュー Anjou ……65
アンデレ Andrew ……35
アントワープ Antwerp ……9
アントニウス Antonius ……29

昭和七年九月廿五日印刷
昭和七年九月廿八日發行
昭和八年一月廿三日訂正印刷
昭和八年一月廿六日訂正發行

新編西洋歴史改版奥付
定價金壹圓

著作權所有
不許複製

著作者 山崎忠雄

發行者 東京市神田區西神田一丁目三番地
株式會社 帝國書院
代表者 增田啓策

印刷者 東京市京橋區銀座西二丁目三番地
高橋郁

發賣所 東京市神田區西神田一丁目三番地
株式會社 帝國書院
振替東京六七〇一四番

關西販賣所 大阪市東區横堀四丁目三番地
三宅莊藏書店
振替大阪六九番

広島大学図書
2000064446
庫
3
46